



陶のランプ

素溪（健一郎）

花材 ガズマニア・ディスティフロラ（アナナス科）

モンステラ（里芋科）

花器 サボテン型陶製ランプ

私、『ホッホちゃん』とケンちゃん』のちっちゃかったケンちゃんは昨秋21歳になりました。

最近、「花あそび」と題して様々なものと生け花を掛け合わせて、現代における新しいいけばなのあり方を模索しています。

祖父と祖母の花あそびは、私の身の回りにある好きな物を使って花と掛け合わせていくものでした。幼く花にさほど興味のない私の目から見ても目を引くものがあり、花に興味を持ったことを覚えています。

生け花に興味のない方にも、私と同じように花以外の入り口からでもいいので、生け花の道に巻き込んで行きたいと最近強く思うようになりました。自分なりの解釈で様々なものと生け花を掛け合わせる事を楽しんでいます。

写真は友人が作った陶のランプです。明かりの代わりに花で命を吹き込みました。



インスタグラム
(@ken161022)



いけばな写真を
投稿しています！



①ポパム純子さんと。②カフェでのレッスン。③右から2人目がクララ。④公園清掃奉仕をして切った枝とガーベラの生花。

イギリスで学んだ事

桑原素溪（健一郎）

「ジェントリー、ジェントリー（優しく、優しく）」満面の笑みで私の真似をしてくれているのがクララだ。

クララは賢いが人に見せびらかすなんてことは一切せずに、黙ってみせる。誰にでも好かれるタイプだ。ガーベラだって食べる（実際には食べていない）。彼女は唯一、私が滞在中の教室に全て来てくれた。彼女はずっと、ジェントリーと言っている。私の言おうとしている事が伝わったみたいだ。

生け花という概念のないイギリスでお花を教えることになった私は生け花の説明からしなくては行けない。格式高いという偏見がないので、気軽に生け花に参加してくれる。英語を上手に使いこなせない私は、すべての教室で生徒さんたちに対して、2つのことだけを教えることに専念した。

まず1つ目が「空間の美」である。古来中国絵画が始まったとされる空間における絵画での「気」の表現は西洋絵画には見られなかったものだ。何もないところには何も描けないが、確かにそこに感じる何かは存在している。その何かは「気」であり、それが「空間の美」である。空間に対する認識の違いは、花文化にも現れている。フラワーアレンジメントはお祝い事に使わ

れることが多く、綺麗な花を多く使う360度どこから見ても綺麗なように花で空間を埋め尽くす特徴がある。一方、日本の生け花は床の間に飾ることを前提としており、正面から見て綺麗なものが評価される。そして花と花、枝と枝の空間に美を感じる心が生け花を生け花たらしめている。日本人や中国人だけが感じるであろう空間の感覚を伝えることは難しいと考えていたが、お弟子さんの中には「何だか分からなけれど、この花と花の空間がとても好きだわ。ここは直さないでね」という方もいたので、花と花の絶妙な空間に特別な感覚を少しは感じ取ってもらえる事できたと思っている。

そして2つ目が一番大切な、「お花に優しくすること」これは私が一番伝えなかったことだ。お花をぞんざいに扱ったり、踏んでもなんとも思わない人たちが時々いる。忙しい日々の中で自分のことで手がいっぱいなのだろうか。私はこの原因が植物と人間の「死」の違いにあると考えている。人間や動物の死は個体的で明確なのに対し、植物の場合は根っこが死んでいなければ他の部分が枯れても死にはならない。植物はどこまでが個体なのか分からないので、「死」そのものが曖昧になってしまうのではないだろうか。私はわざわざ切り花のお花を生けている以上はその命に感謝し、慈しむことを彼らに伝えたかった。デモンストレーションをするとみんな



なが次々にお花を生け始める。およそ生け花が似つかわしくないであろう彼らが、一本一本の花を水切りし、葉の一枚一枚を丁寧に撫でていく光景は感慨深かった。一人だけ3回すべての教室に参加してくれたクララは、最終日になるとガーベラを食べてしまいたくなるほど花と仲良くなり、とびつきの笑顔で笑っている。

最後にはなりますが、教室英語が慣れない私の言葉に必死に耳を傾けながら理解しようとしてくれた皆様、本当にありがとうございました。イギリスに行く2週間前にいきなり連絡をとったのにも関わらず、5週間もの生け花合宿の機会を設けてくださった純子さんには感謝しきれません。長い間お世話になりました。また京都で会えるのを心から楽しみにしています。

ティムさんの庭で

△9頁の花▽ 素溪

花材 薄の穂(稲科)

百合(百合科)

西洋接骨木(忍冬科)

花器 陶扁壺(ティム作)

マンチェスターの陶芸家ティムさん宅を訪問し、庭の草木に百合を加えてティムさんの作った花器にいた。竹のような黒い葉の枝はセイヨウニワトコ(エルダー)で黒い実が生る。魔除けの力があり、映画ハリイポッターでは最強の魔法の杖になっている。



毎日ステーキ

健一郎

花型 砂の物

花材 松(松科)

白梅(薔薇科)

椿(椿科)

花器 銅砂鉢

「健ちゃん毎日ステーキを食べられる性格やな」と言われた事がある。同じことを新鮮そうにしている私のことを揶揄したものだ。祖父からの遺伝なのだろうか。毎日でも食べたくなる。実際にお肉を毎晩食べたいと副家元に提案して見たら霧吹きで返り討ちにされた。今だけに妙案だと思っているのだが。

なぜ毎日お肉を食べることができののか分析して見たところ、どうやら感謝の気持ちと、今を感じる力が毎日お肉を美味しく食べるための秘訣なのではないかと思う。今を感じる力はその時の自分のコンディション、一緒に食事をする相手、話す内容など、毎日同じものではなく、その日その日の今を生きる力を指す。見かけの上では過去の場面と酷似しているように見えても全く別物だ。

にちようけつしつ
日日は好日

あまりにも有名な雲間文假(唐末の禅僧)の言葉だ。色々な解釈があるとは思いますが、私は肩肘を張らずにあくまで自然体でその時その時を全身で感じることで

はないかと自分なりに解釈をしている。

日々の出来事を新しく感じるためには豊かな感性が必要だ。同じものを見ても、人の数だけそのものを見た時の感じかたは異なる。Tボーンステーキを見た時に、アメリカみたいなステーキという解釈をする人もいれば、サーロインとヒレの2つの味が楽しめるステーキで骨から近い部位なので骨液から旨み成分が染み出て美味しいよねと感じる人もいる。二人ではもちろん後者の方がお肉を毎日食べられそう。

物事を細かく捉える力が洗練されていくと、みんなにとつての同じものが同じもので無くなる。

今大学4年目の春休みを迎え、毎日自分のしたいことでスケジュールはいっぱいだ。どれも自分の興味を追求するものばかりで、大忙しだ。手当たり次第に片っ端からしたい事をする。将来になりたい自分と、自分の興味が一致しているのがまた面白い。今回の立花もしたいことの1環であり、将来になりたい自分に近づくための一歩である。

明日の事を考えると鼓動が早くなり、眠れなくなることがよくある。明日は何をしよう。あまりにもしたいことが多すぎて自分が今ここにいない時がたまにある。禅のトレーニングの一環で一ヶ月の間ステーキを食べるという提案を、改めて副家元してみようと思う。



木瓜と椿の生花 健一郎
花型 草型 副流し
花材 木瓜（薔薇科）
椿（椿科）
花器 天女文銅花瓶

ベトナムにて

健一郎

ベトナムに着いても実感が湧かずにいた。ツアー旅行では1人でどこかに行くことがなかなか難しい。次の日の朝は早起きをしてホテル周辺を探索してみることにした。

ホテルから一歩出るとタクシーはもちろん、バイクの2人乗りで駅まで送ってくれる人で溢れかえっている。「안녕」「你好」「ここにちは」下手な鉄砲を幾つも躲かしながら目抜き通りまで歩いた。すると前輪が2つ後輪が1つの三輪自転車車の前に座席を取り付けた人力タクシーのお兄さんが拙い日本語で乗らないかと話しかけてくる。断つて散歩を続けようとしてもしつこく乗らないかと言ってくる。乗りませんときつく言い返そうとしたタイミングで握手を求められた。いざ握手をしてみると

感じの良さそうな人だったので乗ることにした。運転手によるとこの乗り物はシクロというらしくなかなか乗り心地が良い。どこか行きたいところはないかと聞かれた。ベトナム人の生活が見たい旨を伝えると、ハンドルを反対に切り、細い道に入った。そこで見た光景はまるで映画の中に入り込んだような世界だった。

学校に行く前に外の屋台で朝食を済ます学生、2人乗りのバイクに4人で乗る家族、バイクの5倍もある荷物を上手いこと運んでいる様はま

るで曲芸師の様だった。携帯電話で写真を撮ろうとするとバイク乗りに盗まれる可能性が高らしく、そういう状況では好奇心が更に強く刺激される。1時間ほどガイドしてもらった後80ドルを支払ってホテルに帰った。後から聞いた話によるとベトナムの物価では2ドル〜3ドルで乗れるらしい。完全にしてやられた。握手をした時に勝負は決まっていたらしい。

今世界のどこに行ってもあるブランド街や、観光地の大衆化でその国ならではの文化が過去のものになりつつある。各地に散りばめられている、僅かな歴史の残り香を嗅ぎ分けられるように嗅覚を鋭敏にしておきたい。全身でその土地を感じ、生け花で表現をする。そんな贅沢な事は是非してみたいものだ。



ジョージアの角杯 かくはい

健一郎

花材 プラシノキ（フトモモ科）
黄タクロリオサ（百合科）
花器 角杯（ジョージア製）

ジョージアの蜜の市で手に入れた
ワインを飲む角杯。ホテルの部屋
ではラッパスイセンを飾って楽しん
だ。赤ワイン色のプラシノキがよく
似合う。



横から見た奥行き



ジョージアの国旗。アナヌリにて。

卒業旅行

健一郎

大学生活最後の春休みにあたり私の卒業旅行という名目で初めて家元と服家元と3人だけで旅行をした。大学の成績が1単位足りなかった。大学の卒業は半年先だが、たので実際の卒業は半年先だ。

旅行先はワインとパン、ヨーグルト発祥の地であるジョージアという国。目的は食事、自然、芸術だ。元ロシア領で旧国名はグルジア。黒海とカスピ海に挟まれたコーカサス地方にある。交通の要衝であつたため古代から諸外国の侵略を受けてきたが、ソ連崩壊とともに1991年共和国として独立した。未知の国なので3人とも好奇心を否応なく刺激される。首都トビリシの地下道に落書きがあつた。



「ムンクや!」

「壁に落書きをしないですってこと?」

「権力にペンで対抗してる絵かな?」

「いんでペンでんす? (独立の意)」

『叫び』は不安や絶望を象徴してるから、ひょっとしたら政府が市民たちの反乱で、てんでこまいになってるんとかやうか?」

感じた事をテンポよく言い合うので複眼的に物事を捉えられる。単眼になりがちな私にはちょうど良い。

トビリシからの日帰りツアーを現地で申し込んで小型バスに乗る。鳥の糞が媒介となつて他の木に寄生するヤドリギという植物が、同じ種類の木に数多くできていたのを疑問に思った。すぐさま2人に質問をぶつけてみた。

「鳥がお尻を拭きやすいからかな?」

「木も選んでるんでしょ」

「宿りやすい木があるのと違う?」

様々な意見が出てきてさらに考えが広がる。事実はどうだつていい。実際に自分達が鳥や木の気持ちになつて考えてみるのが面白いのである。家元が演じる鳥の気持ちと、服家元が演じる宿られる木の気持ち、そして私のヤドリギのタネの気持ちはインターネットには載っていない。それぞれ一役終えるとまた頭の中で各々、別の役になる。3人のそれぞれに偏つた知識と想像力を、俯

瞰してみるのが面白くて楽しい。

旅行に出かけると様々なアイデアが生まれる。時間を気にしないで生活できる旅行は心にゆとりを持たせ、普段気にも留めないことにも関心を抱く。私が思うに忙しい空間では芸術は発展しにくく、想像力も働かない。普段は意図して時間を作り御所なんかを散歩して満足してみるが、旅行はやはり特別なものである。できればその旅行は分刻みで有名な観光地を巡る観光の旅行ではなく、その地域の人とコミュニケーションを取つてみたい、その地元の人を実際にして生活をしていて見ることがより好ましい。新たな価値観や感性を垣間見ることができからだ。もつとも観光地の中でもその人の持つ技量によつては美的感性を磨くこともできる。

ここ最近、私の旅行に行く目的は感性を豊かにすることにある。非日常の空間では多くの発見がある。今年の春の8回の卒業旅行では、特に意識することができ、様々なものに想いを馳せてきた。有機物も無機物も関係ない。多角的に物事を捉える練習をしている。まだ22年しか生きていないが、今のところは人生の豊かさは「感性の豊かさ」にあると考えている。お金と違つて使つても使つても無くなり、使えば使うほど豊かになつていくのも気に入っている。そしてそれは自分の頭で考え

られなくなるまで貯蓄できるらしい。

心の動きの分かりやすい指標として涙というものがある。一般的に感情の涙というものは感情が高ぶつた際に最も多く分泌されるらしい。

競争心が強い私は弟の順之助にボーリングで負けるとトイレに行き目を腫らして帰ってくる子供だった。私の強かつた私はそれ以降もほとんどが悔し泣き。ところが去年の夏のマンチェスターで木の枝をきらせてもらった時に号泣してから、悔しさ以外のことで目に涙を貯める事が多くなった。昨日は三条通商店街で「よさこい踊り」をしている懸命さに目頭が熱くなった。なんて楽しそうなんだろう。そこから広がるその人のストーリーを想像してしまう。

いつかなんでもない空を見ただけで涙を流せるようになる日でもくるのだろうか。ただ美しいだけで涙した経験がまだ無い。それは美しいものを見ていなかったのではなく、美しいものを見れる自分にまだ成れていないからであろう。

なんでもない空に涙する人が生けた花はどんなに強く、美しいのだろう。半年留年してできたこの時間に感動の敷居を下げる訓練をしようと思う。



ジョージアの東端、シグナギのボドウベ修道院。グルジア正教会は厳肅なので、女性はスカーフ、スカート姿でないと入れない。



「ワインを飲む人」の銅像。原型は紀元前7世紀のもの。角杯を持って宴席を盛り上げる役目の人だそうだ。トビリシにて。



南天若葉の立花

健一郎

『やつてみなはれ』家元は何を提案しても首を縦にしか振らない。道徳的に間違っていないければ何をしてもいい家である。そんな中、ここ数年で初めて首を横に振った提案が、この南天の新芽を使った立花である。確かに南天は冬を代表する花の1つで正月によく使われる。赤い実が愛らしい。花の命を大事に思った上で最高に美しいタイピングでお花を摘み取り器に生ける。そのためむやみやたらに花を生けることはできない。

植物には旬しゅんがあり、どの時期が一番美しいのかも幼い頃から教えられてきた。南天の旬は冬だと分かっているが、新芽の青々とした南天を眺めていると、それは大層魅力的に見えるのである。

ここ最近物事の見方が変わってきた。花の旬という概念があやふやになってきた。どの瞬間を切り取っても、その時にしかない美しさがあると思ってしまう。発芽した時の愛らしさ、青々とした新芽、花が咲き、枯れ、老木になつてさえも魅力は存在し続ける。それぞれが全て美しく、好みはあれど、その美しさに差はない。

どのタイピングであれ、花の命を摘み取り、人間が綺麗だと感じられるように器に再現する「華道家」。

それは神様のようにも思えるし悪魔のようにも思える。少しでも花の事を正確に知り、敬意を表す事は必要最低限の花に対する礼節でもある。もつともこれも人間側の都合なのだが。

一方で、植物が生物界を支配しているという考え方もある。地球上の生物量（バイオマス）の内、99.5%~99.9%は植物の細胞が占めているらしい。地面、空気、太陽だけで生活することができ、常に捕食者たちから狙われていたために、リスクを分散しており、どの部分を食べられても死を迎えるわけではない。植物の死の曖昧さにはいつも頭を悩ませられる。種によっては様々な虫や動物たちを手玉に取り花粉を運ばせている。いつからか、この虫や動物の中に人間という生き物が含まれている気がしてならない。人間に気に入れた種の繁栄は人間が滅ばない限り保証されている。

人と植物の間わりは複雑だが、『やってみなはれ』という魔法の言葉で、私はいつしかいけばなの世界に引き込まれてしまった。そして花を敬う気持ちも次第に強くなってきた。私と植物の間わりは、より広くなり深くなつてゆく。



初夏の杜若生花かきつばた

健一郎

花型 生花 三花五葉 行型

花材 杜若あやめ (菖蒲科)

花器 祥瑞染付水盤

この生花をいけた後で、大田神社の沢に群生する杜若を見に行った。緑の中に浮かぶ紫色。花の格を見せつけられた。その姿は尾形光琳の『燕子花図屏風』を彷彿とさせた。光琳は杜若とどれだけの時間向き合っていたのだろう。杜若の格をよくよく表現できていると感心する。

先日、生まれて初めて絵を描き始めた。バイクで京都北部の美山へ行った時、見た景色を絵に起こしてみたいと思ったのだ。奥の方から山の谷に沿って川が流れ、目の前には藤がこれでもかというくらいに咲きそろい、大木は藤に生気を吸い取られている。そして若い青紅葉が一面に咲いていた。写真では無駄な情報が多すぎる。私が意識しているところだけ写すなんて都合のいいことはできない。墨で山水画にしようとするが、頭の中だけで手が動かない。頭の中の絵は私の独り占めである。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019 年
7 月号
No.673

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





杜若と河骨の立花

表紙の花 健一郎

花型 立花 杜若一色 除真
花材 杜若 (菖蒲科)
河骨 (睡蓮科)

花器 陶花器

先月のお生花に続き今回は杜若の立花を立てた。まだまだ拙い立花だが、自分の力を出し切れているのでそんなに悲観的でもない。むしろ満足しているとも言えるだろう。ここ最近大切だと思っていることが一つある。花との思い出だ。数ある花と自分だけの思い出を作っていく。今回の杜若は、大田神社に行き写真を撮ってその後5月末までスマートフォン待ち受け画面にした(右の写真)。

河骨は岡山池で朝早くから採取する所を見学させてもらった後、岡山先生と立花を立てた。蓮根農家



斜め横から見た奥行き

二足の草鞋

健一郎

今年の5月からもう一足草鞋を履くことにした。一足目はいけばなの先生。二足目は介護の職員だ。融通のきく非常勤で雇ってもらっている。一足目をより追求するための二足目の草鞋だ。

花と向き合う時によく考えてしまうテーマが2つある。「美」と「命」だ。

お花と向き合った時に感じる感情のうちの一つである「美しい」という言葉。美しいってなんだろう。よく考えてみるとこの言葉のあやふやさに気づく。綺麗なだけでは美しいと言えない。可愛らしいだけでも美しいではない。漲る生命感だけでもいい。様々な感情が幾重にも重なり合って生まれてくる感情ではないだろうか。花の美しさを存分に引き出せる華道家になりたいと考えている私は、美しいとは何かという疑問にぶつかった。

そもそも考えられるほどに美を知っているのだろうか。とりあえず美と身体で向き合ってみることにした。まず初めに美しいとされているものを片っ端から体感する事にした。オペラのコンサートに行ったり建築物、絵画など沢山の洗練された綺麗なもののの中に身を置いた。その中で気づいたことがある。各分野の

洗練された作品は、ある一定のレベルを超えたものは素人目に見ても素晴らしいものである。そして、自然と向き合ってできたものであることが多く。全てのものは元を辿るとほとんど全てが自然の物に帰着する。陶芸でもそう。土、水、火と真剣に向き合った方の作品には他には無い凄みを感じる。人為的な作風が見え透いた作品はどこか凄みに欠ける。作品に飽きの来ない豊かな興行が必要なのである。それは人的な作風が見え透いた作品よりも、自然らしい作品の方が飽きの来ない豊かな興行を持っているのではないだろうか。

幼い頃より綺麗なものに囲まれて育った私は自分の美的感覚を持つてはいるが、汚い物への耐性は皆無だ。副家元曰く、食事中に一言でも汚い言葉を誰かが発してしまうだけで食欲が失ってしまう子供だったらしい。でも介護の現場ではそんなことは言ってもらえない。ご家族が諸事情で世話できなくなった高齢者の生活の手助けをするのだが、今までの人生の中で一番人間というものに向き合えている。綺麗なものを見て培った美的感性だけでは厚みが無く、美というものと真摯に向き合えていないと感じている。美を大きく捉えることができそう。

2つ目のテーマが「命」である。

高齢の方を対象としているだけあって命と向き合う時間が多い。幼い頃から死については祖父と議論していた事もあり好きな時間でもある。だが何度考えても死が謎だという事が分かるだけだ。生け花をしていると幾度となく命と向き合わざるを得ない。命という物が少しでも分かれば自分の作品に大きな影響が与えられるような気がしてならない。どこか根源的な美しさが引き出せるかもしれないと睨んでいる。

「美」と「命」の観点から介護職の魅力について話してきたが、介護職の魅力はこれで収まりきらない。介護職員の方達の人柄の良さも魅力の一つだ。介護業界の人達のホスピタリティあふれる行動と笑顔にはいつも驚かされる。相手に対する気遣い、配慮、全てが高い次元でなされており、息を吐くように人を承認する。そして、尊老の方と接する機会が多いことも魅力だ。長い人生を歩んでこられた方達の幾度とない忘却にさらされ、風化されたアイデンティティから学ぶべきものは少なくないはずだ。これだけ書いてもまだまだ書ききれないほど楽しい職ではある。

こういう風の吹き回しか、弟の順之助も介護の職につくらしい。家の大人3人は認知症になったら手厚いケアをしてもらえると喜んでいる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2019年
8月号
No.674

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ハス

△表紙の花▽ 健一郎

花材 蓮(蓮科)

羊歯(羊歯類)

花器 ガラス花器

共感覚：ある刺激に対して通常の感覚だけでなく異なる種類の感覚をも生じさせる一部のの人に見られる特殊な知覚現象である。

こう言った特殊能力には憧れる。

音を聞き形を思い浮かべたり、文字に色を感じたりといった言わば特殊な能力である。人にもよるがこの共感覚にはある程度の規則性があるので、いくつか答えを聞いているとなんとなくではあるが予想できるのである。予想が外れた後の回答と解説は、同じ感覚を有していない私からすると不気味な説得力があるのだ。

細工ものを作るときに頼っている手先が器用な知り合いが書いた絵を見て欲しい。私の生けた作品がこう見えて仕方がないらしい。もちろん私がハスに抱く思いなんて関係がな



い。いけばながエイリアンみたく見える共感覚はさほど羨ましくないが、いけばなの解釈の広さと共に可能性を感じた。



横から見た奥行き

11人の僕

健一郎

小学生の頃、人より少しサッカーが得意だった私はチームメイトに対して腹を立てていた。僕が11人いたら勝てるのに。そんな時、母は私に言った。「あんたはよその子と違うし、よその子もあんたとは違うやうに小学校では習った記憶がある。

ろ？」一年に二、三回はふと思いつきさせられる言葉だ。その後も表現を変えて何回も言われることになる。「世界中あんたしかいいひんかったら牛が絶滅してしまうわ!」「あんたみたいにやかましいのが2人になることすら想像したないわ。」散々な言われようだ。

中学校を卒業する頃になってやっと言葉の意味がわかった。高校の進学の時である。

小学校の頃から勉強は得意ではなく、私の通知表を見た母も、体育の成績以外は特に触れないでいてくれた。むしろ体育の成績ばかり認めてもらえるので運動が好きなのも相まって益々精が出た。そんな運動バカは算数や国語などの悪い成績は気にしておらず、いつも成績表を誇らしげに見せていた。高校の進学のタイミングで意識した通知表。初めて自分に短所があることに気がついた。

自分の短所を認識できるようにすると自分の中で、「あんたはよその子と違うし、よその子もあんたとは違うやろ？」という言葉が腑に落ちた。するとなぜか、人の見え方が一気に変わった。障がい者の人を見かけても、可哀想だと思わなくなったのだ。「障害者の方たちは私たちとは違って普通に行えることが出来ないから助けてあげなさい。」そのように小学校では習った記憶がある。

だが私は障がいのある人を見かけても、特別な感情をもたなくなってしまう。というよりは過剰な意識をしなくなったとも言えるかもしれない。電車では他の人に席をゆずる事との違いがよく分からないのだ。皆んなが意識するほど大きな差があるようにはとても見えなくなった。

現在、認知症の人しか入れない施設で介護の職に従事している。それが楽しくて仕方がない。「お兄ちゃん楽しそうやね」「お兄ちゃん幸せそうやね」利用者の人は言う度に、新鮮な目で評価を下さる。

認知症の人は、よく物を忘れてしまふ。主に短期記憶がおぼつかない。ついさっきお昼ご飯を食べたのに、まだ食べてないとクレームを受けることにも、もう慣れた。お昼ご飯を食べていないと言っている人に「さっき食べてたでしょ？」なんて言うものなら大変なことになる。「お腹が空いていますか」と尋ねる方がよっぽどスムーズに話の折り合いがつく。前者と後者の違いは何か。前者は認知症の人が感じていることではなく、事実を目を向けている。後者は事実ではなく認知症の人が感じていることを受け入れ、共有の事実として話を進めているのだ。

認知症の症状がない人との会話でも、話が平行線のまま交わることがない光景をよく目にする。自分が話

したい話を話している人にその傾向がある。相手が話して欲しいことを感じ取りながら話す事が、会話の基本だと今のところ考えている。ただ単に気を遣って遠慮しながら話す言葉は、結局は自分の事しか考えていず、相手に迷惑をかける。なので簡単そうでも難しい事ではあるが相手に気持ちに向けて話す鍛錬にはもってこいだ。

人はその場にあつた適応行動をする。先ほどの昼食の例で考えると、お昼ご飯を食べていないからお昼ご飯の要求をするのだ。何も不思議なことではない。これも認知症の人だけに当てはまる問題ではないと思ふ。症状がない人の場合も、勘違いや思い込みが入り混じって会話をすることがよくある。言葉の定義があやふやな場合もあるし、物事の認識の差異から生じる場合もある。とはいっても、認知症の症状が進んでいる人はその誤差の程度は確かに大きい。だが、誰しもが思い込みや、勘違いの中で生きている。もし、この思い込みや勘違いの中で生きていない人がいれば、それが勘違いである。人間としての本質は同じである。私はよその子と違うし、よその子は私とは違うのである。



姫蒲の盛花

△10頁の花▽ 健一郎

花材 姫蒲ひめがま（蒲科）

鶏頭けいとう（鳶科）

擬宝珠ぎぼし（百合科）

花器 ガラス鉢

私の家では調子にのつていと必ず釘を刺される。釘にもかなりの数があるのだがその中に『因幡の白うさぎ』のうさぎにならんときゃ」というものがある。調子にのつて相手の寛大さにつけ込んでいるとワニに体の皮膚をズル剥けにされるらしい。

古事記にのつていだけあつて説得力は抜群だ。時間と忘却の風化にさらされ洗練されたモノの価値は、時代を追うごとに増していくばかりだ。





丸葉の木の生花

〈11頁の花〉 健一郎

花型 生花 二種挿し 副流し

花材 丸葉の木 (満作科)

穂咲下野 (薔薇科)

花器 竹筒

「この辺も変わったなあ。外国人ばかりで日本やないみたいやわ。昔は良かったのに。」京都に住んでいるとお天気の話と同じくらい、あたりさわりが無く、会話のきつかけとしても使われる常套句だ。確かに過去にはいいものだったと思う。その過去にもまた同じことを言っていたのではないだろうか。そしてその過去もきつと過去を懐かしんで羨ましがったに違いない。今の累積が過去になる。いつだって今が一番いいのではないだろうか。とは言っても時代の波にのみ込まれることなく残って欲しいものもある。





恐竜

△4頁の花▽ 健一郎

花材 グラフトペタルム（べんけいそう弁慶草科）

チランドシア（パイナップル科）

花器 ガラス容器

この作品は見て頂きますように「いけばな」となかなか言いづらい性質を持っている。水ではなく、土を見せているところ、多肉植物、エアープランツ、折り紙、恐竜…。小学生にも楽しんでもらえそうな作品ではあるが、最近自分が問題だと捉えている事の表現になっている。花、花器と向き合う時に自然と生まれた土への強い意識。その他にも思想の断片が作品から見えてとれる。なぜ恐竜が土を向いている物があるのか。土の中の恐竜と土の上の恐竜の違い。なぜ折り紙なのか。なぜ多肉植物か。

他の芸術作品と違い、生け花は問いかけのある作品が少ない。実際に生け花作品と向き合った時に考えさせられるものはほんの一握りだ。それが退屈か退屈ではないかの話では無く、少ないというだけである。

花を使って問いかける作品を考えてもいいとは思いますが、花を扱う以上、慈愛の心が込められている事が何よりも大切である。

最近の休日

健一郎

学校で毎日したいことばかりしていると今日が何曜日で何日だったか分からなくなる。明日する事も分らずに、毎日したいことばかりしている。

大雑把ではあるが、毎月自分なりに予定を立てる。お花のお稽古の日を決める。美しいものに触れる日を決める。仕事の日を決める。毎月自分のしたいことで埋まっているスケジュールを見ると口元が緩む。

自分の組んだスケジュールを誰がこのスケジュールを組んだんだと文句を言いたくなるぐらいタイトなスケジュールの日もあれば、午前で用事が終わってしまう日もある。突然できた隙間時間には、決まって本屋に行く。2、3時間の時間なら、家から近くの大垣書店で徘徊する。家の近くに本屋があるのはすごく助かっている。椅子があつて長居ができる店舗もあり、晩御飯をこしらえてる副家元を待たすこともある。ある程度まとまった時間があるときは、岡崎のほうまで行く。バイクを使うとすぐに着く。岡崎の方に行くときには必ず周りのギャラリーの催しも確認してから行くようにしている。なかなか面白い企画にいつ行っても出会う。MORI YU GALLERYな

んかは、最近のお気に入りだ。

この間買い物で河原町のあたりに行った帰りにBALの丸善にいつて本を15冊ほど買ってきた。本を買う前に中古でその本が売られていないか探すが、最近欲しくなる本はなかなか売っていない。本を持って店内をうろついている自分をふと客観視すると、本を元の位置に戻す仕事を任された学校の図書委員さながらだ。いざ買おうとレジまで持つて行くと「お持ち帰りですか？」と聞かれる。7冊と8冊で分けられたバランスの悪い布地の袋を左右に持つてゆつくりと帰る。いつの間にか夜になっていた。鴨川の河川敷を歩いて帰ると涼しい夜風とともに冷たい柳が揺れている。昼間は私を警戒していたサギも今は油断しているのだろうか。触れられそうな距離にいる。

本屋に行くたびに家に増え続ける本。この本全てが頭に入っているわけでももちろんない。知識を詰め込むことが目的ではない。そんなものはパソコンにでもやらせておけばいい。容量さえあればなんでも一字一句間違えずに記憶することができ

必要なのは知識でなく、自由気ままに生きる為の知恵だ。

私は本を読むことで価値の選別を

行っている。大事なことはメモを取らなくても覚えていけるものだ。大事だから。覚えられなかったことは今の自分には必要のないものだ。

このように自分の脳を使って私がものを考える際に、大事だと思う情報の選別を行っている。無理に覚えようとしないうちに、忘れないでおくうとも思わない。頭に残ったものだけが私にとって必要な情報なのである。無理に覚えようとしなくていいと思える。と気楽に思える。





へんてこなハロウィン 健一郎

花材 野茨（薔薇科） 木苺（薔薇科）

スプレー菊（菊科）

花器 ガラスコンボート

ハロウィンで花あそびをしようとしたが花を生ける時自然にある姿を生けようとするため、普段から慣れ親しんでいる自分にとって身近な和花を選んでしまう。可愛らしいガイコツとコウモリは手先の器用な知り合いにこさえてもらった。和風ハロウィンの花あそびになった。

東北一人旅

健一郎

釜の温度を冷ますのに、四日間の自由時間が私に与えられた。宮城県奥の山奥で、急にできた暇は、私を自然に東北への旅に誘った。東北はその県も魅力的だが、宮城、岩手、青森の三県に絞って観光をした。

「東北」と一纏めにして話す自分を見ると解像度の荒さが目立つが、初々しくてそれもいいと思う。東北に着くなり、私は自然の強さに圧倒された。東北に来る前に実際の自然（私の目的は苔）を見るべく家族で富士の樹海を見に行った。それはそれで圧巻だったわけだが、東北の自然は何かが違う。生命力に満ち溢れているのだ。人が少ないからだろうか。今までに見てきた自然とは明らかに異なり、そこに強い魅力を感じた。京都に住んでいると、東北に行くよりも北海道の方が近くに感じるほどに東北は遠い。なので、なかなか行く話が出ない。何を軸に生きているかにもよるが、その人の思考と感性において絶大な影響を及ぼすに違いない。少なくとも私の思考と感性を研ぎ澄まさせた。八甲田山、十和田湖、奥入瀬溪流。観光化されており人であふれているのに、それを感じさせなかった。人の介入が最小限なのだろうか。朝方に大雨が

降っていたからだろうか。神秘とも言える光景が目の前を覆った。

今から、「やってみなさい。」と言われると受け入れきれないが、縄文人の生活スタイルはなかなか豊かなものだったと思う。人間が自然と共に生し、自然を崇め、感謝し、生活の中にも美を求めた。三内丸山遺跡の土偶、縄文土器からは美の意識が見てとれた。とても無い事だと思ふ。食料の貯蔵も今ほど容易ではなかっただろうに。縄文人の先祖への畏敬の念は想像できても、生活の中に美を求める意識は俄かには信じ難い。縄文人の美に対する意識には畏れ入る。

V・オフチンニコフ著『日本人とはなにか』に、「日本人が宗教に対して希薄なのは美しいものに對する崇拜があるからだ」と述べられている。美に対する日本人の愛情は自然に對する愛情に根ざしているという。自分の国の自然を神として崇めているのも関係しているのだろうか。ロシア人に日本のことを教わるという、少し変わった本だが、日本の美意識について書かれたなかなか面白い本である。私は東北の旅を経て、自然と向き合う事は、美の起源と向き合う事であり、神を学ぶ事は古の先祖の解釈した自然を知る事だという解釈に至った。京都の市内

に住んでいると手の加えられすぎた人工物で溢れている。一部の人はそのことに嘆いている。それが故に人は人間自身が自然の一部ということをし、忘れてしまっている気がしてならない。自然の中の人間が地球にある物質だけで高層ビル群をも創造した。傍観者ではなく、内部観察者としての自分を見つめ直してみることも大切なことかもしれない。



新しいピアス 健一郎

介護職につき思いもしていなかった能力がついてきていることに気づいた。気づく力だ。それも、意識していなかった事に気づく力だ。「アハ体験※」のようなものである。この能力を磨くと日々同じ利用者をつぶさに観察する事で、すぐに異変に気づき対応することが出来るのだ。この観察力は日常生活でも充分に生かすことが出来る。花と向き合っている時に今まで意識していなかった部分に目がいたり、毎日歩く同じ道が歩いて楽しくなったりする。家族に時々気付いたことを言ってみたりもする。「お母さんのそのピアス新しく買ったやろ！」と自信満々に聞くが、「もう10年前から持ってるわ！」時々外れる事もある。でも10年間意識していなかった母親の耳に目がいつているので、まあ、よしとし、めげてはいない。

※アハ体験＝未知の物事に関する知覚関係を瞬間的に認識する事



七竈の生花 ななかもど 健一郎

花型 生花 草型 副流し

花材 七竈（薔薇科）

花器 陶花瓶

七竈のお生花を竹筒ではなく陶器に生けた。このお生花は私の東北での夏休みを体現したものだ。

7回、竈（かまど）に入れても燃えつきないということから付けられたという説が流布している。この夏ある陶芸家さんのお手伝いで宮城県の七ヶ宿^{しちかしゆく}に行ってきた。登り窯で焼くというのだから行かないわけにはいかない。身体による体験は宝である。体験するためには時間と費用を要するため無差別に体験をすることは難しいので、人と話したり、本から得た知識で自分にとって必要な体験に目星をつけそこに飛び込む。つまり身をもつて知る事である。器をひとつ作るためにこんなに薪の量が必要なのか。3日間火を絶やさないとほこういう事か。1200度の竈に薪を放り込むとはこういう事か。火・土・水・空気。なんて純粹で、美しいんだろう。その中でも火には特別な何かを感じた。電気釜に薪を割って放り込むだけで陶芸の事を少しでも分かったと得意げだった自分が急に恥ずかしくなってきた。花を生けるときに器への意識が強まった。

私の言葉が拙い事は差し引いても伝えきれないほどの濃い体験をしてきた。



妖怪礼賛

△4頁の花▽ 健一郎

花材

早蓮木 (沼水木科)

杜鵑草 (百舌科)

スプレー菊 (菊科)

花器

手付籠

小学校四年生の頃にマンション住まいの母の元を離れ、六角の家で暮らしている。昔ながらの日本家屋のため、マンションでは感じ得ない何かを強く感じる。特に夜に強く感じる事が多い。その正体の一つに影というものがある。影は幼い頃の私によく畏怖の念を抱かせた。ただ怖いだけでは無く不気味だが興味を持たせられるアレである。

影は正確に間違ふことなくシルエットを切り取る。普段目にしている物でも、影を見ると本当にその物なのかと見紛えたかと感じるほどに、刻一刻と多彩な表情をしている。光が当たっていないだけの世界の魅力は底が知れない。陽が沈んで電燈が消えると全く違った表情を見せる。昼間と同じ家だとはとても思えない。妖怪や幽鬼やを想像する事ができたのは神秘とも言えるべき闇と向き合っていたからであろう。明かりを灯した途端に妖怪は何処かへと消えてしまう。

京都に限らずだが、夜道を歩くと

多くの人が、自分の顔を照らしながら歩いている。高速で光が往来し、街灯が影を消している。これらによって引き起こされる、妖怪の住む世界の縮小は、これからの世代の人にとって、想像力の貧困に繋がってしまうかも知れない。まるで分からない事があつてはならないかの様に光をあて影を取り除く行為は、次第にグレイゾーンをも無くしていく。幾ら考えても分からず、答えが出ない喜びはこれから時代を追うことに無くなっていく。○でも×でも無い△が正解かも知れないのに...

自分の力を越えた物に感じる怯えと美が密接な関わりを持つ事を実感しつつある。そこに一縷の怯えがあることは確かだが、畏怖の念と美しいという感情には共通する所が多いのでは無いかと考えている。

同じ花を生けたとしても自分が花のことを分かったつもりで生けている作品は程度が知れている。そこに複雑性がなく、ミステリアスな空気を纏っていないからだ。理解できてしまつてはいけない。慢心せず、奢らずに少しでも歩み寄るのがいい。魅力的なグレイを引き出せる華道家がいてもいい。

肉◎キノコ×

健一郎

私は肉が好きでキノコが嫌いだ。特に好きな肉は牛肉で特に嫌いなキノコはシイタケ。祖父と倉敷国際ホテルで2人で食べた300グラムのステーキが1番のお気に入りです。給食で昼休みの終わりでまで食べさせられたシイタケは大のニガテ。私の特技のうちの1つに物事の合理化というものがある。自分に対して都合良く物事を捉える能力だ。

好きなものだけを食べ、嫌いなものは食べない。毎日食べる食事の時間を心の底から楽しむ。好きなものだけ食べて生きている。

食へのこだわりは祖父の影響も強いが、副家元の影響が大きい。数日に一度自分の好きな食材を買い溜め、毎日好きなものを作る。自分の好きな味をこさえられる事がすごいと素直に思う。あくなき食欲が彼女を動かしている。本人がよく言っているが飽きっぽいの、嫌でもおかつのレパートリーが増えるぞうだ。日本、中国はもちろん、ハンガリー、フランス、ロシア、ベトナム、スペイン、ジョージアなど底が知れない。数あるレシビその中にも美味しい物と格別に美味しいものに分類される。格別に美味しい料理はレギュラー入りとなり、二ヶ月に一度ぐら

いのペースで頂ける。彼女の料理の凄さは豪華で派手な食事だと小さい頃に感じていた私だが、基本の料理のレベルが尋常ではないのだ。きんぴら、おからなどの一品料理が本当に美味しい。

好きなものだけを食べてきた私には、偏った持論がある。好きなものは一番好きな人が食べればいいというものだ。例えば、家族で囲んだテーブルの大皿にお肉が一切れ余ったとする。その肉の事が一番好きな人が食べればいいという考え方だ。自分が一切れ余った肉を食べたいがための合理化なのは認めるが、実際に食べられる側からするとまだ一番マシなのかなとも思っている。

それでも食べ物への敬意、感謝しようとはしている。嫌いなものを目を閉じて食べたり、鼻を摘んで食べるのは食べ物に対する失礼な態度だとはとらない。鼻を摘んで食べる行為がその後その食べ物の方が好きになるためのキッカケ作りである事は理解しているが、自分が興味を持った上で持ちうる全ての感覚を使つて堪能する事が命として向き合う最低限の礼節ではないかと考えている。満たされきつた飽食の時代だからこそ一つ一つの命と丁寧に向き合っていきたい。

もう一つだけ向きあつて欲しい問

題がある。食べた物で体は形成されているという事実だ。何をあたり前のことを言い出したのかと驚ろかれる事があるのだが、実感できているかは別の話だ。私は個人的に自分の体が嫌いな物ではなく好きな物で出来ていて欲しいと願っている。かく言う私も実感は出来ていないと思うが、訳の分からないような物で自分が存在しているという事が怖くて、奇妙なものは出来る限り避けている。

テレビが何かで見た映像が衝撃的で頭から離れない。忙しそうな男性が移動時間を使ってレトルトのカレーをストックを使って食事をしているシーンだった。私の目には食事をしているシーンというよりは、生きていくためのエネルギーをチャージしている生命活動の維持のための行為にしか見えず、とても食事を楽しんでいるようには見えなかった。

ここ100年ほどで、人間が楽しむための娯楽が一気に増えた。食事をはじめとする基本的な欲求が蔑ろにされつつあるのではないかと感じている。人それぞれが求める形がいくら増えようとも、基本的な欲求の質が高い生活を行える事に重きを置くだけで毎日の生活のクオリティが上がることは間違いない。

NHK WORLD JAPAN

CORE KYOTO

The Modern Flower

放映 10月10日 海外にて放送

※インターネットのオンデマンドでご覧いただけます。
(無料) QRコード↓



内容 京都の現代「花」事情

「華包」^{はなづつみ} 芦田一春 大津智永 他

「花遊び」 桑原櫻子 桑原健一郎

「花結い」 花結い師タカヤ

「いけこみ」 花政 藤田修作 福山重文

※この内、桑原家の部分について紹介します。

桑原専慶流は300年以上の歴史があり、家元の家の各部屋には、普段から花がいけられている。花の世話は副家元の櫻子の役目だ。



櫻子「花は生き物なので、花がいけてないと寂しいんです。毎日水を換えて、少し足元を切り直して置いてあげると、又元気になるって咲いてくれる。その元気を私達家族も貰いながら毎日生活してるわけで、花が無い時というのは、ほとんどこの家ではあり得ないです。」

甥の健一郎は自分の世代で分かち合えるいけばなのスタイルを模索している。彼は生徒達にアートを楽しんでもほしいと願っている。



生徒さん「健一郎さんの教え方は、花を楽しそうに語るんです」

生徒さん「敷居の高さを感じさせないよう先生がお声がけて下さるのが、この教室の特徴と魅力だと思っています」

健一郎「伝統を守るだけでも凄く意味のあることと思っています。けれども僕はお花が好きで、どんどんやっていく内にそれだけではなく、自分のお花というものを探し始めているんです。」



若い未来のリーダーは教室に留まらず、ソーシャルメディアに作品を投稿している。

投稿作品の紹介

- ・多肉植物と地層と折り紙の恐竜たち
- ・桜の枝にとまる二羽の鳥のロマンス
- ・ガイコツとコウモリでハロウィンに

健一郎の新しい試みは伝統的ないけばなに、楽しい遊びの要素を加えること。



健「僕が3歳の頃から、祖母が出している本なんですけど、小さい写真集がございまして僕の原点でもあります。」

『ホッホちゃん&ケンちゃん』の作品紹介

- ・子供用ブーツにバラ
- ・折り紙シュリケンとスイートピー
- ・てるてる坊主と柳とガーベラ
- ・ニッコリ手袋とアネモネと枝垂れ柳

祖母の素子さんが孫の健一郎と一緒に、ちやや人形を使った「花遊び」を写真に撮り、



祖父が文章を添えて本を出版。
『ホッホちゃん&ケンちゃん』は彼が花に親しむきっかけとなった。
祖母に触発された彼は今、いけばなの喜びを広めようと懸命だ。

新しい作品を撮影する健一郎。

- ・切り絵の花火にホオズキと楓
 - ・真夏の花火の思い出にいけばなを重ねる。
- 作品の前に、櫻子副家元と話す健一郎。
若い華道家は時折受けるきびしい批評を糧



にして、新たな挑戦を続けている。

NHK WORLD JAPAN
Core Kyoto
"The Modern Flower"

Produced by NHK 2019
in association with
NHK PLANNET and in
cooperation with
J WORKS





鎌柄の生花

〈12頁の花〉 健一郎

花材 鎌柄かまづか（薔薇科）
花器 煤竹竹筒すすたけ

鎌柄は非常に堅く、鎌かまの柄つかに使われたことからカマツカと名付けられた。別名のウシゴロシは、この材で牛の鼻木を作ったためとする説などがある。生け花で用いるときは実と葉のバランスをとるの気を付けると良い。どうしても実のつき方によつては、間の抜けた作品に仕上がってしまう反面、伸び伸びとした花に仕上げると独特の生花になった。熟した赤い実。まだ黄葉する前の葉。日照時間が短くなってきたなと実感する一つの要因でもある。紅葉の姿を見て、一緒に耐え抜いた暑さを懐かしむ。そして自分がクーラーのついた部屋に居たことをイカサマ呼ばわりされる。「あなたは夏を経てまっくろに日焼けしていないのね」と。これから始まる厳しい冬に備えてストーブの用意はもうしてある。

横から見た奥行き





山茶花の生花 さざんか

△4頁の花▽ 健一郎

花型 生花 行型

花材 山茶花 (椿科)

花器 煤竹竹筒 すすたけ

中庭に植わっている山茶花とはもう長い付き合いだ。今年も少し遅かったが咲いてくれている。小学4年生の頃から家元宅に住まわしてもらっているが、年々目の合う回数が増えてきた。一度意識してしまうと何度も見てしまう。

幼い頃は、祖父が入った後の熱すぎる湯に浸かり火照った身体を冷ますうと蔵の前に腰をかけ、明るすぎる夜空と中庭を見て過していた。湯冷めし風邪をひくこともあったが本当に好きな時間だった。熱すぎるお湯につかる事が身体にとって良くないことも知り、湯冷めをしたら風邪をひくことも学習したが、気がつくとは好きな時間が無くなっていた。今は日の出ている時間に見る葉の陰りがとても綺麗に思える。

横から見た奥行き



卒業旅行 パリ・ベネチア

健一郎

ベネチア（英語ではベニス）での3日目の朝、ドラキュラのメイクをした中学生ぐらいの1人の男の子とすれ違った。アカデミア橋の上でマントをたなびかせ登校している。ああ、今日はハロウィーンか。特に何をするわけでも無く予定通りの時間を過ごす。目的地に着くまでに大勢の学生とすれ違うが、仮装をしているのは彼だけだった。どうも彼は強い、心臓を持っているみたいだ。

確か去年のハロウィーンは私の一つ年下の弟の順之助が高校にキャラクターものの着ぐるみをきてバイクで学校に行っていた。渋谷は仮装人たちが溢れかえっているそうだが単身で仮装をしている成人男性は京都ではみかけない。気が盛り上がって後悔してなければいいのだが。あの後学校でどうなったのか聞くのを忘れていた。

昔からなのだが、私の弟は少し変わった。皆んなが右を向いているときに必死に左を注視しているようなやつだった。端的にいえば変わり者である。本人はその他大勢と同じく右を向きたいらしく日々必死に努力をしている。左を向くようそののかしてみても効果はなかった。順之助が小学生のころ発表会に出すた

めに描いた、星月夜に羽ばたくコウモリの絵は私のお気に入りである。実際に発表会に足を運んだ母によると、小学生らしいたくさん色を使い、キラキラした絵を描く中に明らかに一つだけ暗い絵がありそれが息子の絵でショックだったと言っていた。彼は決して先生に描かされて絵を描いた事は無かった。周りを見て合わせようとするところはならないはずだ。周りが見えなくなるほどに一つの事だけに集中すると今までその人が経験した感覚が研ぎ澄まされ、その個人の特徴を持つようになる。今でもたまに鉛筆で描いているのを見かけるが周囲の顔色を伺うことを覚えた順之助は大量漫画の模写ばかりである。

芸術家は大量の模倣をした途端に埋没してしまう。オリジナリティーの有無を論じたいのには無い。ただ、いつの世であっても世界を変えてきたのは少数派である事実は明白である。

ベネチアへいく前にパリに寄った。パリにて古典・近代までの美術を見て周り、ベネチアにて現代の美術を体感すべくこの二都市に絞った。無理をしてこの歳で1人で行っているのは、何度も行き同じ作品と向き合ったときの自分の進捗状況の確認のためでもあるが、抑えきれない好奇心が強く起因している。興味

を持つと止まってはられない。

感性を磨くために美しいものに囲まれ、美の感覚を研ぐ作業をするたびに日常が日常でなくなる。自分の見る全ての世界を変えるには、自分が変わりさえすればどんなものにもなる。

随分な数の作品を見たが、私的には、賛嘆を強要するような崇高な作品ではなくただ純粋に美しい作品に強く惹かれた。純粋な美しさは私を観想に誘う。

自分と作品を分け隔てる結果がないため、作品の息づかいが聞こえる

るようだった。生き生きとした筆の

タッチ、堂々とした趣、何を一つをとってもそれは非常に人を惹きつける強力な引力を持つのだがその根幹の節々に愛情が感じられた。その愛情は周りまわって憎悪にもなりうるのだが、裸で作品と向き合っているかのような感覚だった。あれほどの作品は偏愛の中からしか生まれないだろう。決して周囲の顔色を伺ってできる代物ではなかった。

ベネチアビエンナーレの作品をみて回って帰路につく。百人百様に解釈された作品を消化しきれずにいたが、お腹は空く。適当な店でスパゲッ

ティでも食べようと店を覗くと、小さいお化け達が占拠しててよく周りをみると、この辺り一帯のお店でまともに食事ができそうにない。実際に見たのは初めてだったかも知れない。魔女やカボチャに扮した子供達が店という店を一軒一軒丁寧にカツアゲするのを目の当たりにするのは、子供が群れて店を襲う姿はなんとも愛らしい。大人数の群れで行動する子供達がキラキラ輝くほどに朝にすれ違ったドラキュラの男の子が色濃く想起される。彼は無事大恥をかいていれば嬉しく思う。



ホテルの近くの運河にて

海運国家として名を馳せたベネチア。複雑な蜘蛛の巣のように張り巡らされた生活の生命線とでも言うべき運河を背景に、ベネチアの特産として有名なムラノガラスにデンファレを生けた。パリのオランジュリー美術館でクロード・モネが取り組んだモチーフを自分なりに咀嚼し表現したものである。



夏櫨の立花

△ 9頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

花材 夏櫨(躑躅科)

七竈(薔薇科)

栗(樺科)

雪柳(薔薇科)

桔梗(桔梗科)

小菊(菊科)

花器 陶花器

今年のかき氷は美味しくなかった。きつと冷夏のせいだと思う。あまりの寝苦しさは夜中に目を覚ますこともなく、過ごしやすい夏が終わった。もう秋である。短い短い秋の到来は年末にむけてドタバタしていると途端に終わってしまうが、その短い時間で自然も冬に向けての準備で刻一刻と様子を変えるため、毎日の観察が楽しい。

この立花は普段のお稽古のものに比べると大ぶりの立花である。あまりにもしっかりとした夏櫨だったので落とす葉も最低限に抑えた。この荒ぶる夏櫨を七竈が濃い紅葉で請けている。そしてこの役目を終えた葉は散っていく。今年は長い期間、青い葉が手に入る環境だったため例年とは違った違和感を覚える。同じ毎年ではなく毎年少しずつ違う。慣れれば慣れるほどその違いは分からなくなるのかも知れないが、毎回をその時を新鮮に味わう事は大切である。



椿 水仙
△ 3 頁の花

▽ 健一郎

花材 薔椿(椿科)
水仙(彼岸花科)

花器 陶花器

椿に水仙。実際に見た景色では無
いがしつくりとくる取り合わせであ
る。水仙を生ける際にも取り合わ
せる花が見つからない場合が多い。
水仙の格にみあうほどの相手を見つ
ける事が難しいのだ。格の合わない
花と生けてしまうとたちまちに花
の魅力が互いに発揮されないのであ
る。

「星景写真」

健一郎

小豆島で一泊した日の夕食後、星系写真を撮るべく、旅館の前の砂浜で寝転がっていた。写真は光の芸術だ。その場にある光を集め、像に起こす。太陽が沈むと暗くなるため、光を集める時間が長くなる。シャッターを切ってから、下りるまでに時間がかかるのだ。そのため日中に写真を撮るよりも多くの時間がいる。そうして長い時間をかけて光を集めるので目視できない星でさえも像として残すことができる。なかなか思うような写真を撮ることはできないが、あーでもない、こうでもないと言いながら模索するのが楽しい。京都の町中から眺める夜空も悪くはないが、灯りのない自然と近い場所で満喫する夜景はやはり格別だ。

カメラを買うまではただ眺めているだけだったが、実像として残し、思い出す装置として充分な活躍をするだけでなく、どのように撮るかを考えるのも面白い。星を山と撮るのもいいし、星だけで撮るのもいい。何をフレームの中に入れ、何をどこに配置するか。写真は個人の意図が出来る来えを大きく左右する。絵画と違いオーラまで表現することはなかなか難しく、記憶の中の写したものと実物との差異に驚く事もしばしばだが、一瞬よりも早く、像が撮れるの

がいい。絵画だと一晩に1000枚も描いていると寝る時間が無くなってしまう。

立つて空を見ていると首が痛くなるので寝転がると心ゆくまで星の世界に浸れる。時間が経つにつれ少

しずつ星の数が増えていく。暗闇に目が慣れるのか、闇が深まっているのか、あるいは両方ともなのかは分からない。何も考えずただひたすらに感じる。波の音、月のクレーター、雲の動き、潮の匂い。幼い頃からなぜか星を見るのが好きだった。だが

星好きを公言する人と話してもなぜか話しは合わない。星に詳しい人達には、見える星を指差して名前を言い当てたり、先人が繋いで名付けた星の説明を僕にしてくれるが、僕には何の関係もない。僕は星の名を覚える気も、星を繋ぐ気も一切ない。ただ見ているのがいいのだ。

意識して自然を感じとりに行こうとすると、どうも肩透かしに合うようだ。波の音を理屈で解釈する行為は、目の前で起こっている事象を集計し分析しようと試みる事である。分からない事が多すぎるが故に考えている事も楽しく好きだが、自然を感じられるかと言うとそうでもない。自然の事を集計し分析しようとすればする程自然からは離れてしまう。意識して自然を能動的に受信し

に行く行為で感じる自然は、どこか期待、あるいは、見返りを求めてしまっているのか自分の中に残るものは少ない。

ただそこにいる事が大切なのだ。見返りを求めず純粹無垢な心で、頭の中を空っぽにして呼吸をする事も忘れた時に自然が心の中に染み渡り、心を満たしてくれる。

自然はいつでも身の丈に合った気づきしか教えてはくれない。より知見を得ようと前のめりになっても決して解釈し得ない。追いかけても、追いかけても、追いつけないのは僕も自然の一部であるからだ。だがそれは追いかける事を止める理由としてはあまりにも脆弱すぎる。





水仙一色 二株砂物 健一郎

花材 水仙（彼岸花科）

寒菊（菊科）

小菊（菊科）

著我の葉（菖蒲科）

花器 銅砂鉢

この立花は灘黒岩水仙郷の景色を再現したものである。自然を一つの器に再現する事は、私にとって花との理想の付き合い方である。地に根を張っている姿を知らずしていける花はどこか物寂しい。いけばなと向き合っていると自然に身についた考え方だ。自然界と人間の橋渡しの存在であればと思う。将来確実に人工物で埋められていく都市における拠り所にもなればとも考えている。

水仙郷の水仙を初めて見た時の衝撃は今でも忘れられない。標高608mの論鶴羽山系から海を臨む45度の急傾斜7ヘクタールにわたって500万本の野生の水仙達。八重咲きの水仙、大きすぎる袴から爪だけ出した葉。お花屋さんでは決して見る事ができないうねった数数の葉からは物語を想像することも可能で、その土地の性質を分析しようとする事だつてできそうだ。水仙に限った話ではないが、自然光で見る植物のなんと美しい事か。燦爛とお日様の光を受け、透き通る葉や花の美しさに改めて驚嘆した。

普段は水仙の立花を立てる際は葉の先までほとんど全ての葉に細い針金を通す事で形を作っていた。針金を用いる事で

素直な水仙を自然にある風合いに生けるのだが、その花はどんなにきれいに生けられたとしても人が作った自然である事実は変わらない。

いけばなにおいての匿名化は必須であると考えている。いかにその作品から自分の匂い、影すらも消し、本来の美しさを見出し、引き出せるように励んでいる。人がいけている以上は絶対に不可能な事だが、限りなく匂いをゼロに近づける事はできるはずだ。今回の立花の挑戦もその一環である。お花屋さん特別に頼んでもらった面白い葉は、針金を使わずして自然のはみ出しものを表現できるのだからこれ以上嬉しい事はない。

花を野菜に例えると分かりやすいかもしれない。最近、奇形と呼ばれる野菜達が見直され、スーパーに並ぶ事が増えてきた。もしその奇形を生かした料理屋さんがあれば行ってみたいものだ。規格品品の規定から離れた野菜のみを使った「奇形の野菜レストラン」絶対に流行るはずだ。



斜め横から見た奥行き



水仙 木瓜 健一郎

花型 生花三種挿し 草型

花材 木瓜(薔薇科)

水仙(彼岸花科)

花器 煤竹竹筒

特別好きな花は木瓜と水仙だ。この2つの花にはとびっきりの思い入れがある。この2つの植物がいけばな以外の事に没頭していた時間も、いけばなを忘れさせないでくれた。木瓜はいくら頭で考えようが思いつきもしないような格好のいい枝、荒々しいトゲ。それにおよそ似つかわしくない優しい色形をした花のギャップにはその時々を私を驚かし続けてくれている。

一方、根締めになっている水仙も木瓜に劣らずの魅力がある。愛くるしい花を咲かせ、なんとも形容し難いいい香りを放つ。その優美な匂いに花瓶を落としそうになる程だ。

好きなものと好きなものが合わさるともつと好きなものになる事は必ずである。などと極論を言うつもりは無いが良い組み合わせではあると思う。両者共に複雑な魅力を持つ。



横から見た奥行き

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
2 月号
No. 680

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



小手毬 エピデンドラム

〈表紙の花〉 健一郎

花材 小手毬 (薔薇科)

エピデンドラム (蘭科)

花器 陶花瓶 (近藤豊作)

新年会の日に床の間に飾らせてもらった投げ入れです。古典のお花が多い家に彩を副えるべく生けた。立派な小手毬だったので伸び伸びと小手鞠の思うがままに器にいれ翌日の新年会の日には水を7センチほど飲み、賑やかに咲いてくれた。

小手鞠のみだと新春の色が出ないので4色のエピデンドラムと共に。前の景色は葉の状態がよく、綺麗だったのでエピデンドラムの葉で作った。投げ入れの特徴のうちの一つである軽やかな花に仕上がった。

横から見た奥行き



「美味しい食事」

健一郎

生け花の活動と同時に、生け花をより根本から捉える目を養うべくグループホーム（認知症対応型生活介護）で働いている。グループホーム

では職員の手料理を利用者に振る舞う事になっている。職員を含め11人分ほどの一汁三菜を2時間で調理、盛り付け、配膳するというものだ。もちろん利用者さんの対応と並行しての調理なので2時間丸々使う事が出来るわけではない。時間をかけ、こだわりを持ち自分の引き出した味を少しでも出したのだが、利用者の方をお待たせするわけにもいけないので、ある程度で見切りをつけなければならない。

時間をかけられないにもかかわらず、1日3回の食事は利用者の方からしてみれば、私達とは比べ物にならないくらい大きなイベントである。利用者の方の期待も大きい。少しでも見栄えを良くしようと色を出してみたり、盛り付け方ひとつでも工夫するとご飯は美味しくなる。心臓が悪い方には塩分を控えた中で美味しいものを、糖尿病の方には糖質を控えた中でおいしいものを、味覚の低下が見られる方には味が口の中に残り、味わえるよう餡掛けにし、嚥下機能が低下されている方に

はムース食を提供するわけだが、この方達は、後、何回食事をする事が出来るのだろうか。これが最後の食事になるかもと考えると2時間と言う時間はあまりにも短すぎる。

食べる事は生きる事である。生命維持のために最も基礎的な事であり、これを無くして生きる事はできない。何かの原因で食べる事ができなくなると途端に衰弱し痩せ細り、亡くなれる方達を見送ってきた。食事があまり進まない方には色々な方法で食べてもらおうと試みる。目の前で大きな口で笑顔いっぱい美味しそうに食べてみたり、最初の一口を口まで運び、美味しいものだと思知してもらおう事で次の一口に繋がったりと、いくつかの作戦がある。美味しいものを食べている時の姿は良い。ソースのついたお皿を舐めたりと反応も飾り気がなく純粋な食事は好例である。

お昼ご飯だけでも週4日ほどこしらえていると、少しずつコツというものに分かつてくる。どれぐらいの量のみんで甘さ、照りが出てくるとか餡掛けのトロミの容量も見当がつくようになった。味見を繰り返して作っていると、自分の好みの味に近づけようと酒を足したり、砂糖を足して調節しようとする。理想の味のイメージが定まっていなくて何と

も形容し難いボヤけた味になってしまふ。和洋中どのジャンルを作っても質の高い調理をこしらえる人がいる。面白い事にその料理の全てにその人らしさはやはり感じるのである。それぞれの分野でその人が料理を作る際に掲げる理想の具体さ、質の高さは滲み出るものなのだろうか。

「生涯にわたって自分の好きなものを食べ続けられたら良いな。」と幼い頃祖父とよく話していた。朝6時ごろに目が覚め、台所の近くを通ると物音が聞こえた。朝8時からの2人での朝食の用意をしている後ろ姿が忘れられない。登校時間のギリギリに起き、半分寝ている状態で食べていた朝ごはんが出来るまでの過程を知ってしまったのだ。大好きなピラフとベーコンとスクランブルエッグ、ジャーマンポテトを教えてもらった。今でも家で作って食べると祖父がまだ隣にいるかのようだ。その人が作った味を引き継ぐとその人の存在がありありと思ひ出さされる。それは夢で見るその人よりも現実味があるものなのかもしれない。

副家元が作るご飯は2時間から長い時は3時間かけていることもある。次の日が忙しければ夕食後に次の日の下ごしらえをしている。家元

と2人でする食器洗いの時間も入ると家族で食事をするという行為のために使っている時間は多い方だと思う。その時間が家族一人一人の心の豊かさに大きく影響している。

お腹を満たすだけなら手段を選ばなければものの5分で満たす事ができるだろう。多くの人は学び、娯楽を楽しみ、友達と出かけたりと忙しすぎて毎日の食事の重要度、優先度が下がってしまう。でも、たとえ自分1人での食事の時であっても、美味しく食べるための努力をしていると、常に心身ともに満たされている状態になれる。そして自分が満たされると初めて人に働きかける余裕が生まれる。

今は副家元の料理を少しずつ教えてもらっている。塊肉の焼き方や、おせち料理、日常的な家庭料理まで自分の好きなものを少しずつ覚えるようにしている。調理の過程を知ってから食べた味は、今までの料理とは違うものになっていた。味の複雑さを理解しなくなったのだ。

ある人が言った。「名作とは無限のお金を出そうと、無限の時間をかけようが真似できないものである」

知らない人、あるいは機械が作った失敗のない誰の口にもあうよう

作られた食品を食べるより、大切な人を通して情が込められた家の味は各家ごとの名作である。

毎日家に帰り「ただいま帰りましな！」の一言の前に、今日の晩ご飯を聞く習慣はなくなりそうにない。



手作りのお重で迎えるお正月。





節分の豆まき

△4頁上の花▽ 健一郎

花材 蠟梅(蠟梅科)
台杉(杉科)

花器 面取り焼締花瓶

「お兄さん、豆!!!」誰よりも通る大きな声で真っ赤な服をきて厚かましく大きなエコバックの口を広げている副家元が上からよく見える。福を受けるにはある程度、主体的な方がいいのかもしれない。

廬山寺の節分会は鬼踊りが有名



で、毎年楽しみにしている人が多い。豆を貰う立場から、福をまく人にならせてもらえたが、素直に福のお裾分けをできたと思う。大きすぎる器に入った溢れ出さんばかりに頂いた福を受け渡せた。福の仕組みについて詳しい訳ではないが、不思議なことにとだけ福をまいても、福は無くならない仕組みらしい。

1人が伸ばす手にその家族分の豆を欲しているのとするのならば、その会場は五倍にも多くの人が手を伸ばしているようなものかもしれない。

い。

そんな今年の節分に合わせ、花遊びと称して手先の器用な知り合いにこしらえてもらった切り絵の鬼と共に花を生けた。へうでぶった切った無骨な花器に蠟梅の枝振り、枯れたダイスギが合っている。鬼はどんな所に住んでいるのだろう。

菜の花×てんとう虫

△4頁下の花▽ 健一郎

花材 菜の花(油菜科)
手作りのでんとう虫

花器 陶花器

去年に見た春の景色を花と器で表現した。実際に見たてんとう虫は一匹だったが、サイズと共に誇張した。日常の小さな発見をただの気づきだけで終わらせるのは少しもったいない。どれほどの火になるかわからないが、空気を送り込み、火種を大きくしなければ、すぐに忘れてしまい、火も消えてしまう。

ナノハナは咲いてしまうと葉が頼りなくなるので若いナノハナも混ぜて生けるとボリュームが出る。花遊びをする際に細工を頼んでいる知り合いに自分の構想を相談するといつもアイデアをくれる。全て自分で考え抜いた作品も楽しいが、複数人で作る作品は新鮮さに長けている。

「どうも、はじめまして。一緒にお風呂に入りましょうか。」

健一郎

「どうも、はじめまして。一緒にお風呂に入りましょうか。」

見ず知らず20やその兄ちゃんに、こんな事を突然言われて「はい、御一緒に」と答える人はいないだろう。しかしながらそこでYESを引き出す力が介護には必要である。認知症の方の介護がつくづく楽しいと思える。初めましての人と違和感無くお風呂に入るレベルにまで心を接近させ、お風呂にまで入るといふから。

見ず知らずの人とお風呂に入るなんて経験は今まではなかった。排泄と入浴。ただでさえ、プライバシー性が高く、手伝つてもらうことをためらってしまうものである。自我が芽生える前の赤ちゃんの排泄、入浴行為とは違い、以前までは一人でできていた事が難しくなり、羞恥心を覚えてしまった人からすれば、人に手伝つてもらうのはどれ程の辱めなのだろう。

肉体的な介護は少しのミスが大きなケガに繋がってしまうので気を使うが、ある程度の答えやマニュアルは用意されている。一方で心のケア

は十人十色で、正解もない。おまけにその日のコンディションで声の掛け方も変わる。

お風呂に入るだけならまだ良いかもしれない。もし仮に、排泄の失敗をしていたとする。トイレ、浴室にいくと自分の失敗を露呈する事になるので、絶対に便所にも浴室にも行きたくないはずだ。浴室へ行かなければいけない事は分かっている。でも、羞恥心が勝る。もし、無理やり連れて行かれようものなら強い拒否をするはずだ。暴言を働く人もいる。僕も間違ひなくそうするだろう。

排泄の失敗は、放っておくと病気にもつながるが、何よりもまず気持ちが悪い。気分も沈んでくるはずだ。瞬間的にその人の懐に入り羞恥心を緩和させ注意を他の事柄に移さなければならぬ。

産声をあげてから身体的にできる事が少しずつ増えていき、やがて身体は下り坂に向かっていく。若いうちに身体を鍛えておくと、身体能力の低下を遅らせることが出来るので、身体を動かすことは大切だ。歳を重ねれば重ねるほど体の衰えに抗う事は難しくなる。

近頃、人間はそんなに体を動かさ

なくても生活する事ができるようになった。今や座っているだけで世界中を飛び回れる時代なのだ。石器時代の祖先達がスポーツジムで人々が懸命に走っている光景を目にしたら、なんておかしな事をしているのだろうと驚かれるに違いない。猿からヒトへの境目は分からないが、7万年前の認知革命以降、ヒトに認知能力の劇的な変化が起こったと言われている。周りの環境に合わせて生きる道ではなく、周りの環境を変える発想に至ったわけである。

いつからだろう。ヒトが動く事ははじめに面倒だと考えたのは、お肉を狩りに行く時代から買いに行く時代になったのは、現代は肉体の負担を減らすための工夫の結晶である街や文化。祖先達によつて作られた地球の直線上で生活をしている。

今ある便利は、祖先の面倒臭いから始まっている。生まれた時からそこにあつた物の作り方も直し方も僕は知らない。そのせいか、自動車よりも自転車ぐらいの方が好きなのがある。もともと、僕は外れた自転車のチェーンをなんとか取り付けるくらい能力しか持ち合わせていないのだが。

肉体に引き換え、脳は使えば使うほど、発達していき衰えることは無

いとされている。ならば脳を鍛えようと考えるのだが、脳に障害が起れば、低下の一途を辿るのである。例の一つに認知症というものがある。脳細胞の死滅や活動の低下により、認知機能に障害が起き、理解力や判断能力にも大きく影響してしまうのである。

グループホームで認知症の利用者の方達と生活していると、認知機能に障害がある事は確かだが、もっと根源的な、その人がどう生きてきたかという物が分かりやすい形で存在している。常に人に感謝して生きて

いる人、異性に気がある人、自分が心地よく過ごしていればいい人、愛情深い人、せっかちな人であつたりと、取り繕いのない純粋な姿を目の当たりにできる。面会に来られた子供にその片鱗が垣間見えた時には、遺伝という物を自分が発見したよう

で少し嬉しくも感じる。自分が認知症になる姿を考える事は自分が何者か考える作業でもある。優秀こそないが成績発表のような物なのかもしれない。

僕より4倍生きた人達と生活するこの仕事は、いつも新しい価値観、自分との発見で溢れている。その理由を利用者との心の距離である。家族ですら踏み込まなかったかもしれない所にまで心を接近させるのであ

る。隠し事なんてない。

よく自分の考えている事の相談をする事も、される事もある。美について尋ねると、美人である事と答える人。美しい心であると答える人。美人であると答えた方に、「もし意地悪な美人さんがいたらそれは美人ですか？」と尋ねるとそれは「美人じゃない」と答える。手を繋いで散歩していると、答えが出ないまま帰設する事になる。

話をしている中でも、年齢のためかやはり生死に関わる話が多い。死を目前にした人の言葉にはやはり、重みがある。死の体験談を聞くことはできないが、私と比べると死に近く、当事者意識が強い方の話は具体的にである。

真正面からその人を知り受けとめ、その人の顔色、仕草から心情をできるだけ正確な感情を想像し、適したケアをできたらなど考えている。

この力を磨いたその先に物を話さぬ植物の声を聞き、その特徴を理解し、その姿をより美しさを引き出す事ができるだろうか。





山茱萸の立花

健一郎

花材 山茱萸（水木科）

松（松科）

椿（椿科）

菊（菊科）

花器 陶花器（大谷焼）

一本の山茱萸の木を立花という様式を借りて立てた。理想の型はまだ頭がない。

その時の枝ぶりや花のつき方をみて、良いと思ったら、良いと思った通りに生ける。

役枝一つ一つを考えながらゆつくりと枝どりをする。バランスを見ながらゆつくりと。喜びである。時間がかかればかかるほどその花の近くに居れるかのようだ。ゆつくりと自分の呼吸を山茱萸の呼吸に合わせていく。切り花になった山茱萸の息を吹き返させるかのように。まだまだ一本の木の迫力にも、遠く及ばない。切り花を根付きの太木にも見せる事ができるかが、花を触る者としての技量の見せ所である。

横から見た奥行き





色合わせ

△2頁の花▽ 健一郎

花材 山吹^{やまぶき} (薔薇科)
紫蘭^{しらん} (蘭科)

花器 環耳陶花瓶 (竹内眞二郎作)

色合わせも生け花をする上で大切な要素のうちの一つ。

紫蘭は自然の葉を生かして。しゃんとして若々しく凛々しい印象を受ける。副家元が選んでくれた敷物で印象が変わる。





若い青さ

△3頁の花▽ 健一郎

花材 本桜(薔薇科)

椿「月の輪」(椿科)

オクロレウカの葉(菖蒲科)

花器 紺釉陶鉢

本桜と椿の2種だけでも格好は良いが、オクロレウカを出逢わせて。若い青さがまもなく訪れる季節を思わせる。本桜とオクロレウカが競い合う様。立派な本桜だったので勢いを出し、椿で留める。



『選択力』

稲が伝わり、食物の貯蔵が可能になり、動物を家畜化する。食に困らなくなると物の交換が盛んになり、生産性が上がると物の選択ができるようになった。

物がありすぎる時代と言われてから長い月日が経った。何が何だかわからない機能が沢山ついた機械で物が溢れかえっている。酷いものになると何をやる為の機械だったか、分らない製品でさえあるほどに。

そこまでこだわりがないものに対して質問をされると困る。使えたらいいのだ。店主さんは僕に少しでもあった物を提案したく、多くの質問を投げかけてくる。店主さんには悪い気がないのは十分承知だ。だから店主さんの顔はイキイキとしている。僕が「必要最低限の機能が使えるら充分です。とりあえずこれを下さい。」なんてとても言えない。店主さんが好きでその職業についていたとすると、少し悪い気がするのだ。

生活をより便利にしようとする物を買う。いつか使うかもしれない機能は絶対に使わない機能だ。多機能は本質の性能を曇らせる。あれば便利な物は、無くてもたいして困らない。

その一方で、同じ用途のものは一

つだけでいいんですよと言われたことがある。飲み物を飲むという用途に必要なのは住人の数だけのコップだけで良いというのだ。単純明快で好きな考え方ではあるが、少し違う。僕の「好み」がこの考え方に歯止めをかける。人それぞれ好みはあるが、その飲み物が一番美味しい形態の器は確かに存在する。湯飲みに入った水なんて飲みたくない。

朝のコーヒーをお気に入りの湯飲みで飲む。湯飲みなのだが、何故かコーヒーを入れてしまう。他のどのコップで飲むより美味しいのだ。少し余ったコーヒーをミルクで割って飲む時は、洗い物が増えようが大好きな青磁のマグで頂く。なぜならばマグで飲むミルクコーヒーの方が美味いからだ。液体が漏れなければ何で飲んでもいいわけではない。これが良いのだ。同じ物を食べるにも、飲むにも器が変わるだけで味が確かに変わってしまうのだ。食べるだけ、飲むだけだが、自分にもたらされる効果を鑑みれば一度身の回りのものを自分が本当に好きで使っているかを考える価値はおおいにある。

新しい湯飲みを買うとする。材質や価格帯も様々で選択肢の多さに圧倒され、選びきれない。そこでその選択を助けてくれたのが、TVのコーナーシャルや新聞などの広告であつ

た。数多くの選択肢の中からその商品の印象を良くさせる働きがあり、他の物とは違う特別なものになる。

果たしてそれは本当に自分が好きで選んだものなのだろうか。

ネットで買い物をするときに、「あなたにおすすめの商品」が表示されることがある。これはAIが、検索履歴や購買履歴などを参照して、数多くの商品の中から、おすすめの商品を提示してくれるものだ。消費者はこの「おすすめの商品」のおかげで、膨大なラインナップの中から商品を選ぶ必要がなく、機械が勝手に選んできたものの可否を判断するだけでよくなってしまった。

こうして、選ぶことをやめた人たちは、自分の知り合いやネットで活躍するインフルエンサー（影響力の強い人）の口コミに信頼を寄せている。

テレビCMに演出効果があることは、すでに多くの消費者が認知している。だから信頼する友人や口コミを信じて物を買う。こうした購買方法は、「自分の感覚だけで選んで失敗したくない」「選ぶ時間をもったいない」「みんながいいと言っているものが欲しい」などといった欲求が強いからである。

人の感覚で選ばれた商品に囲まれ

て豊かさは、もたらされるのだろうか。

ここ最近、強い同調圧力のせいで、自己の表現が億劫になりつつある。人に流されやすい自分を誰しもが感じたことがあるだろう。そこで同調圧力に立ち向かうための武器がいわゆるイチャモンと言われるものである。声を大にしてイチャモンをつけたのなら大したものだが、小さい声、心の中で呟いてもいい。

物事を否定する力は自分の中に芯がなくともできる。わがままになれればいいのだ。そして少しずつ培われた自分が、何が好きで何が嫌かを軸に否定する。上辺で人に合わせ続け自分を見失ってしまうほどでもない事はない。

自分の決めた、大きからうが小さからうが選択の一つ一つが自分の未来を限定させていく。

よく登場する手先の器用な知り合いは、会うたびに仕事の愚痴ばかりを言う人だった。嫌な仕事なら放つてしまえば良いのにという誰でもできるアドバイスをしてみた。やりたくも無い仕事をしている意味が僕には意味がわからなかったただけである。今後は自分が自分で仕事を辞めた。今は自分の好きな仕事をしてい

る。指輪作りの仕事だ。人間関係の話はほとんどなく、どんな指輪を作りたい、こんな作業が楽しい、こんな面白いお客さんがききあって、といったぐあいに話を聞いていても退屈しなくなった。

いつ住む場所を変えてもいい。いつ仕事を変えてもいい。嫌な事をしている人がいると言うがそれはその人の選択である。新しい事をするリスクをおそれ、居心地の悪い場所に留まり続けているのだ。変わらないこともリスクである事を忘れてはいけない。

自分で決めた事は全て、自分のおかげとも言え換えることができるのではないだろうか。失敗をしても人のせいにはできないため、結果を受け止め新しい選択をすればいいだけだ。

「選ぶ力」は選ぶ物がどんどんと増えていく今の時代には必ず求められる力になると考えている。大概のものはすでにそこにある。何を選ぶかである。「これでいい」から、「これがいい」に変えるだけの簡単な話である。



桜の立花

△10頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花 桜一色

花材 啓翁桜 (薔薇科)

松 (松科)

五葉松 (松科)

花器 天女文銅器

やっと立てられた桜一色。撮影して現像された途端に手を加えたいくなる。毎日自分の目が更新されているからだろうか。花を生けても生けても先が見えない。

これだけ綺麗に咲いてくれた啓翁桜は、一ヶ月ほど楽しませてくれた。流枝は皮一枚で繋がっていたけど、最後まで保ってくれた。凄まじい生命力である。お気に入りの天女の器に。

横から見た奥行き





連翹の生花

△11頁の花▽ 健一郎

花型 草型 真流し
花材 連翹(木犀科)
花器 狂言文銅薄端

連翹の枝を50本以上の中から選んだ5本。1番初めに選んだ枝はもちろん真である。50本の中から、似たような枝が2本あった。2本とも使うと珍しい枝では無くなってしまうので1本が際立つように枝を選んだ。留が少し高いが、全体で見るとバランスがとれている。連翹の黄色が薄端の銅器によく合う。枝の中は空洞なので心して撓める事。

横から見た奥行き



『ホンモノ』

健一郎

たくさんのホンモノに出逢うべく始まったパリの美術館巡り。その中でも一番の人気を誇っていたのはやはり、レオナルド・ダ・ヴィンチの『ラ・ジョコンダ』（モナ・リザ）であつた。開館直後、閉館間際でない限りゆっくりと眺める事は難しいだろう。次から次に人が流れこむ。だが一つだけ作品よりも気になったことがある。流れが異様に速い事だ。ほとんどの人は写真は撮りさえすれば、次の絵を見に行く。ペルトコンベアーの作業員のように事務的な作業にも見えた。絵の写真を次から次へと撮っていく姿は冷たかった。スマホの中のモナリザはどれほどの価値があるのだろうか。

ネット上で検索した画像の方が、よほど画質がいいだろう。拡大印刷でもすれば原寸大、原寸以上の迫力で名画の鑑賞ができるわけである。だがそんなことは誰もしないことを誰もが知っている。やはり本物である事が大切なのだろうか。しかし写真だけ撮る姿を見ると、そこに本物がある意味を考えさせられる。

目の前に本物のモナリザがある。本当に本物である。本物を見るためにパリのルーヴルに人が集まる。これは事実である。でなければ長蛇の列に並んだりはいらない。本物のモナリザを楽しむにしていたに違いない。

ヴァルター・ベンヤミン ドイツの哲学者、思想家。

い。だが、実際に本物を目の前にすると「本物だ。」と言い、写真を撮る。写真を撮ればすぐに次の作品を見に行く。あまりにもあっさりとしすぎていないか。なぜここまでできたのだろう。疑問を抱かせられた。

同じような事はコンサート会場でも見る事ができた。アーティストのライブでの演奏の撮影で手一杯。自分で撮ったという事実は確かに残るが、その場で得られる体験としては乏しく思う。雰囲気を楽しむ程度に考えていたならば充分だが、スマホをカバンにしまい自分の目と耳で生で確かめる方がいい。同じ体験は２度と味わう事ができないのだから。

ホンモノってなんだろう。ホンモノについてヴァルター・ベンヤミンは述べている。ホンモノは唯一絶対であり、他に変わりが無いもの事である。やり直しのきかない一回限りの経験を持つ価値のことをいう。ベンヤミンはそれをアウラ（オーラ）と名付けた。もの一つ一つが持つている、なんともいえない何かに名前をつけたわけである。

本物の作品を見るためには本質に近づけるようにいくつかの方法でアプローチをしていく。私の中では作品の鑑賞に３種類ある。「鑑賞者の期待をベースにした鑑賞方法」と「鑑賞者側の知識」をベースにした鑑賞方法と「作品が持つオーラ」をベー

スにした鑑賞方法である。いずれも自分の頭で創り出した物であるが違っている。

「鑑賞者の期待」をベースにした鑑賞方法は、その作品との単純接触頻度、つまりその作品のを見た回数や、口コミの影響が大きい。教科書や、プリントＴシャツで作品を見たことと覚えている人、その作品を見たことがあるような気がしている人などがあげられる。凄いという事が頭に何度も刷り込まれ、凄いものがそこにあるんだという期待が作品の価値を上げる。有名な作品ほど出会えた時の衝撃が大きく、その作品がそこにある事だけで満足してしまう事になる。存在への感謝、有り難みは究極の形であると言えるが、そのものに對して好奇心を向ければもう一つ踏み込んだ鑑賞法になる。有名すぎる作品を目にすればそうならざるを得ないのかもしれないが。

「鑑賞者側の知識」をベースにした鑑賞方法はそれまでの鑑賞者の知識と多少の感覚的経験によって成り立つ。作品ではなく自分の頭が主体である。知識は人により個人差がある。作者の素性を知っている人や、著書を読んだ人それぞれの経験・知識を基盤にして作品を鑑賞する方法である。作品よりも横に書いてある説明を熟読し作品はサラッと見て次の作品を観に行く。この鑑賞方法は歴史的文脈の中で捉えるのも、その

作者に焦点を当てたものでも複合的に鑑賞しても楽しい。

「作品が持つオーラ」をベースにした鑑賞方法は、一切の先入観（知識）を捨ててただ感じることに徹する。自身の感覚的経験に基づいて、作品から感じるオーラは、自分の等身大であり、作品が語りかけてくるのである。

期待をベースにした鑑賞はその作品を見る事に期待を膨らませればいい。知識をベースにした鑑賞は知識を磨けばいい。それに引き換え、作品のオーラをベースにした鑑賞はその作品にのめり込む力が必要となる。有名な作品をまるで初めて見たかのように反応しなければならぬのだ。ブジャデの能力が必要なのである。ブジャデとは、何度も体験している事を初めてのように新鮮に感じる事である。いつもと同じ道を何気なく歩いているようでも、常に新しい発見はないかアンテナを張っているかどうかでもある。

知識や経験をたくさん積んでくると自分が何でもいろいろ知っている気になってしまふ。それが驕りになって、謙虚に学ぶ姿勢がなくなり、学びをやめてしまふ。自分は何でも知っているつもりになって、人のことを勝手に思い込みで判断したり、決めつけをしたりするようになってしまふ。有名な作品を見た時に、分

かった気になってしまふ恐れもあるのだ。知ってしまったと知らないフリをする事が難しいが言うなれば幼児化である。知る前に戻るのである。こういうことは頭で理解できたとしても実行に移す事は難しい。でも近づく事はできる。幸い私の場合、日々介護の仕事で認知症の人たちと時間を共にしていることで気づかせられることが多い。彼らにとっては何度も見ただけのもの、すでに体験したはずのことを、毎回初めて見たり体験する事になる。言葉による意思疎通が可能なので質問を投げかけると、そこにはたくさんの発見があり、観念に囚われずに物事をみるヒントのような物で溢れている。

知ったうえで見るのと知らない状態で見るのでは、衝撃や感動の度合いはどちらが大きいだろう。知らないで見た時にその凄さに気がつけるだろうか。物質が持つ声にならない声を聞ける力を磨くと、刺激の少なくなった日常を非日常に変えられる。

とはいってもホンモノが何かすら分からないのが本場のところである。何を何のために考えていたのかも分からない始末である。ただ、ホンモノと出逢った時に、ホンモノを味わえる自分ではないとは思っている。

五穀豊穰

△9頁の花▽ 健一郎

花材 稲穂（稲科）
花器 陶花器

（ティム・コプシー作）
フェルトのネズミ

家元が納屋の掃除をしていた時に
出てきた、立花の込藁用に残して
あった稲藁の、稲穂の部分を使っ
ていた一作。年末でもないのに毎日
のように大掃除を一家でしている。
古いアルバムを見つけたら、先代、

先々代の写真なんかを見ていると点
での自分ではなく歴史という線の延
長線上に自分がある事を強く感じ
る。今までにないほどの時間を与え
られ今までにはないほど自分と向き合
えている。今後無いであろうこれだ
けの時間に感謝をし、したい事をし
ている。
フェルトのネズミは手先の器用な
知り合いにお願いして、こしらえて
もらった。

小原流 月刊誌「插花」 4月号
「家元対談」

小原宏貴さん

+

桑原健一郎

小原流家元の小原宏貴氏は昭和63年に生ま
れ、6歳にして五世家元を継承。日本の伝統文
化である「いけばな」の普及と、芸術家として
国内外の活動に力を注がれている。

桑原専慶流「テキスト」に載る健一郎の文章
を毎号楽しみにして下さっていて、小原流月刊
誌での対談相手に指名していただいた。





太蘭と髭撫子の生花

△11頁の花▽ 健一郎

花型 株分け

花材 太蘭（蚊帳吊草科）
髭撫子（撫子科）

花器 小判型陶水盤

水物の中で太蘭は手に入れやすい。水物の植物は生け方が特殊な物が多いが、太蘭のお生花は几帳面さを求められるように感じる。得意では無いのだが、穂を一本一本選び、調節するのは楽しい時間である。

横から見た奥行き





好きな器

△3頁の花▽ 健一郎

花材 黒蠟梅（ろうばい 蠟梅科）

透かし百合（百合科）

花器 耳付陶花瓶

十三世家元／十五世家元が集めた花器は、全部合わせると500程あるのではないだろうか。それぞれの代の家元には特色があり、自ずと使う花器の種類も違ってくる。自分の欲しい花器もあるが、今は家にあるものを使っている。どうも私が惹かれる花器は十三世のものを選ぶ傾向があるみたいだ。原始的な雰囲気をもった不思議なオーラが堪らなく気に入っている。花と組み合わせるとまたいい表情になる。クロロウバイの暴れ枝は納得いくように入ると気持ちがいい。



健一郎のインスタグラム [ken161022](#)

動画で花の生け方を解説しています。ぜひ覗いてみてください。

スマホのカメラで読取り↓



『無限ってなんだろう』

健一郎

祖父とはよく考えた。無限ってなんだろう。宇宙ってなんだろう。死ってなんだろう。その中でも無限について考えている時は、ワクワクした。祖父は幼いころに夢で見た無限の針山に囲まれた時の恐怖が忘れられないとよく話してくれた。私はなぜその針の山が無限だと分かったのかという疑問を持ちながら話を聞いていた。その疑問をぶつけると祖父は嬉しそうに話を広げてくれる。

無限とは？まず数を数えてみる。一、十、百、千、万・・・無量大数。今は全て言えないが当時はよく位を数えていた。なぜ数字はここで終わるのだろう、続きが知りたくなる。9という数字をいくら並べても無限には到底追いつけそうにない。人には必要がないのだろうか。数字では表せない。

小学生の頃に太陽の事が気になり調べていた。そこで太陽は2千矜^{じよう}トンの体重だという事を知り、銀河系がたたくさんある事を知り、宇宙の始まりであるビッグバンを知った。ビッグバンの説によれば今も宇宙は無限に広がり続けているらしい。どこを広がっているのかも、どこに向かつて広がっているのかもチンプンカンプンだ。

私は、夢ではなく、現実で無限を感じていた。私が祖父の家に住むようになって間もない頃、夜の1人でのトイレが怖かった。階段を降り、廊下を渡ってトイレに行くのだが、廊下は途中で切れて一度敷瓦^{かきわ}の上を歩くことになる。その時に簀子^{すし}の上を通るのが怖かった。簀子の奥に見える床下の空洞が怖かったのである。何もかもを吸い込んでしま

いような黒色は忘れられない。何もかもを吸い込んでしまいう黒色に私は無限を感じていたようである。不気味であり、この世のものとは思えなかった。日中に比べ、視覚情報が極端に制限されるからだろうか。日本家屋独特の不気味さといえ、怖さが増幅された。今ではその簀子は取り外され、離れた廊下は一つにつながってスロープになり、昔の雰囲気はなくなってしまう。

無限って何だろう。人類の頭を悩ませているこの大問題を2人で解決する事はできなかった。分からないという事が分かった。大発見である。分からないという事が分かるまでは、なんで考えていたのか、ついには何を考えていたか分からなくなる始末で、頭がぼーつとしてなんだか退屈になる。

無限のなかにはワクワクと退屈恐怖があるようだ。無限は考え始めるときにはワクワクし、考えると退屈

屈、自分ごとになると恐怖を感じるらしい。

分からないという事が分かってからは、何が分かっているのかを確認するようにになった。無限がわからないので、何かがあるのか考えた。まず私はここにいる。私がここにいるという証拠は？自分だと認知している脳が自分なのだろうか。なぜ自分は脳であると自分には分かるのだろう。本当に自分は存在しているのかと不安になる。ほら、また頭がぼーつとしてきた。

知らないことは不安である。認知症の人はわからないから怖いのかも分らない。覚えがない場所になぜ自分がいるか。想像してみたい。目を覚ましたら知らない人だらけの世界を。娘が中学校から帰ってくるはずだったのにその娘は孫を連れて面会に来ている。娘がいうにはもうすぐ100歳になるらしい。さっきお昼ご飯を食べたはずなのに、お昼ご飯を配ってくれるお兄さんがいれば不審にも思うだろう。その状況を受け入れられずに人に原因を求め、怒る人。自分の中に原因を探し、解決しようとする人がいる。どちらにも根本には知らないことへの不安がある。私が想像するに無限の不安なのかもしれない。ものを考えようにも自分で考えている自分と現実の差が大きすぎるのだ。相手の心の不安を

想像する事ができれば、怒っている人と向き合うのではなく、不安な人と向き合うことになるので会話への態度も違ってくる。

分からないものは怖い。地震、雷、台風、洪水など自然現象にも怖いものが沢山ある。人間が理解できていないものは怖いものである。今でこそ科学がメカニズムを説明してくれるものもあるが、まだまだ未知のものも多い。分からないものが突然出てくると、大慌てである。何とかして原因をつきとめよとしたが分からない。分からないことは恐怖である。物事を筋道立てて説明できない不思議な物事を説明するのに、地震のナマズ、風神、妖怪、宗教などが生まれたわけだ。これらの中に安らぎを見つけることは、自分の恐れと向き合う方法の一つである。

たとえば死後に起こることや、死後の世界など、恐れに関する質問に答えるための何かを持っていると、それは死への恐れのお助けになる。答えを持っていることは、その人の中では知っているということになる。自分の恐れを無視するのではなく、向き合える程度にぼかしを入れたものである。だが私は、その場に自分が身を置き、体験しなければ納得できない。言葉で表現できてしまえるもののだとは、到底思えないからだ。

怖いには2種類ある。生命の存在が揺るがされたときの恐怖。もう一つの恐怖は自らが頭の中で思考によって創り出される恐怖である。恐怖によって心拍数が増加し、血の気が引き、震えや発汗などといった反応を体は示す。それに引き換え、思考により感じる恐怖は、生命の危機とは少し遠いためか、相当の物でなければ感じられないのではないだろうか。考えることにより、恐怖を感じられるという事は、考えられる生物にしかできない事である。

考える事で怖くなれるのである。これを私は贅沢^{ぜいたく}であると考える。

ブジャデ

健一郎

先月の私の文中に「ブジャデ」というのがあって、「デジャブ」の間違い？と思われる方も多かったのは、説明不足でしたので補足します。

「デジャブ」は既視感のことです。一度も体験したことがないのに、すでにどこかで体験したことのように感じるのですが、「ブジャデ」はその反対のことを表す造語です。何度も体験しているのに初めてのよう新鮮に感じることを指します。できるだけブジャデを意識して、色々な事に気づきたいと思います。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
7 月号
No.685

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



路地にいける

△表紙の花▽ 健一郎

背景 富春軒の路地

花材 大山蓮華（木蓮科）
鞍馬苔（岩櫨葉科）

花器 弥生土器

一家総出で露地の砂利を磨く大掃除をした。20年ほど前に大工の人達に依頼して以来との事。家族全員がまとまって掃除できた事に感謝している。石畳に水を打つとピンと空気が引き締まる。今までできていなかった面倒な事、そして基盤を固めるために時間を使う事ができた。何が起こるか分からないのが世の常ではあるが、ある程度の事は受け流せるよう備えておく。

写真の土器は去年の7月25日に東寺で購入したものだ。原始的な植物と合わせたかったのだが、花に巡り合う機会がなく一年ほど経ってしまった。咲く前の大山蓮華と水を多分に含んだ光るシダに弥生（やよひ）の土器がよく似合う。



『二セモノ』

健二郎

確か、先々月のテキストで、ホンモノについて少し考えてみた。大雑把に要約すると、あまり難しく考えずに頭を空っぽにして物事と向き合えると本物の作品の本質が見えるのではないかという話だった。この考えには、作品に本物と偽物があるという考え方が根底に流れているわけだが、今回は日本の偽物とも思われているかもしれない、面白い文化について考えてみようと思う。

偽物と誤解を恐れずに言ったが、どうも世界から見ると珍しい文化がある。「写し」というものである。「写し」は模倣であつて創造ではない。「単なるコピーだ」「盗作とどう違うのか。」と言われることもあるが、私はどういった意識で先人との作品と向き合ったかの違いであると考えている。その意識を大きく分けると「盗作」「学ぶ写し」「残す写し」「祈る写し」が存在していると考えている。

この意識の中で一つだけ悪い印象を持つ恐れがあるのが、「盗作」である。他人の作品を精巧に写しとり、自分の印を押し、自分の物としての販売や、名のある人のサインをしての販売等は許し難いが、ビジネスとしては大成功だと言える事ができ

るだろう。盗作とまでは言わないが、中国からの焼き物を日本で写して輸出していた事実は存在する。だが、その技術が発展し、新しいアイデアが生まれ、ヨーロッパを風靡する様な磁器が生まれた事実を見ると、悪いことばかりでもないようである。写すという行為はあらゆるところで文化の発展に貢献している。

盗作に引き換え、誰もが経験するのが「学ぶ写し」である。学ぶの語源が真似ぶだと言われている様に、写す事は効率的に学びを得る事ができると考えられている。人は真似の連続で出来ることを増やしている。学ぶ写しは世界共通で、あらゆる巨匠達も真似ることとでその基礎を作り、そこに自身の経験を擦りあわせていくことでオリジナリティを作り出していった。

写しを考えるにあたり、衝突するのがオリジナルの問題である。本来の意味でオリジナルは存在し得るのだろうか。写しの上になにオリジナルを私は知らない。オリジナルだと思える作品は何を写したのかが分からないだけで、写しなのではと考えている。ただ、複雑で専門的な物を写した場合は何を写したかは分かりづらく、写しを読み解くには多くの知識が必要だ。私たちの脳が、今まで培ってきた知識でしか物事を考えられない以上、その作品はオリ

ジナルであるというこはあり得ない。過去とのつながりの中で物事は生まれる。なぜならば、人は今まで培った知識で想像するからである。

つまり、ひとつの絵は写しであり、オリジナルなのである。自然を表現した絵は、自然を写したものに違いはないが、自然そのものと描かれたものは当然、同一ではない。そして既にある絵を写した場合においても、写した絵は様式、技法や表現に様々な要素が組み合わさって成り立っており、写した絵は同一でない。つまり、絵には独創性があるだけとも言えないだろうか。

「残す写し」は形の復元や、保存のため、先人の意思、心を残す写しである。そして、学ぶための写しと似通った性質を持っている。国宝、重要文化財の復元、保存などがこれにあたる。ここでは精巧に写す事が求められ、本物と同じだけの質を要求される。その他にも、壊れてはいないオリジナルの器のかわりに写しの作品を使用し、そこに本歌を見て取るといったケースも存在する。

江戸時代の陶工達は、偉大な陶芸家（乾山）の写しを巧みにできるかという事が評価の基準になっていた。本物も大切にしていたが、それ以上に「形」を重視していた。写す伝統である。「モノ」はいつか消え

て無くなってしまうが、「形」は本物の精神が宿る依代であるからだ。つまり、本物の形を真似してもらう一度つくり直す事で、心は永遠に受け継がれていくと考えたわけである。仏壇に手を合わせる時に似ている。仏壇を通して、その向こう側を見て取るのだ。

エジプトの絵画は二千年五百年間進化しなかった。ただ求められている正解を描く事が求められ、変化を期待をされていなかったからである。そこで重要視されていたのは写実的に見たままを描き起こす能力ではなく、形式を通して同じ心を伝えたかったのではないだろうか。

精神性を受け継ぐ国に、オリジナリティが重視される思想が海外から入ってくると、写しはただ複製を制作する行為であるとみなされるようになる。特許権などの法律が整備されていく事で写しを作るのに制約が生まれ、偽物作りがしづらい環境に整えられていく。それは精神性の継承に大きな亀裂が入った事にはならないだろうか。今後、こういった倫理思想の変遷のふり文化は耐え抜く事ができるのだろうか。残ったものが文化であると言われるとそれまでのだが。

最後に「祈る写し」というものを紹介したい。祈る写しとは、写経や

写仏がこれにあたる。祈りという行為を通じてか、行為が先なのかは分からないが、移す事を通じて祈りをする行為である。この場合も写す事が目的ではなく、祈るために写しているのである。テキスト4、5月号に掲載の絵巻『幕府絵詞』の模写は鈴木空如によるものだが、鈴木空如は法隆寺の金堂壁画を模写したことで知られている。一人娘を五歳で亡くし、金堂壁画の模写にのめり込んだらしい。一人で蠟燭の炎だけで描ききつた彼を想像するに、人のためという気持ちもあつただろうが、祈るように描いていたと想像してしまう。

絵図を模倣して立花を立てると、その行為を通して流祖のことをあれやこれやと考えてしまう。学ぶために写す行為は、祈りにも似た感情を起こさせ、それはやがて残すための写しとなる。そして、盗作されるほどの物になれば良いと思える。

継承された形を理解し、現代の空気を持った物を生み出す。芸能としての創造性は、写すことを通して過去の表現を理解し、そこに現代的な解釈を組み入れることによって今の表現となる。そして写しの連続が伝統であり、文化、生命の継承なのである。



グラジオラス

△9頁の花▽ 健一郎

花型 生花 行型

花材 グラジオラス (萱蒲科)

花器 陶鉢一对 (フランス製)

グラジオラスは江戸時代の終わりにオランダ人が持ち込んだ植物で、「阿蘭陀萱蒲」と呼ばれていた。園芸品種の生産が盛んで、白、ピンク、赤、オレンジ、黄色、紫や、青に近い色の品種でもある。今は年中花屋で売っているが、やはり旬のグラジオラスはしっかりとおり、勢いがある。

生花としては杜若などと同じく萱蒲科の植物として葉組を行なう。花屋で選ぶときは花は勿論の事、葉に気を配りたい。花屋さんではより綺麗に見せるために、黄色くなった葉先を上手く切つてあるので、よく注意して見ないと自然な葉先なのか切られたものなのか分からない。葉先に気をつけて花を選びたい。

真を少し高く伸びやかにしたので控も丈を長くし、バランスをとっている。副の蕾が良いアクセントになっている。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
8 月号
No.686

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



花筏とイガグリスゲ

△表紙の花▽ 健一郎

花材 花筏（花筏科）

種栗菅（蚊帳吊草科）

花器 陶花瓶（清水美菜子作）

どちらも個性的な花である。ハナイカダは花の真ん中あたりに花をつけ、実になると写真のようにになる。一度見たら忘れられない珍しい植物である。

イガグリスゲは北米原産でトゲトゲの実と真っ直ぐに伸びている葉とのコントラストが魅力的である。

ヒマワリを花屋さんに買いに行つたはずだったが、この2つの鉢を持って帰ってきた。想定外の幸運な誤算である。2種でもよかったのだが、枯梗を添えると緑が際立つ。

横から見た奥行き



『こだわり』

健一郎

私には最強の家元になるという大きな目標があるのだが、日を追うごとに課題が増え続け、ただでさえ遠かった最強の家元がどんどん離れていく。いや、私と理想像の距離を測り違えていたのだろうか。明確な定義がしっかりとしていないことが、最強の家元になる事を難しくさせているのかもしれない。そして、答えのない目標は私を楽しくさせる。

私が思い描く最強の家元は誰かに頼まれたものではないため、自分さえ納得できればいい。つまり、拘る事ができる。自己満足のようなものでも自分が納得できるまで花と向き合えることが出来たらいい。そしてその向き合う姿勢をいけばな教室を通して伝えていく。こんな幸せで有難い事はそうそうないが、果たしてお弟子さんが何をしたいのかが未だによく分からないでいる。私の個人の欲望が満たされているだけな気がしている。

生け花を教えるにあたり、いけばなとは何かという事を考えるようにしている。現代、過去、これからのいけばなの解釈、美術的な、芸術的な位置づけ、考えれば考えるほど何かわからなくなる。何かに専門的な人と話すと、いけばなを知らない人の方が詳しいのではないかと思う時もある。花を生けることに専念すると、花を人に伝えられないのではな

いかと考えている。専門的な事を知らない人に教えるには他の知識がふんだんにいるらしい。偏愛ともいえる、こだわりのある狭い世界観は人には理解しがたい。

いけばな以外の事にも興味があリ、調べ物をしていると、いけばなについての考えが深まることがよくある。ふとした偶然をきっかけに、いけばなについてより本質に迫った気になるのだ。

花と向き合っている時だけが花と向き合っている時間ではない。花を意識して他の物事と向き合うと何をしても花と向き合っている事になるのだ。花だけと向き合っているときには見つけられなかった花の姿が発見できる。一時的ではあるが、こだわりからの解放と言うこともできる。

こんな僕も23にして結婚をしたい人が見つかり、相手の承諾を無事得られたので結婚をした。入籍をする前に近所のマンションを借りてそこでしばらく生活をしていった。両家ともに少なくとも2、3年から10年は2人だけで生活をしていくだろうと思っていたようだが、私のわがままにより5ヶ月で家元宅で暮らす事になった。春から2人で暮らし始め夏中に自分達のマンションの退居をしたわけである。二世帯での生活を承認してくれた事には感謝しきれない。

僕の中で常に考えていないといけない問題がある。妻と自分の時間のバランスだ。最強の家元になるための時間を欲すれば欲するほどに妻との時間は無くなっていく。最強の家元である前に桑原健一郎である。

妻という日常の延長線上に最強の家元がある事を自覚しても、妻と見詰め合っているだけでは何も起こらない。自己研鑽に使う時間も大好きな時間なのでバランスを取るよう意識をしている。家族は人間が社会生活を送る上で一番小さく、各個人を形成するものである。自分が不安定な状態で人に働きかけることはできない。自分を満たす事から社会とのつながりはスタートするのだ。

日常の積み重ねが個人を形成することを考えると日々をどう過ごすかが大切なわけである。妻との時間は毎日が楽しい。

妻と一緒に住む前から分かっていたが、いや、ここまであろう事とは分かっていたいなかったのだが、お互いに我がごと強い事か。5ヶ月の間に2人で茶碗や箸すら決められなかった。お互いに全く譲らない。お互いの正しい、好みを曲げない。まあ、折れられても張り合いがないのだ。家元宅で晩御飯を食べていたことも原因としてあるが、方々を歩き回っても、2人共が納得できそうなものは置いていなかった。家元宅で暮らす2人の部屋のフローリングは取っ組み合いの喧嘩で決まり、

キャンセルをした新婚旅行は行き先を決めるだけで1ヶ月程もめた。

そんな中でも互いに肉への執着心は特に強い。一緒に食べている時はお互いに肉に集中しているが、彼女の量以上の肉を食べる私を否定してくる。彼女は私の皿のお肉を食べるほどの胃袋を持ち合わせていないのである。初めの方は大きな声で食事の妨害してくるが、疲れて静かになったと横に目をやるとお肉を食べる私を睨んでいるのだ。こんな楽しい時間はない。大きなことだけでなく小さなこと一つ一つで日々言い合いをしている。

こだわりとはその人が今まで生きてきた生活の積み重ねであり、その人らしさの集積である。他人の評価や目を気にするものではなく、自分の中にしかないものだ。

お互いがくだらない事にまでこだわりを持っているので相手に対して不満が生まれる。ただ、相手に対して持つその不満が、具体的であるため、その都度話し合う事で、優れた意見に従う事になっている。相手を想う気持ちの数えきれないほどの相手への否定を可能にしている。

同情や共感をするだけの夫婦像は私の理想としているものではない。生い立ち、経験の異なった相手に対して知らないで決めつけ、思い込んでしまう事は非常にもったいない。表面的な同情の共感ではなく、違っ

た境遇の相手に想いを馳せ、考え、理解しようとする事で自分の世界が広がっていく。そしてそれをそうさせるのは相手への好奇心である。

私が、家元になった時に、同情や共感しかしない人が隣にいと、自分を俯瞰してみることができずにどんどん独りよがりの作品、人格になってしまいうだろう。その事を考えると背筋がゾツとする。私の行く道の選択肢を広げ、間違っていたら強引にでも良い方向へ引つ張ってくれ人が横にいれば安心だ。私に客観的な視点を忘れさせないためにも、私を真つ向から否定してくれる存在がいてくれる事は非常に心強い。願わくは、お互いに違う事に興味を持ち、背中合わせで広い視野を持つとお互いの足りないところを補えるような関係であり、こだわりから解放され、究めることができる最強の夫婦なのかもしれない。互いに別世界に専門性を帯びた先に何かが起こると考えている。2人が納得できるもの、認め合うものができるものはやはり、特別な気がする。

円と円の重なり限りの限りなく近い楕円の共通項で知り合った私たちは相手の知らない世界を知っている。相手から聞く話の全てが新鮮で勘違いもよく起こるが、間違ひなく僕の人生を豊かにしてくれると確信している。ここまで周りに話したが結婚した理由は妻がただ横にいてくれる事が嬉しかったからだ。



春を生ける

△ 4 頁の花 ∇ 健一郎

花型 生花 株分け

花材 ユーカリ（フトモモ科）

ピンクッション

（ヤマモガシ科）

花器 陶水盤

ピンクッションは南アフリカを代表する花だが、オーストラリアで品種改良をしており、それが日本にやってくる。冬を終えて春を迎えるオーストラリアの花たちを、日本で生けることができる。当たり前になりつつあるが、不思議な出来事である。花屋では、春と秋が混在している。同時刻に二つの季節が地球にあると思うと胸が弾む。環境の数だけ生物の多様性がある。その環境に馴染むよう進化を遂げるほどに帯びる特徴を愛でたい。

ユーカリ本来の撓みを生かし足を交差させて固定する。ピンクッションは葉が悪くなりやすいので葉に注意して選びたい。

横から見た奥行き



『小作の着眼点』
しょうさく

ヒマワリに表情を

△8頁上の花▽ 健一郎

花材 ヒペリカム（弟切草科）
向日葵（菊科）
花器 金属裝飾陶器（モロッコ製）

「小品花は普段魅せる事ができない植物の姿を魅せるといい」家元の言葉である。まず、ヒマワリと向き合った。回しながら見るとなんと後姿の綺麗なことか。横姿のヒマワリ、枯れたヒマワリ、花弁が散ったヒマワリは大好きだったが、後ろ姿にここまで惹かれるとは思ってもみなかった。一番立派なヒマワリを長く控枝に置いた。



横から見た奥行き

伸びやかなヒペリカム

△8頁下の花▽ 櫻子

花材 ヒペリカム（弟切草科）
向日葵（菊科）
花器 金属裝飾陶器（モロッコ製）

ヒマワリを低く、ヒペリカムを高くすると、ヒペリカムの動きが生きてくる。



モロッコの器にモロッコ料理の「クスクス」を盛り付けるイメージで。

健一郎

3年ほどラーメン屋さんでアルバイトをしていた。ラーメン屋さんで人気のあるラーメン屋だが、そんなに美味しいわけではない。丁寧な接客をするラーメン屋で、お客さんへの配慮が行き届いているのが特徴である。だが22時以降になると愛想の良い女性従業員はいなくなり、夜の3時までは気分ムラのある男だけのラーメン屋さんになってしまふ。

私が働いていた時間帯は22時から3時で、忙しい日が多かった。夜中の1時から閉店の3時までにかけては従業員の疲労がピークになってくる。「しんどい」「疲れた」「なんでラーメン作らなあかんねん」。ラーメン屋で店員さんから一番聞きたくない言葉である。そんな中、頭のネジが足りていない僕は何に対しても「ちょろいっすわ」というのが従業員同士での会話の口癖で、周りに流されることなく、自分の接したいようにお客さんとお話をしていた。

「ちょろい」という言葉があまりにも特徴的だったため、私をからかうようにみんなが真似をしていった。「ちょろい」という言葉は、余裕がありますよ。という意味で使っている。ちょろいと言っている

と、一日中笑顔の絶えない感じのいい店になった。ラーメン屋のバックヤードで話す従業員同士の会話の第一声が「ちょろい」に変わっていく。ラーメンをこぼしても、「ちょろいっす、すぐ持つていったら良いやん。」

従業員同士で癖のようにちょろいと言いつづけていると、ちょろいが先行し、後に続く言葉が絞られてくる。ちょろいという言葉は、ラーメンがこぼれた事と向き合うのではなく、どのように次行動するかを考えさせる。時にはなんでも軽視する悪ふざけのような雰囲気になりそうな時もあったが、楽しくアルバイトをすることができた。ちょろいと言ってしまうとなんでも出来そうな気がする。世の中をなめていた大学生の口癖がラーメン屋の雰囲気を少しだけ変えたのだ。

口癖が人生を大きく左右すると言ったら言い過ぎになってしまうのだろうか。

言葉が及ぼす人への効果、人への効果を考える上で面白い話がある。

「五体不満足」の乙武洋匡さんは四肢欠損の状態で生まれた。乙武洋匡さんは母親に愛され、「あなたはなんでもできるのよ。」と言われて続けて育つたそうだ。赤ん坊が「私には出来ない」と思ひ込むわけもなく、そのままの自分を受け入れ、自信をつけた。母親の言葉(愛情)を多分

に受けて育つたのである。話を聞けば聞くほど、自信に満ち溢れてキラキラとした乙武洋匡さんにしかなりようが無かったようにすら思えてくる。

人は言葉によって思考する。その人を取り囲む言葉がその人である。自分の周りの言葉がどんな言葉でできているのか、人へ伝える言葉はその人に影響を及ぼし、その人を形づくる。

グループホーム(認知症対応型共同生活介護)では非言語のコミュニケーションはもちろん大切だが、言語によるコミュニケーションの効果も人間関係の構築の上で大きな影響を与えている。

職員が利用者に対して言葉によって影響を与えていることは確かにあるのだが、私が働いていて驚いたのは、利用者が職員を動かす力である。今はおおむこうにいらつしやる、おばあちゃんであった。彼女は目の前で

の出来事と全力で向き合う。「先生(職員)は日本一やー!!」「ここで頂くご飯はみんな美味しい。」「私、幸せや。」「トイレ、入浴の際には必死に抵抗するが、人間らしくいたいと誰もが思わさせられる。事が終わると、「ほんま、おおきに。ごめんな。」「言葉が彼女の全てであったと思うほどに、深い感情を込めた言葉だった。すべての職員だけでなく、他の利用者からも気をかけられてお

り、私の働いているフロアを中心にいつでもいた。

私達は言葉によってしか思考できない。なぜなら、言葉を使わずして思考できないからである。私達は言葉に支配されている。自分の言葉でしか世界を見ることができない。

私は恵まれている。沢山の素敵な言葉を浴びて育つた。自分で言葉を選択できるようになるまでは言葉を選ぶ事ができないが、言葉を選ぶ事ができるようになると、その後を選ぶ事ができる。

私は問題に直面した時の口癖はある程度限定されていると考えている。それは問題が起こった時、とつさに出てしまう言葉のことである。問題に直面した時にその人がでる。余裕が無くなり、純な姿が垣間見える。

そもそも問題とは、自分の理想と現実の差である。そして解決することとができるのは、自分の問題のみであることを忘れてはならない。解決出来ない問題は他人の問題のみだ。他人の問題で頭を悩ませるほど大変なことはない。他人の問題を自分が問題にしているだけなのである。

自分の問題は解決し易い。問題に対して柔軟に自分が変わることです。問題は解決する。問題と出会った

時の自分の反応次第で問題は大きくも小さくもなる。問題だと思わなければ問題でならない。問題の区別、問題への反応、問題への対応のサイクルが自分を形作る。

今の私の口癖は今、2つある。1つ目は「余裕ですよ。」である。大学生の頃と変わらない。私は解決が困難な問題と向き合ったかも知れないが、余裕だと思つて取り組んでいたのが気がつかなかった。余裕というと、それが解決できると勘違いするために頭が動き始めている。口癖になり、反射的に出てしまう、この言葉に後押しされて興味のあることをなんでもやってみよう。

2つ目は「最強の家元」である。何年か言っていると家族から心配をされるようになった。最強の家元やねんろ?自分ばかりお肉食べてんと人にあげや!!「最強の家元やったら朝ゴミ出すねんで!」「最強の家元く食器拭きして!」いいように使われている気がしなくもないが、この積み重ねが、最強の家元になるために必要だと考えている。最強の家元になるものではなく、ならさせてもらうものなのだろうか。

今一度、自分の使っている言葉を考えるのも面白いかも知れない。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2020 年
10 月号
No.688

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



足で生ける

△表紙の花▽ 健一郎

花材 矢筈薄（稲科）

女郎花（女郎花科）

秋海棠（秋海棠科）

花器 陶花器

滝を見に行くと、シュウカイドウと出会う。小さな滝の時には出会わない。荘厳な滝の時にみに出会える。シュウカイドウさんがたくさんいらつしやる時は大きなどんなに大きな滝なのだろうと想像が膨らむ。日が当たりすぎず湿度の高い所が好きみたいだ。あまり水が多すぎる所も好まないようで、ピンク色の花が虫や私を惹きつける。

一つ一つの自然体験が足で花を生ける事につながっている。足が軽いうちに方々を見て回るつもりだ。

矢筈ススキと女郎花、花器、バツク紙、自分の経験に基づいた世界観をある程度表現する事ができた。

横から見た奥行き





重陽の節供

△4頁の花▽ 健一郎

花型 生花 真の花型

花材 菊（菊科）

花器 煤竹竹筒

9月9日に京都市内のあるお寺で長寿祈願のため、菊の花とともに能が奉納されたのを見学してきた。

菊の季節には一ヶ月ほど早く、生の蕾の一輪菊と、立派な造花の糸菊が奉納されていた。

旧暦と新暦。生活していると食の違いが顕著に現れる。自然のサイクルの一部となり人間が生活を営んでいた時代を羨ましく思う。

写真の菊も蕾だったため、七本生けてもスッキリと入っている。これから始まる菊の季節を謳歌したい。



『生きる』

健一郎

なんのために生きているのだろう。自分の意思で生まれてきたくて生まれたわけではない。社会の役に立ち生きる事が有意義な人生なのだろうか。人が生きる事に意味などなく、次へと命のバトンをつなぐ事が生き物として正しい事なのだろうか。

グループホームへ入るまでは社会の中の自分を意識し自分を鍛え、人に何かを伝える事が意味のある事だと思い込んでいた。

勘違いを恐れずに告白する。グループホームで働いて感じた事である。利用者が生きているのは家族の思いのおかげであると思っていた。今までお父さん、お母さんだった人が脳に障害を負い、姿形は同じだが変わってしまった、自分という存在から最も近い肉親を守る行為、社会的な観点から見れば義務であり、責任感がそうさせているとなんとも思っていた。

そして、人を死なす事ができない発達しすぎた現代医療について目を向けていた。利用者の存在が職員の雇用を生み、社会を刺激し生産活動を促しているが、利用者自身が主体

的に何かを生産することはない。

「私いつまで生きるんやろ？私もう充分、生かされてもらってん」年齢的なこともあり死について日常的に考える利用者は多い。今まで自分の身の回りのことが当たり前にでき、子供を育てたほどの人が、少しずつできる事が減っていき、他人の助けなしに生活する事が難しくなることは、自尊心を大きく傷つける。自分の存在意義を何度も何度も考えるが、無くなった自信がそれを生み出しにくくさせているのかもしれない。なので介助中に「堪忍ね、こんな事までしてもらって。」とお話が

あれば、私は「順番ですよ。」と答えるようにしている。

一年同じ場所で過ごすうちに利用者として日々を過ごすうちに抱く感情に変化が私に現れ始めた。特別な感情を持つようになった。毎日そこに利用者の方がいる事が私を嬉しくさせたのだ。存在がこれ程ありがたく素敵なものだと感じられたことはない。人を素直に認める事ができたと同時に自分と人の間にあった境界線のようなものがなくなっていく感覚とでも言おうか。摩訶不思議な体験をした。きっかけは分からない。おそらくグループホームでの日々の積

み重ねがそうさせた事だけは確かである。

相手の存在を認める事ができると、自分の事も許せた。何故ならば相手への言葉の根底は自分への言葉と同じであるからだ。何もしていない、ただいだけの自分を許す事ができた。相手に対してだけでなく自分に對しても「してくれてありがとう。」ではなく「居てくれて在り難う。」自然とそんな気持ちが湧き出た。

人に価値を届ける事が人生の意義であると、自分の価値を社会の中に

しか見いだせずにいたのである。必死に価値のある自分になろうと自分を取り繕っている事に気がついた。例えば読書がそうである。興味はないが必要そうな本を買っても、それは私には必要ない。今、自分の本棚は自信のなさの現れではなく、趣味の現れだと自信を持って言う事ができる。

お弟子さんから「先生の生き甲斐はなんですか？」と質問を受けた。恥ずかしくて声を出すのに数秒かかったが自然と口から出た答えだ。「生きている事が生き甲斐です。」



今年の夏の自然体験。滝に打たれてみた。
衝動を大切に、したい事をする。 健一郎
(撮影：菜月)



タカサゴユリの実

△2頁の花▽ 健一郎

花材

梅花躑躅(躑躅科)

高砂百合の実(百合科)

鶏頭2色(苧科)

花器

陶花瓶

高砂百合は種子を多くつけ、風に運ばれて広がっていく。高速道路で高知の牧野植物園へ行った際に、大勢で私を迎え入れてくれた。

花の季節が終わると実になり、意識しなければ見つける事ができないが、ふとした時に道端でも出会う事がある。

花を終えた実と、葉の役割を終えた梅花躑躅に、盛りの鶏頭がよく映る。



タカサゴユリの花

出典: <https://ユリ.net/ユリ-品種/タカサゴユリとは？.html>





立花

△ 8 頁の花 ∇ 健二郎

花型
直真立花
すき
薄 (稲科)

糸菊 (菊科)

吾亦紅 (薔薇科)

丸葉の木 (満作科)

山芍薬の実 (牡丹科)

杜蘭草 (百合科)

葉菊 (菊科)

竜胆2色 (竜胆科)

二輪菊 (菊科)

梅花躑躅 (躑躅科)

檜扇の実 (萱蒲科)

花器
陶花瓶

野の花の種類が一番多い恵まれて
いる時だった。この秋を立花にふん
だんに詰め込んだ。

枝物は丸葉の木と梅花躑躅のみで
あるが、草花に説得力が出ている。
翌日に薄の葉は巻いてしまった為
生け替えながら楽しんでいる。

横から見た奥行き



『溶ける』

健一郎

自分と人との境界が溶けてなくなっていく。私はこの世界の一部ではない。全てが渾然一体と化している。

桜とバードウォッチング。鳥の元気に振り回される。
水中を泳ぐ。自分と水の境界が曖昧。夏の砂浜。じりじり太陽を受ける。苔でゴロゴロ。ここから動けない。岩にびったり。何故か落ち着く。山頂にて瞑想。自分を無くしていく。雨でびしょびしょ。傘は置いてきた。空から落ちる。体が無くなったよう。雪中に溺れる。身体の熱をとられ私もひんやり。
花を生ける。花とおしゃべり。

頭を使って物を感じ取ろうとする行為は難しい。何も考えず、身体を放つぱり出す方が、想像を超える体験が可能である。

大自然はどう感じているか分からないが少なくとも私は相手と溶け込むことができる。感じている。

花と話しながら花を生けるのは楽しいが、感覚を研ぎ澄ましていくと花と一体になる事ができるのである。それには大自然に溶ける練習がもう少し必要であると考えている。今の自然の一部である切り花に溶け込むようになるには、今感じている「溶ける」と言う感覚を研ぐ必

要がある。単純なもののほど自分を溶かし難い。頭でわかってしまい、言葉に出来てしまうからだ。言葉を越えた雄大さを花から感じなければいけない。

私は自宅の庭を眺めることはできても、まだ、溶け込むことはできない。何かに夢中になった時、自分への意識が消え、自分でなくなる。

少しでも自分がのこっている、対象物の全てを感じられない。感じるとは、私を通して伝えられる感覚ではあるのだが、できるだけそのままのそれを私で感じていたい。自分を無くしてだけ何かが入ってくる。

音楽に体をゆらす。不快と快の間を彷徨うヴァイオリンの音、身体を解放すると、苦手な音が無くなっていく。心臓に直接響くバスドラム。バスドラムで心臓が動いているのかと感じる。

「閑さや 岩に染み入る

蝉の声」芭蕉の有名な

句である。蝉の声だけを聞き、蝉を見たわけでもなく、本人がそこにいるだけでもない。主題がぼかされているのである。閑さが主題なわけでもなく、岩も、蝉の声も主題ではない。その空

間を詠んだ句だと認識している。つまり、そこに自分は存在しているように存在せず、自分が溶け込んだ状態と考えることもできるのかもしれない。

芭蕉は全国各地を歩き回り、その地、その地にて自分を溶かし歩いたのではないかとこの妄想も広がる。だが、芭蕉はスカイダイビングをもスキューバダイビングもしていなかっただろうし、日本から外には出ていなかっただろう。

私は今生きているこの時代を感じたい。世界と私の輪郭線をボカしていけたらと考えている。



但馬で日帰りでのスカイダイビング



ヤマシャクヤクの実

健一郎

花型 生花

花材 ヤマシャクヤクの実（牡丹科）

花器 陶花器

一度見たら忘れることのできないインパクトを持つ山芍薬。山芍薬独特の赤と深い紺色が何とも愛らしい。

盛花や投げ入れで生ける事はあっても一種で生花にする事は珍しい。菊と株分けで生ける予定だったが、山芍薬のはちきれんばかりの個性を中和させることがもったいなく感じた。

不恰好で土味を感じさせる器に山芍薬の個性があっている。葉が綺麗な状態で残っていることは珍しく、真の葉はあえて一つも落とさずに生けた。留にもう少し葉があればと思うが自然に対して自分が何をできるわけでもなく、ありのままに生けた。



ヤマシャクヤクの花

出典：<https://akagishizenen.jp/blog/> ヤマシャクヤクが見ごろです！ /



クリスマス

△2頁の花▽ 健一郎

花材 モミの木（松科）

ブルーアイス（檜科）

手編みのツリーオーナメント

花器 磁器扁壺

「はなあそび」と題して菜月と遊び心のあるいけなを楽しんでいる。

今回は菜月の作った手編みのオーナメントを、もみの木に合わせてみた。かぎ針あみに夢中になっていたときに、ものの10分程でこさえてくれた。

素材が変わりデザイン化されたモミの木と北欧風の人形がよく合っている。



菊一色

△ 4頁の花▽ 健一郎

花型 立花 菊一色 除真のきしん

花材 糸菊(菊科)

小菊(菊科)

花器 銅薄端銅薄端

園芸が発達し、自然の勢いを器に生けることが難しくなっている。花屋に並ぶ花のほとんどがお利口さんなのだ。花一輪ずつの個性が均一化されると個の魅力を引き出すのが難しい。丁寧に育てられた菊では自然の状況を想像しがたいのだ。今回は各々が伸びたいように伸びた勢いのある菊と一本つつ向き合えた時間に感謝している。

銅器に施された絵は一般庶民が踊っている様を描いた物であろうか。今までの自分だと絶対選ばなかった器である。自然を表現する身として、人の存在を消したいという気持ちが強かったが、今は人が花と在る景色を受け入れることができている。人が花と在るあたかさが身に染みるのである。



『魅力』 健一郎

マスクをつける事が日常になってから、化粧の時間が減ったとよく聞く。そんな中私は髪を伸ばしてみた。

菜月の勤めである。私は中学生の頃、叔父に買ってもらった髭剃りを毎日使っている。伸ばし始めて2、3日で鏡をみたとき自分の顔に違和感を感じた。髭については漠然と、歳を重ね90歳ぐらいになった時に山で菜月と暮らす際、白い顎髭だけ伸ばし、仙人のような生活ができたならと考えていたくらいである。

ムダ毛処理と言う言葉がある。無駄な毛、つまり汚らしく見える毛を処理し綺麗に見せようとする行為である。これは人の目があるからこそ成り立つ行為である。

植物を見る行為、また見せる行為として発展してきたいけばな。花を生けるときは多すぎる葉、虫食いの葉などを取り除く事で美しくみせる。見ていて気持ちのいい花を生けることが基本にある。

余計な毛というものの、毛にも役割があるといわれている。服を着る習慣がなかった時代は体温維持、外界からの刺激を和らげる役割があるそう。そして現在、残っている毛は特に大切なものを守るために生えている。葉っぱは大切な幹を、花びらは蕊を守っている。そして毛も

花びらも、独立的な役割も持つ。髪の毛も人を惹きつけるためのその人の魅力となり、花びらを使って虫や鳥、人を魅了する。

つまり、余計なものでは断じてなく、それぞれが役割を持っている。美しい、美しくないの物差し、つまり、みる、みられる関係においては、余計な毛であるという認識が正確であらう。

身だしなみと、おしゃれはどちらも、みられる場合において成り立つ。

花を生ける際、花の身だしなみを整えるべく葉を整理するが、触れる人の技量によつては魅力が失つてしまふ事がある。没個性的な花になつてしまひ、その花である必要性がなくなつてしまふ。一枚の葉っぱ単位での個性を考える事はまだ難しいが、せめて一本一本の花ごとに、その個性を引き出し、より魅力的なものとして存在して欲しいと考えている。時には、私の願望で花に迷惑をかけることもある。おしゃれは我慢だということだろうか。

身だしなみは周りへの配慮であり、おしゃれは見せたい自分をみせることである。周りへの配慮を考えることで、ある一定の水準以上の清潔な花を生けることができる。個性を失わずに生ける事が難しいのは清潔さを求め、手を加えるほどにその花の元の姿から遠ざかっていくから

である。だがやはり、忘れないでいただきたいのは、身だしなみを整える事ができて初めておしゃれをする事ができることだ。

私にとって良い花とは、同じ種類であらうと各植物の個性を存分に引き出し、生命力に満ち溢れ、輝いている状態の事を指す。その個性が私にとつて苦手な種類の特性であつても、自分の好みに寄せず、その個性、つまり魅力を引き出すことでその命が輝くのである。

私は植物と向き合うだけでなく、グループホームで人と日々向き合っている。なんとなく自分が今までしてきた事が言語化できる程にまで整理でき、スッキリとしている。

認知機能の低下が著しい利用者を抑え付け、職員にとつて都合の良い1日が過ぎていくことに我慢ならないうでいる。各利用者の体に無理がない範囲であれば本人が望みさえすれば、何をしたいといい。職員が押さえつけなければ、利用者は生き生きとしている。机の上に椅子を置いてもいいし、机が持ち上がらないのなら手伝おう。机が汚れたら、消毒すればいいだけだ。

私の1日は利用者と絶えず、いたづらをしあい、注意され、不安と向き合い、本人がしたくてもできないことを、自分を剥き出しにして、お

手伝いをしてしている。介護のことを、できなくて可哀想だからしてあげようだなんて考えたことはない。間違つても職員が、自己表現をしようとしている人の障害にだけはならないうでいて欲しいと強く願う。頑張り屋さんを頑固な高齢者として見て欲しいくない。家族の介護を助けるため、立ち上げられた施設だが、施設の目的は利用者の生き生きの意義を見出し、個々が生き生きとして最後まで生活できる環境を整える事ができたらなと考えている。

自分の価値観を押し付けた瞬間にその人のらしさは、その人の中に逃げ込んでしまひ、表出しない。その人の奥にある、らしさを引き出す。これが生きるということでは無いだろうか。安心できる環境に身を置けば自然と取り繕う必要がなくなる。その人自身が認められたと感じた瞬間からその人が輝く。

周りからどう思われていようと、生き生きしている人は夢中だ。生き生きしている人の目が大好きでこの仕事をしている。

生き生きと生きることが、最高の一生であるとは考えている。

生きる事は美しい。

一週間程、髭を伸ばしてみたがどうもしつくりこない。鏡に映る自分

が汚らしく見える。叔母からも、大ブーイング。「私の前でご飯を食べないで」と騒いでいる。菜月だけは、「おじさんみたいでええやん」と言ってくれているのだが、私自身が耐えきれずに剃った。

しかし、道を歩いているとどうも髭が似合う人とすれちがう。その髭は丁寧に手入れされ、その人の魅力となり、静かにそこにいる。虫食いの葉が似合う花、ちぎれた葉、奇形な花があろうとも、それが魅力とさえなれば、あるべきだ。むしろその魅力を取り除くことで、大きなマイナスに働くわけである。その人にとつて似合う、似合わないの問題である。





稽古の立花

△ 3 頁の花 V 健一郎

花型 除真立花 のきしん

花材 柊 ひらぎ (木犀科)

雪柳 ゆきやなぎ (薔薇科)

水仙 すいせん (彼岸花科)

鳥不 とりふ 止 とどまらず (目木科)

椿 つばき (椿科)

赤芽柳 あかめやなぎ (柳科)

寒菊 かんきく (菊科)

小菊 せうきく (菊科)

花器 陶花器

毎月一回家元の立花研修会が行われている。一杯余分にお花を頼み、私はその日の晩に立てる。毎度、見事な取り合わせで、毎月の楽しみの一つである。立てる前に家元の説明を受けることができないのが残念である。毎回役枝のらしさ、その植物のらしさを意識しており、今は特に奥深い景色が作れたらなと意識している。お風呂上がりの半分目が閉じかかっているように、家元の発す一言が次への課題となっていく。



『ええ格好しい』

健一郎

おじいちゃんは行き先を間違えたタクシー運転手に「面白い話をありがとうございます。これはそのお礼です。」とチップを渡し、満たされた笑顔で車から降りた。

道のプロフェッショナルであるタクシーの運転手があるう事か、道を間違え1時間ほど道を走らせた上に、おじいちゃんの機嫌を伺うような会話を苛立ちに身を震わせていた自分がどうでもよくなった。何が起きているか分からず、いつとき頭が真つ白になり、私の関心は祖父への不信感へとすり替わったのである。平然とそういつた行動をする祖父を側で見てきたが、いつもいい顔をしていた。祖父は何も言わずにムスツとしていて私を見て楽しんでいないに違いない。

自分の事で精一杯な時にこの話をよく思い出す。祖父が持っていた自信、余裕への憧れからだと思う。余裕があればここまで人のことを思えない。

この話を思い出すたびに何故か、動物が自分の損失を顧みずに、他者の利益を図る行動という、利他的な行動について考えさせられる。祖父が利他的な行動をしていたかは不明なままであるが、私はいつも思考の中心には自分がいたことを自覚していたからだろう。人を自分と同じように接することができている祖父が

羨ましかった。祖父は自分に酔っている様にも見えたが、それはそれで気持ちがいいものだ。何故なら2人ともいい気持ちになっているからである。

人間に、みられる利他的な行動は余裕からしか生まれないのではないだろうか。

極端な例になるが、余命宣告を受けた人で、世界経済について本気で心配する人はいないだろう。自分へ差し迫った恐怖があると、視野が一気に狭くなる。自分の事と、自分に近い人たちの事を考える。人は本当に面白いもので、紛争でどれだけの被害が出ようと、自分の顔にできたニキビの方が重大な問題であるのだ。

自分に余裕が無いと人に考えを及ぼせることはできない。ある程度自分のコンディションを日頃から整えておく必要がある。

直近では、通りすがりのご婦人が落とした携帯を拾うことができなかった。引越したため、大きな荷物を両手いっぱいにつけていたからだ。心に余裕は持っていたのだが物理的に手が塞がってはいけなかった。

その点、グループホームでは役割が与えられていて気持ちがいい。お給料はいたれているが、フリーマンとして利用者さんの困りごとを支援し放題だ。とはいっても利用者さ

んがしたくて出来ないことを出来ない分だけ補助するだけの事である。生きる事に疲れた人であつたとしてもせつかく生きているのだから、今を笑えるものにできたらなと思つている。お節介をしたりして家に帰りたい利用者さんの気持ちが「家庭帰りたいけどここに居るのも悪くないな」程度に思つて頂けることを日々目指している。お札の言葉も嬉しいが、「ここはええところ。きてよかった。」この言葉ほど嬉しいものはない。

いい状態とはいつも適度に手を抜いて肩に力が入っていない状態のことである。手ぶらで何も考えないでいると、周りの情報がよく入ってくる。自分が街を歩いているのではなく、街を歩いている自分に視点が変わる時でもある。

利他的行動の起源は蟻や、蜂が示してくれている。自分だけの利害を優先するわけではなく、集団として生存するために、機能的な社会を作り、それぞれの環境を取り巻いては、生き物の世界では集団内では利己的な個体が利他的な個体に勝つが、集団間では、利他的な集団が利己主義者の集団に勝つとされている。そして、自然淘汰は個人のレベルだけではなく、集団レベルでも生じる。集団内のメンバーを犠牲にしながら集団をより幸福にするような集団選択のメカニズムが働いているというのだ。

それはもちろん人も例外ではない。社会性に基づく利他主義こそが人と言う生物種の成功には必須だったに違いない。生物進化の歴史における重大なステップでもある。個人が他のために効果的に分業し、最終的には自分に返ってくるものを期待している。

不機嫌そうな利用者に向かって、とびきりの笑顔を見せると、そこそこの笑顔が返ってくる。利用者さんのとびきりの笑顔が見たくてとびきりの笑顔を作ったはずなのに、利用者さんのそこそこの笑顔で私は本当にとびきりの笑顔になつてしまう。そして本当に笑うと利用者さんも本当に笑ってくれる。利用者さんに少しでも不機嫌な状態でいてほしくないな。と思つた気持ちが作つた笑顔で本当に自分も笑顔になつただけの話である。

余裕なんて全くない時に、無理矢理にでも余裕を作れば、自分も救われるのではないだろうか。

私自身、自己中心的な性格を重々、承知している。第一声が、「僕」または、「俺」であるからだ。だが利他的ともみてとれる行動をすることもある。それは自然にでた私の一面ではあるが、自分のその行いに、いい気分になつているので利他的な行為として認めていない。その場では利他的に見えたとしても、長期で見ても自分に返ってくる見返りを見込むこともある。何かされたら何かを返さないといけない気がする。人が生きていることに喜びを感じるようになった最近では、考えるより先に身体が動くようになりつつあることをこの一年ぐらいで感じる。自分が中心ではあるが、自分が助けたいから助けているだけである。少し冷たく感じるがそれぐらいいいのかもしれない。

行為までの思考過程は違つても結果の行動が同じだったらそれはそれで素敵な話ではないだろうか。ええ格好をするのは気持ちがいいものだ。





紅葉一色

健一郎

花型 砂物 紅葉一色
花材 いろは紅葉(楓科・無患子科)

松(松科)
晒木
花器 銅砂鉢

砂物についてはまだ全く分かっていない。ただ枝の赴くがままに立てていっただけである。写真では伝わらないが大きな松の枯れ木の控枝を気に入っている。大きな粋組みとして、真行・草とあるが、真から順番にバランスを取ることが困難になっていく。役枝を際立たせるのではなく、紅葉の葉を多くのこした。次の日には葉がカリカリしていたため、今年はただ自然の紅葉が散った時とは違い、自分の一部が散っていくような複雑な気分になった。数年後にこの作品を見てどう自分かと思うかは分からないが、今は満足している。綺麗だ。





水仙一色砂物

△2頁の花▽ 健一郎

花型 二株 砂の物
花材 水仙(彼岸花科)

寒菊(菊科)

小菊(菊科)

著我(菖蒲科)

花器 染付青磁砂鉢

去年から自然のままに育った水仙を仕入れてもらっている。手間のかかる作業だが、僕のわがままに花屋さんや農家さんの協力があって、勢いのある水仙を生けることができています。今回は前回に比べ、黄色い葉の比率が多かったので、水仙の終わりの季節を思わせる砂物になった。大好きな緑の綺麗な格好良い形をした葉が一枚一枚が際立ち、花がより引き立っており、寒菊も綺麗な花を咲かし、良い景色を見せてくれている。

器は鴨が泳いでいるのであろうか。その情景と色が水仙によく似合う。



水仙の枯花



斜め横から

『聴覚』

健一郎

私が最初に記憶している音は、幼稚園児だった頃に祖母が子守唄にかけられていた『トルコ行進曲』だ。寝る前に昔話の後に〇〇をかけてくれた。楽器はフルートのみで心地がいい。行進曲であつたが自然と眠りにつけるようになった。音楽を聞くことは好きであつたが、演奏する方は得意でなかった。歌うときは音程がとれず、楽器を触つても思うように指が動かない。母親は私にピアノを習わせようとしたが、踊つてばかりで、仕方なしにサッカーをやらせたようだ。

あの頃より二十歳を重ねた。色々な音を聞いているはずなのだが、記憶に鮮明に残っている音は音楽が多い。私は言葉の発明が大きく聴覚を退化させたと考えている。音が意味になるということは音である要素が少なくなるからだ。空耳は自分の耳が捉えることのできる言葉であるのもその例だろう。音楽もそれぞれの地域でそれらしい音階(意味)を与えているものである。

いくつかのジャンルの音楽を聞いた。回数は音楽プレイヤーで聞くことが多かったが、やはり心揺さぶられる音楽体験は、生のものではあつた。

少年時代は祖父がずっと聞いていたジャズ。祖父といふ事が多かった

ので、自然と影響を受けた。上海に行った際、祖父とタバコ屋さんで好きなキューバの葉巻を選んでバーの席につき、僕がリクエストした曲を演奏してくれたことが記憶に残っている。どんな曲だったかとも思い出せず映像だけの記憶だが、初めての生の音楽体験だった。当時小学生の私にとって全てが新鮮だった。学校から行かせてもらった、京都市交響楽団の演奏の迫力を今でもよく覚えている。パイプオルガンという楽器もその時初めて知った。

小学高学年から中学生の頃は日本、イギリス、アメリカのポップ音楽を聞いていた。日本の歌手は親に頼み、コンサートに連れて行つてもらつたが、感心したのは舞台装飾や衣装で、音は、音楽プレイヤーでの体験とさほどに変わらなかった。

高校時代は日本のロック音楽に傾倒していた。耳で聴くのではなく、体で聞く体験をした。ロックフェス、音楽ライブでは頭、体を揺らしバスドラムで心臓を揺らされ、人の上で転がり回つていた。生の音の体験として面白いものだった。この頃は〇〇で聞くと音が弱く感じるようになり、ライブに行くことが増えた。そして、この時から音について不思議な気持ちを抱くようになった。

人間の耳には聞こえていない2万ヘルツ以上の高周波(音の高さ)は体と心の健康をつかさどっている脳

を活性化し快適感をもたらすことができるらしい。YouTubeやCDは人間の音に聞こえない音を録音していない。生の音楽は低周波、高周波、関係なく私の全皮膚を振動させ、聞くことができるから特別なものかもしれない。そして、音は聞こえたその瞬間から消えて無くなつていく。花の命よりずっと儚い。この音の儚さにオーラがある。録音した鳥の鳴き声、水の音を家で聞いてもそれはただの複製物でしかない。

ロックと並行して、ヴァイオリンの音がすごく好きで、聞きに行つていた。そして、大学時代には小澤征爾の演奏を体感した。音の振動が自分に伝わり、理屈なしで心を動かされた。音で感情が込み上げ、胸が苦しくなつた初めての経験である。なぜ圧倒されたのか考えているうちに音楽とは何か、音とは何かと考えるようになり、現代音楽に関心を持つ。ジョンケージ・武満徹や音に挑戦し続ける坂本龍一に興味を持った。

グループホームで働くようになつてからは、日本の季節を題材にした童謡に強い共感を受けた。日本の自然が作らせたと思えるほどの歌詞と綺麗なメロディーの流れは聞くほどに感激する。幼い頃に聞いていたはずなのに身体へ染み込むようにして聴こえる。今までボーカルの声を言葉としてではなく一つの楽器にも近い、音として認識していたのだが、童謡の美しい詩が味わい深い。

祖母から子守唄にクラシック音楽を刷り込まれ、祖父といふ安心感の側でジャズを聞き、ポップ音楽を耳で聞き、ロック音楽を体で聴き、現代音楽を耳と頭で聴いた後はグループホームで童謡に浸つた。そして今は、体を自然に溶かし、自分自身もノイズとなり、音として在ることが気に入っている。その時々で自分にとって、いいものを聞いて過ごしたい。最近は音楽より、御所や鴨川で寝転がっている方が好きな音に出会える。

よく意識して音を聞くことがある。目を瞑り、静止する。自らは、音を立てず耳をたてる。初めは自身の呼吸に意識がゆくが、次第に自然と、周囲へと注意が向く。自分を少しづつ無くしてゆき、その場に自分を溶かす。自分に当たる風の音を聞くと自分が今ここにいた事を思い出す。風が吹き葉が揺れる。そこに葉がある事に気づき、目には見えないが風の存在を確める。目に見えないが耳には音として聞こえる。

今ここに注意を向けて耳をたてると、さまざまな音が聞こえる。聞こえていたはずだったが聞いていなかったのだ。私たちは常に音という情報に晒されている。過去や未来の自分について考えることがよくあるが、最も大切な今の自分は耳を研ぎ澄ますことで強く認識できる。

この半年ぐらいは突発性の難聴と付き合ひながら生活している。飛行機の離着陸の際に耳が詰まったように感じるときの耳閉感が、疲れが溜まると現れる。酷い時は痛みを伴う。落ち着きがない性格が体に無理をさせてしまつていた。今は何もしない時間を大切にしている。音楽を聴くと、普段に比べ、1オクターブ低い音に聞こえ、疲れの度合いに比例して音が反響して聞こえる。某月はその事を知つてエコーがかつたような声を振動させて話しかけてくるのでまいる。音楽も長い間楽しめていない。無くて初めて大切に気がつくと言いが、その通りである。

聴覚の大きな特徴として亡くなる直前まで音が聞こえると言うことを、介護職として人を取扱うときに初めて知つた。意識レベルが低下して声が出ない状態であつたが聞こえていると信じて声をかけていた。相手が聞こえていると信じて話す声は独り言とは性質が異なるが、自分の声がよく聞こえた。話すことで普段言われないような言葉が出てくる。日々の言葉を見つめ直す必要を考えた。

ついこの前にグループホームで1人の利用者を看取ることができた。理想的な老衰で、無くなるまで日々接することができ感謝している。僕が働き始めた初日からお世話になつていた利用者で人として大切なことを学んだ。会話が少しづつ難しく

なつた頃から個室で2人きりでたくさんのお話をした。

看取るその瞬間はなんとかご家族に来てもらうことができ、逝かれた。本当によかった。在る力。存在力とでも言おうか、そんな言葉が頭をよぎった。人がそこにいる事は大きなことだ。次の日、その部屋から一切の音がなくなり、匂いだけが残っていた。

音は同等ではなく、全て自分で選んでいる。意識すれば鳥の声、虫の声を聞き取ることができるが、注意を向けることが難しい。意識して選ぶこともできるが、ずっと意識を聴覚に向けることは難しい。

日々を自分の聞きたい音が聞こえるように癖をつけるといつも心地よく過ごせるに違いない。周りの環境を変えることは難しいが日々の言う言葉を改めるだけでいい。

声が出なくなるまでは、自分が一番聞いている言葉は、自分が話す言葉である。誰に何を話そうが、誰よりもその言葉を近くで聞いているのは自分だ。そう考えると少しは自分と同じように人に対しても接することができないのではないだろうか。人を大切にしていることはその実、自分を労る事になる。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
3 月号
No.693

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



松^{いっしき}一色の立花

△表紙の花▽ 健一郎

花型 除真立花^{のきん} 松一色

花材 松^{のきん} (松科)

晒木

花器 銅立花瓶

寝室で立てた立花である。5日ほどかけて少しづつ立てた。寝る時前に見て、目覚めて首を横向けるだけでそこにある。これだけ悩めるのは、生命力の強い松ならではだろう。存分に楽しむことができた。数日かけて立てたため、当初の見立てから大きく逸れたが納得いくまで向き合えた。火を絶やさないように焚べる薪割り、ジェノペーゼで使う松の実、いけばなでお世話になりっぱなしの松だが、古来から世界中で愛でられてきた。生けるだけでなく、こういった多面的な付き合いはいけばなになった時に奥行きとして現れるかはまだ分からない。

横から見た奥行



京都新世代いけばな展 2021

#ハナノコキユウ

明日へのエナジー

会期 2月20日〜23日

会場 京都府立植物園

出品 桑原健一郎

花材 連翹^{れんぎょう} (木犀科)

小手毬^{こでまり} (薔薇科)

椿^{つばき} (椿科)

花器 陶花器 (市川博一作)

植物園には天井が無かった。広々とした空間に勢いのある連翹を豪快に生け、椿と小手毬を添えた。器が醸す^か釉薬の色が連翹の黄色とよく合う。強い風が吹くなか4日間来園者を魅了し続けてくれた。

健一郎



ストープの前で本を読んでいるとレモンが足に乗ってきた。

(健一郎)



『触覚』

健一郎

人間は奇妙である。裸では健康でいられない珍しい生き物なのだ。時々服を着させられている犬を見ることはあるが、毛が無くなってしまうのではと心配している。私たちは猿人から人間へと進化する過程で、びつしりと体を覆っていた毛を失った。それ以降、剥き出しになった皮膚が世界との接点になっている。

皮膚は人体を覆う最大の臓器であり、外界から身を守る役割になってしまった。そして皮膚の状態についてさまざまな方法で情報発信をする器官でもある。毛が無くなっているから、より触覚が発達したのではないだろうか。

猿は食べ物をわけてくれた相手に対して毛繕いをする。何かをやってくれたことへのお返し、感謝の心を伝え、信頼関係を築く方法のひとつであると考えられている。家では猫のレモンを撫でると、よく指を舐め返してくれる。愛情深いレモンは丹念に皮膚を舐めてくれる。ザラザラとした舌が僕の皮膚と接触するのだが、産毛しか生えないので申し訳なく思っている。そして用がなくとも体の一部を擦り寄せてくる事がある。そして互いに安心する。猿は怒ったりけんかをしたりしても、触れ合うことで気持ちを落ち着かせるのは、共同体が崩壊するのを防ぐための知恵だという。安心を得るには触れ合うことが、一番効果的なようだ。

幼い頃、お気に入りの布団があつた。その布団だとすぐに寝付くことができた。足の親指と人差し指で布団を摩つていると安心して寝ることができた。季節の変わり目に母親が布団を交換して仕舞い込んでは出すようお願いしていたのを覚えていた。触覚がヒトに与える安らぎに大きな役割を果たしているのかもしれない。安心感を得られるタッチの力には、目を見張るものがあるのではないだろうか。

そんな日常の中で枝にぶら下がったり、木登りをしたり、寝転んでは太陽を浴びた。次第にスポーツに打ち込み、公園にも通わなくなる。たしか、中学3年生の頃だった。自転車での帰り道、公園の前を通りがかった際、ふと見えた青楓があまりにも綺麗だったので引き返した。強く美しい青楓との再会の懐かしさで、喜びのあまり大枝に飛びつきぶら下がった。すると、その大枝はバツキツと大きな音をたてあっさりとは折れてしまった。その場に立ち込めたもみじの良い香りと、手に残った嫌な感覚が忘れられない。初めて植物の命と向き合うことができた瞬間でもあった。

グループホームでは言語によるコミュニケーションより遙かに効果的な手段として触れることを意識している。足の裏をくすぐったり、雪が降った日には雪を投げ合う。顔に雪をつけたまま僕の背後を取るおばあちゃんは背中にも雪を入れてくる。

「50歳のおじいちゃんとの腕相撲は僕の50連勝中だ。椅子に座ると、「お兄ちゃん、いつも頑張ってるな」と肩を揉んでもらい、ソファアーではクッションでじゃれ合う。毎日では本当に楽しい。もちろん一緒に料理をすると火傷のリスクや、手を切るかもしれない。だが、利用者さん一人一人と向き合っていると生き生きとした笑顔が見たくてつい、ちよっかいをかけてくなる。座ってテレビを見ているだけで終わる1日は安全だが、余りにも刺激が弱いと考えているので、喜怒哀楽と何かに触れる時間を大切にケアをしている。

私の触覚経験で一番鮮明な記憶は、もみじの枝を折った事だろう。小学生の頃、公園によく出入りしていた。サッカーボールを蹴りにいく日や友達とカードゲームをする日。

とは感じないが、目で見ると割れている。不思議に思い、爪で割れた箇所を触ってみると、僅かなヒビ割れを認知することができた。爪を切っても痛くはないので、神経は通っていない。不思議だ。

私はこれを皮膚の延長線上である爪は触覚が拡張されたものであると考えた。例えばテニスのラケットを持つていけば、ラケットを振って届く範囲まで身体感覚が拡張され、体の一部になる。義足の装着は訓練さえすれば、歩行することも可能となる。

光や音の波形を分析することで再現可能な視覚や聴覚と違い、触覚は最も正確に人に伝え難い複雑な五感である。なのでメガネや補聴器とは違い、義手義足を使いこなす事は努力な要因が多すぎる。圧力、振動、質量、温度：まだまだあるだろう。そして触れ方によっても触れる体の部位によっても変化する。それだけ脳への刺激が多いことから触覚が感情を大きく動かすことも想像できる。

情報で溢れかえっている今、触覚が大切であると考えている。さらに時代は接触せずに物事をこなす方へ向かっている。「40度のお湯」ではなく「気持ちがいいお湯」、「小さい湯飲み」ではなく、「手ごころな湯飲み」といった具合に触れることについてよく考えるようになった。見て感じのいい湯飲みと、使いやすい湯飲みは同じではない。触覚を基準にした

美の定規を持つておく事が豊かさに繋がる。手の感覚で感じ取れるような大きなことを（ころ）という。僕は目の前にあるものをすぐに指先で触つてしまう。知りたい気持ちで満たされる。見えているだけの世界はどうも現実感がなく、物足りない。

僕が意識して使う、溶けるという動詞。自分とその場の輪郭線をぼかし、体を溶かし込む事は最大の感覚の拡張であり、その場になる事であると今は考えている。私はよく瞑想をするのだが、視覚を閉じ、耳を澄ませ、呼吸に意識を向ける。そうすると、その場に溶けるまでに自分の触覚と向き合うことになる。どのようなフォームで瞑想をするにしても、自分の皮膚と皮膚が触れる。僕は膝の上で親指と人差し指で輪をつくつていいるが、そうすると今ここに自分がいるという実感が強く湧く。面白いことに人は自分で自分を触らなければ自分を知覚できないらしい。そしてそれを忘れると、その場に溶けることができる。

花を見ていると、どうしてか触りたくなる。ヒトが花に触れるようになったのは毛がなくなったからではないだろうか。自分が毛で覆われている姿を想像すると植物の触り心地がまるで違ったであろうことは予想される。好きな感触も、嫌な感触もある。言葉が発達した今でも、伝えられなかった何かを植物で表現している。毛がないことを幸に思う。



椿一色の立花
つばきいつしき

△5頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花
のきし

花材 椿(椿科)

花器 陶花器(市川博一作)

秋の旅行へ行く1ヶ月ほど前に立派な椿に巡り会えた。

枝ぶりはいけばなで表現する分には格好があまり良くないが、一枝単位で見ると上品である。

厚みのある立花で椿の良さを出せるのか危惧していたが、それなりに良さを出せたのではないかと満足している。

自分が椿の木を見て感じている良さを一枝で見せるのは難しい。今の僕が試みても、一枝では自分の思う椿には見えないだろう。

副が大振りだったので控枝を流枝と請の間から覗かせた。

最近、面白い枝と出会うことを心より楽しんでいる。





六色椿
ろくしきつばき

△6頁の花▽ 健一郎

花材 椿6種(椿科)

花器 陶花瓶(木村盛伸作)

五色椿は紅・白・桃色の3色を基本に、一本の木で様々な変化に富む花が咲く。一枝一枝に見応えがあり、散りゆく姿は色鮮やかで、寂しさを感じさせないようにしているかのよう。

今回出逢えた6種の椿はみな生き生きして見えた。小さな器に溢れんばかりの椿たち。

椿寺で見た五色八重散椿が見事であった。実際に木を見ると、切り花の印象がまるで変わる。





白花満作（フォザギラ・マヨール）

△7頁の花▽ 健一郎

花材 白花満作（満作科）

椿（椿科）

花器 陶花器（ティム作）

白花満作（フォザギラ・マヨール）は北アメリカ原産で、4月から5月にかけて花を咲かせ、秋には満作に似た紅葉の葉が綺麗な。初めて生けたが、独特の香りと花がお気に入りである。

ツバキは葉を省略し、蕾も落とした。花と残った葉が目立ち、シロバナマンサクの花が良く映える。

個人的に、オレンジ色の背景が椿とフォザギラ・マヨールの良い出会いの場になったと感じている。

和のテイストを取り入れたティムさんの器がその雰囲気馴染み、説得力を与えている。



菜月の誕生日に2人で香水を作りに行った。2、3種類の匂いを調合師さんをお願いして足してもらうのだがこれがなかなか面白い。眼に見えない匂いと匂いの足し算は想像が難しかった。「こつちの香りを強くしたいです。」「もう少し鋭く。」「もつと爽やかに。」「様々な言葉が飛び交う。自分が作りたい匂いが明確でないため、調合してもらうたびに好みも目指す匂いも変わる。好きな匂いと好きな匂いを足せば好きな香りになるというわけでもなく、人に伝えづらい感覚を言葉にし、出来上がっていく香水の調合には可視化できない楽しみがそこにあった。

人は息をしている以上、匂いから逃れることはできない。目や耳は塞げばいいが鼻をつまんでの口呼吸はそう長くは出来ないだろう。ダイビングをする時は口呼吸のみだったが、陸で口呼吸をする

人間社会の近代化と匂いは密接な関係だったに違いない。生活排水や廃棄物の処理方法が再検討された。コンクリートで密室化した部屋を各自で管理することになった。人が感じ取ることができない匂いを減らすことが都市化において大きな課題だっただろう。空調機や消臭剤で町は溢れかえっている。そのおかげで私自身、京都で生活をしていると匂いに対してのストレスが年に一度ほどしかなかったってしまった。五感のうち一番衰えているのだろうと予測している。その一度とは祇園祭の巡行の日である。前日までの夜店や屋台から出た汚れの匂いがアスファルトにこびりつき鼻につく。

夕暮れ時に、一軒家が連なる場所を歩いていると、魚を焼くにおい、お風呂に浸かり水が溢れ出る音が見えずともありありと情景が浮かぶのが面白い。プライバシーがあや

ふやで、近代化以前の日本を思わせるような光景に近い気がする。お隣さんの生活音、臭が感じられるとそばにいた事を思い出させる。心なしか、そういった地域を朝、昼に歩いているとよく、賑やかな井戸端会議を見かける。

私自身、過度な無臭化はあまり好みではない。その家、その家の匂いが好きで、匂いも文化であると思っている。きのこ嫌いの私にとつて、星を見にいづくべく飛驒行きの電車に乗った際、乗客が一度に食した加熱式の松茸釜飯弁当の匂いに耐えられなくなったのと、良いことばかりでもないが、心地よい匂い、不快な匂いは人によつて変わる。魚を焼く匂いが海外で受け入れられない話もよく聞く。日本以外の土地へ訪れた際、飛行機を降りて一番初めに接する文化はその土地の匂いである。滞在するとすぐなれるのだが、鼻が慣れるまでが楽しい。

ラフレシアは動物の死臭に擬態しているという説がある。ラフレシアはその匂いで媒介者の蠅などを誘き寄せている。強烈な匂いは、その場にて圧倒的な存在感を出しているのだろう。人は強いニオイを消すことに多くの時間を費やした。そして芳香剤や、香水で自分の思う匂いを纏う。

今回、菜月はNo.309と自身の生誕の日を香水瓶のラベルに貼っていた。彼女は何かを惹きつけるためではなく、自身の好きな匂いを纏^{まと}いたかったと言っている。満足そうだ。

今、匂いがない環境は整っている。そこに何の匂いをものせるのか。「あ、金木犀。」「あ、今日は魚や」「もう雨降りそうやな」心地のよい匂い。良く思わない匂い。嗅覚は意識しなければ知覚できないほどまでに無臭化されている。なので感覚が鈍ってしまう。

狩猟時代は匂いを頼りに生活していた。視覚や音だけの情報ではこと足りないからだ。五感の中で特に、退化しつつある嗅覚を意識すると、今生きている世界に奥行きを感じ取ることができ、面白い。季節、人の体調、時間、場所を匂いで感じたい。人がいなくなつたことを確認してマスクを外す時間が好きだ。



オクロレウカ

△4頁の花▽ 健二郎

花型 生花 「三花五葉」

花材 オクロレウカ (菖蒲科)
花器 結晶釉鉢 (前田保則作)

アヤメ科の葉組もの場合、真
胴、留に花を使うのが基本ではある
が、長大アイリスと称されるように、
一際大きいこの花の伸びやかさを表
現したくて、真副、胴に花を使った。
花を固めたため、留の葉は大きく
動きをつけ、控枝の葉は中高にした。
オクロレウカは花の茎についてい
る葉の中にも花が隠れている。一本
の花で4〜5回も花を咲かす。虫た
ちに気がついてもらえる回数、期間
を増やすための工夫であろう。花は
ただでさえ切り落としにくいものだ
が生花の線を妨げないよう隠してい
る。長い間楽しませてもらった。





初夏を盛る

△5頁の花▽ 健二郎

花材

太蘭（蚊帳吊草科）
あしきい

紫陽花（紫陽花科）
ひめゆり

姫百合（百合科）

花器
陶花器

初夏らしい一作。花の取り合わせによつてはその季節を強く説明するものになる。良い季節が始まる。季節と季節に明確な区切りはなく、曖昧なものだ。そのせいか今日から夏が始まるといって夏は始まらない。あつという間に一年が過ぎるわけである。最近、季節の花が身によく染みる。



『座辺師友』

健一郎

「お兄ちゃん僕の事格好よくして」と学校の入学式三日前に相談があつた。彼の言う格好いいとは何か分からなかった。ので尋ねるとお兄ちゃんみたになりたいたいの事だつた。今年で23才なのだがまだ可愛い弟だ。自分の身なりについて考える良い機会になつた。

僕がオススメする服屋さんに行き、靴と腕時計も購入して美容院にも行つた。私自身、素材へのこだわりは強く、良質なものを身につけたいと思つてゐる。そして身につけるものは、友達以上師匠未満の關係が好みだ。師匠だと身につけるものとしては少し遠い気がする。もちろん値段ではなく質で判断している。「質が分かるのか？」と聞かれると困るが、今までに自分が見てきた物の中で比べている。そして量を見る意識もしている。

自分個人的な持論ではあるのだが、自分を中心に周囲の

環境（人、物等）の平均値が自分なのではないかと考えて

いる。自分が認識したものの中で生きてゐる。そして自分が認識しているモノの影響しか受ける事ができない。自分の意思が明確であればあるほど身を置く環境を選択し、作り出す事ができる。

物から影響を受けようとしても良いものが何か分からな。まず初めに身の回りの耳障りなもの、目障りなもの、肌触りの悪いもの、美的感覚にそぐわないモノを自分から遠ざけた。次に、全て自分が納得できるモノのみ身の回りに置くことにした。これを繰り返す。考え方が変わると、必要なモノも変わる。

お気に入りのモノと過ごす日々が心地良い。菜月と相談しながらではあるが、合わせてくれることが多い。今の自分に必要なモノを自分の周りに置くと頭がよく冴える。思考が現実化しているような気がする。頭と実際の場にタイムラグができないように気

をつけている。

本を読みその時自分が必要な物を吸収すると、次の人に譲る。また必要になればもう一度同じ本を買う。積読に囲まれて生活している。本棚を見ると好奇心を強く刺激され何から読もうかと悩む時間も楽しい。読み進めていくと捨てられない本が出てくるが、稀である。本棚は少し先の自分を写す鏡のようにも思える。

運動していて上手な人とプレーすると、自分も上手なのではないかと勘違いしてしまう事が度々ある。知識が豊富で論理的に話をする人と会話をすると自分が賢くなった気がする。そしてそういった人に釣られて少しづつ上達する。

こういった僕の考えと近い言葉がある。「座辺師友」端的に分かりやすい。魯山人の言葉である。優れた人、物に囲まれて生活しているとその心をおのずと学びとることができ、自分の周りのすべてが師であり、友であると言う意味だ。

グループホームで利用者さん

今生きている人の中だけで数多くの師匠を探すことは難しい。言葉を発せぬ先人たちの想い、言葉を話す必要のない植物やモノの声にならぬ声に耳を傾け師とすることができれば多面的に物事を捉えることができ、考え方に厚みがある。言葉を話す師匠から学ぶことは多いが師匠の数が少ない。話さぬ師匠が増えるほど心強い。耳がよく聞ければなるほど多くの事が学びとれる。本人が自覚していなかったものまで学べる可能性すらある。自分が託す側になつた時に師匠がいなのは少々不安だ。

自分の限られた時間を誰と何に囲まれて過ごすことが自分にとって大切なのだろう。今私は多くのことを吸収している気がする。直ぐに忘れてしまふが、体のどこかに何かしらの形で残っているだろう。良き物、良き人に囲まれ好きなことばかりしている。日常が尊く愛おしいものになった。

菜月はよく出かける僕を見送ってくれる。わけを尋ねると私が今にもいなくなりそうだからだという。自分でも思うところはあるが、後悔だけは無いよう生活をしたい。良き物、人に囲まれる事は、後悔しないための仕組みづくりとも考えられる。弟に良き物、人が集まることを願っている。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
6 月号
No. 696

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





梅雨空のparasol

△表紙の花▽ 櫻子

花材

ベル鉄線（金鳳花科）
 毬栗菅（蚊帳吊草科）

花器 ガラス花器（ベネチア）

小さくてもキリリとした姿で咲くベル鉄線。大輪の鉄線にも負けないくらいの存在感がある。ガラス器に付けて庭で育てたイガグリスゲを添えると優しい洋風の雰囲気。

きらきら光る水たまり。赤いレインシューズをはいた幼な子がparasolを持って遊ぶ風にも見えて。

横から見た奥行き





初夏を生ける

△3頁の花▽ 健一郎

花材 いろは紅葉

(楓科・ムクロジ科)
芍薬 (牡丹科)

花器 陶花瓶

青楓。夏の風物詩である。遅咲きの桜が出る頃に葉を少しずつ硬くする。拳を握りしめた状態から少しずつ手を広げていく。大ぶりの豪華な芍薬と取り合わせた。返り枝で楓は撓めがきかないため素直にそのまま立て、幹を見せず葉をよく見せた。光に照らされると葉の良さが際立つ。芍薬の葉、楓の葉どちらもみずみずしく沢山の緑の中に花が浮き立っているかのようだ。水色の背景が表現に広がりを持たせてくれている。

横から見た奥行き





大山蓮華を生ける

△ 6頁の花▽ 健一郎

花材 大山蓮華（木蓮科）
鉄線（金鳳花科）

おののまねげ
てつせん きんぼうげ
鉄線（金鳳花科）

花器 青瓷花瓶（清水卯一作）

緊張感のあるお花を生けるときは相応の器で生けたい。飾ると部屋の香りが大山蓮華に支配された。家の中で広がる香りは人を惹きつける。香りが弱くなると花は散る。ほんの数日であったが楽しませてもらった。

おのみさん
大峰山に自生しているので季節になるとどんな景色が広がっているのだろう。楽しみである。

鉄線の濃い紫が大山蓮華に対していささか強い気がするが、お互いの良さが際立つ。



横から見た奥行き

『笑み』

健一郎

認知症対応型共同生活介護（グループホーム）での生活が楽しくて仕方がない。そんな日常でたくさんの方を見をよくする。

笑いは生きる活力であるのではないかとつくづく思う。笑うことで気分が晴れ、何かしてみようかなとなる。日常でちょっとした笑いでもいい。利用者さんと生活をして2年ほどになるが笑いを無意識的に仕掛けてしまうようになってしまっている。

記憶が繋がらず、目の前で不可解なことが起きる世界に生きている利用者さんはいったいどんな気持ちでいるんだろう。僕には未知の世界だが、それでも想像することできる。自分の時間だけが止まっていて周りは動いている状況である。講義中に寝ていたところを、先生に「この問題を解いてみる」と言われるようなものである。説明を聞いていなかったのに解ける

はずもない。だが周りの人たちは確かに話を理解している。僕なら何だかわからないが周りに話だけ合わせておき、間に合わない現実には自分を取り繕うだろう。そんな不安な人に安心感を持つていてほしい。なんだか、ここにいたら落ち着くな。悪くはないな。と感じてもらえることを目標にしている。

笑いをつくるためにはまず土台が必要だ。安心感である。つまり笑顔だ。笑顔は敵意がない事を相手に示し共感を示す。多民族国家のアメリカではエレベーターなどで顔を合わせた時「Hi」と声を出して笑顔を作るのは素性の分からない相手の警戒心を解き、その場を安全な空気にするためである。これは故意に安心感をつくる笑顔である。自分の笑顔が良い笑顔だと相手の笑顔も良くなる。安心感が笑いの根底をつくる。緊張していたり、怯えていると上手く笑えないことを考えると何となく想像できる。無理して作った笑顔が相手に伝わると不信感に変わってしまう。

安心感がないと笑いに繋がらないのは不審者にくすぐられても笑いに繋がらない事を考えると思えばやすい。

まず安心感をつくる。そうすると僕がそばにいる事を許される。そして次は安心感を笑いに変えていく。

笑いには大きく分けて2種類ある。言葉の笑いと動作の笑いである。言葉による笑いで笑うにはある程度の認知能力が残されていないと難しい。なので主に動きによる笑いに言葉を少し付け足すような形で笑いを作っていく。

まず初めに、笑いを共有したい相手が、会話の中で使う言葉に注目する。人は言葉によつて思考する。言葉がその人の人だ。言葉はその人の世界の区切り方である。その人の世界がどんな世界で生きているかの参考になる。そしてその人の興味関心に気がつく。もちろん完全にその人を解ることはできないが側に寄るイメージだ。相手の理解し

やすい言葉を相手の思っている意味で使う。この際、言葉の本当の意味はどうでも良い。私も難しい話をされたら分からないし、緊張する。まず相手の使う言葉や語彙をある程度把握し、その人の世界に入り込む。利用者さんの世界は大雑把で物と物の区切りが脆気（もろげ）でぼやぼやしている。その人に寄り添うとその人は自然と笑う。そして事あるごとにおどけて冗談を言い合っている。

動きの笑いは喜劇映画のチャップリンをイメージするとわかりやすいだろう。動きの不調和が笑いを生む。コミカルな動きで不調和を作り出す。例えば、介護をしていた職員が、次の瞬間に車椅子に乗って現れたら、さつきまでの行動との不調和と安心感があいまつて笑いにつながる。

ここ最近、笑い方が変わった。引き笑いをするようになった。菜月に指摘されてきがついたのだが、それは多分、無意識で相手に笑っていますというサインを誇張した形な

のでは無いだろうか？

ただ毎日が笑うだけで終わることを望んでいるわけでもない。不安な気持ちを抑えつけて表出させないわけではない。ずっと笑っている世界も不気味だろう。何もない隙間の時間、瞬間、瞬間の何でもない時間を笑顔にしたい。

道路を歩きすれ違う人のマスクで隠れているが、その人の笑顔を想像する事がある。気難しそうな人も、怖そうな人も笑うという顔になる。常に自分を整えているとある程度の余裕ができてきた。自分で整えているつもりだが、身近な人が整えてくれているのに気がついていないだけかもしれない。

グループホームで働くようになってから人が好きになった。悪いところも良いところも全部ひっくるめたありのままのその人が好きだ。そして、その人はその人らしく生き生きとしている事が気持ちよい。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
7 月号
No. 697

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



夏に実を生ける

△表紙の花▽ 健一郎

花材 オクロレウカ（菖蒲科）
実と葉

透かし百合（百合科）

花器 方形陶コンポート

オクロレウカの実と赤黒のスカシユリの2種で生けた。夏らしい花になった。生けてみるとオクロレウカの実の重さに気づく。古い葉から黄色くなり、若い葉はまだ緑を保っている。

黄色くなった葉は少し倒れ、実が浮き出てくる。背景の色、器ともに強い色を選んだが個人的には納得いく作品に仕上がった。



くれない

健一郎

花材 土佐水木（満作科）
紫陽花「紅」（紫陽花科）

花器 陶鉢（フランス）

（いけばなプレゼンテーション
出品作 写真①）

トサミズキにアジサイ。季節の勢いある花を勢いのままに生けた。白からだんだん色づいていく紅というヤマアジサイだが上品な紅色が好みだ。花展の花はやはり気持ちが良い。



①



②

いけばなプレゼンテーション
会場風景（京都芸術センター）



思い出の器

△5頁の花▽ 健一郎

花材 接骨木（忍冬科）
すいけすけ

花器 陶扁壺（ティム作）

私たちの結婚の知らせを聞いたマンチェスターの純子さんが企画して下さい、お祝いの品が海を渡って届いた。それは初めて見た器ではなかった。ティムさんの庭の西洋ニワトコ、ススキ、百合でお花を生けたあの器であった。



日本のニワトコをのびのびと生けた。彼の日本的趣向もあいまって良い器だ。



『かわいい』

健一郎

家にレモンの友達を迎えることになった。名前はメイと言う。猫アレルギーの菜月といつも一緒にいる。活動的でよく食べる。菜月は言う。かわいいと。千度かわいいと言うので、かわいいを日頃に比べ意識した1ヶ月になった。

威圧的な要素がなく、笑顔や丸み、色といった要素を手がかりとしながら、自分との関係性を意識的、無意識的に評価することによって、「かわいい」感情は生まれるそうだし、感情は生み出さざるを得ない。それは幼い個体に当てはまりやすいが年齢関係なく条件を満たすと「かわいい」と言う感情は生まれるのだらう。

グループホームで働いているとその言葉はよく聞く。利用者さんが利用者さんに言う場合もあるが主に職員が利用者さんに対して使う場合が多い。僕がひねくれているのか、このかわいいは、聞こえるたびに癪に触る。

私たちは人間の赤ちゃんだけでなく、幼い動物に対して、自然と注意がいくそうだし、そういった属性を持つ個体は周囲から攻撃されずに保護を受けやすくなるという利点があるという。そしてその対象に対して、敵意を抱く要素や

する。少なくとも○○さんとは向き合えていない。

グループホームで利用者さんと関わり一年が経った頃から、ふれあいの中で単発的にドキドキすることがあった。それを今はその人の尊さや、存在の輝きに対する私の心の反応だと感じているが、その時は言葉にしようがなかった。今も言葉にできるほど解りてきている気持ちではない。そのドキドキに可愛いと思う気持ちも含まれたのかも知れない。そしてその可愛さはその人が生き生きとすることで発露する。自分の少しの補助が、その人を取り戻す。あるいは新しいその人になる瞬間が好きで日々関わっている。自尊心の回復が生き生きすること、大きな繋がりを持っている。そしてありのままの自分を認めることができた人は強い。

「みんながこっち見てつて言っている目がかわいい。」

と僕が勝手に仰いでいる介護の師匠は言っていた。感度が高い師匠はいつもドキドキして忙しそうだし。私はまだ、そこまで感じることはできない。その人が生き生きとした瞬間にしかその気を感じることができない。自己を閉ざした利用者さんは、その人にとつて、こちらが安心できる存在になると、「私はここにいますよ。」と言う声が聞こえてくる。そしてこれらの話は利用者さんが特別なものでなく、誰に対してもそういつた感情を持つことは言うまでもない。

「私な、アホで勉強が出来ひんかったからな、先生の動きとか見て真似したり絵描いたりしてん。今も人にはすごい興味があつて、カフェとかに座つて1時間でも2時間も街見てもやけてんねん」と話を師匠から聞いたとき、

感度の高さに愕然とした。生粋の観察者である。師匠ほど介護の仕事が似合う人はいないだろう。私はその観察眼が欲しい。

かわいいという比較可能な次元を超えて絶対的な存在になるということ。それは各個人の問題かと思つていたが、見る人の感度次第なのだと今は考えている。ドキドキしている時間が一秒でも増えるように観察のスキルを磨くしかない。あるのだから見えるはずだ。



レモンとメイ



3 億年のつきあい

△3 頁の花▽ 健一郎

花材 ヘゴゼンマイ（ヘゴ科）

ひめしだ
姫羊歯（姫羊歯科）

花器 耳付陶花器

湿気のある場所を好むシダ。夏になり花が減ると緑が目がいく。艶やかでその場で生き生きとしている。京都市内であれば三室戸寺のシダが特別綺麗だった。紫陽花と石楠花で有名なお寺であるがシダがとても印象に残っている。スマートフォンで待受にしてしばらく楽しんでいた。

今回シダと取り合わせたのはヘゴゼンマイ。やはりシダとの相性は抜群である。約3億年ほど前に全盛を迎え、その時以来の仲である。時代の括りとしては古世代石炭紀とされているがこれは、大量に生息したシダ類が石炭となりヒトの産業革命のきっかけになった事が由来している。プリミティブな器が原始的な空気をより強調してくれる。





コエビソウ

△5頁の花▽ 健一郎

花材 エンシクリア・セラタ

ン(蘭科)

小海老草(狐の孫科)

花器 陶花瓶(前田保則作)

コエビソウはメキシコ原産のキツネノマゴ科の植物である。茶花にも使われることがあるそう。小海老草と呼ぶのでは印象が大きく変わる。一緒に取り合わせたのは、エンシクリア・セラタンというオンシジウムである。コエビソウと呼ばれるように綺麗にグラデーションした甲殻に目がいくがよくみると可憐な花を咲かせる。エンシクリア・セラタンと模様がそっくりだ。

横から見た奥行





セフリジと

アンズリウムの生花

△7頁の花▽ 健一郎

花型 株分け生花

花材 セフリジ (椰子科)

アンズリウム (里芋科)

花器 陶水盤

メキシコ原産のセフリジ、別名竹ヤシとも呼ばれている。節が竹と似ており、面白い植物だった。違和感なくお互いの個性が発揮できている。生花としていけると盛花や投げ入れでは見つけられなかった姿が見つかる。アンズリウムとセフリジのいい表情をみる事ができた。

横から見た奥行



『山登り』

健一郎

花は足で生ける。気に入っている言葉だ。街中に住んでいるのもあり季節の植物とは距離がある。私は特定の植物を大切に栽培されている神社やお寺をよく訪ねる。

二、三日あれば日本ならある程度のところまで行くことができる。最近は季節に合わせて山を選びそこでは会えない植物の生息する場所まで訪ねている。

山に登ることはあまり好きでない。だが山にいたのは好きだ。山で見る植物も好きだ。4人で尾瀬に水芭蕉を見に行った時のことだが、急勾配な場所では家元が副家元の荷物を持ち登っていた。山登り自体を楽しんでいそうに見えたのは家元くらいである。「六月やのに桜が咲いてる!」「これはムシカリ?オカメノキかな?」みんな山に生息する植物を見ながら登ると身体のしんどさはあまり気にならなかった。

私の山登りは花見の感覚に近いのかもしれない。会いたい植物に出会うための道である。登る回数が増えると、山に何かを感じる事が増えていき、山に対する信仰に

も興味が出てきた。古くから信仰されている山や、面白い言い伝えのある土地には、何かがある気がしてならない。火のないところに煙は立たないというのが、面白い伝承がある場所には何かがある。何かを感じ取る力が少しはついてきた気がする。

キリスト教文化圏では山や森は魔女、悪魔の住む忌むべき土地として切り開かれてきた。人が増えることで必要な土地も増えたのだと予想する。初めての山に入る時の気持ちはどのようなものであっただろう。私はキリスト文化圏の見せた反応は分からない怖さに対して素直な反応だと思った。だが全てを光の元に晒してしまおうと未知の部分がなくなり、興行きがなくなってしまうのではないかと私は思う。

海外のヒマラヤアルプスのような山脈とは異なり、日本の山は人里に近く、身近な存在である。豊かな水系を育み、人里に壊滅的な災害をもたらすこともある。人は山に対して畏怖し、信仰するようになったのではないだろうか。私はその場にいればしてしまうだろうと想像している。古代において、死後に人の魂は高いところに行くと考えられていたそうだ。山への

信仰がそうさせたのか、魂が高いところに行く考えが先かは知らない。先祖は山へと還つていき、山から見守つてくれている。お正月やお盆などには、子孫たちと交流するために山から降りてくるという感覚は今にまで伝わる。

この間、三輪山の大神神社に訪れた。神を祀る本殿がなく、山そのものを拝む形になつて。三ツ鳥居をみることは叶わなかったが、いい空気を吸うことができた。人が創作した神と比べると原始的で自然な信仰だと感じた。中でも印象的だったのは太陽と空と山である。なんの飾り気もなく只々そこにあった。それがいい。昔は笹ゆりが自生し周辺にたくさん咲いていたらしく、それは、それは神秘的であつただろう。

お寺や教会などの宗教施設に入ると非現実的で、不思議な気持ちにさせられる。どれだけ現実から離れたかつたのだろう。祈りや願いが複雑に絡み合っている。そして宗教施設が教えを厳かなものにする。その作用を人工物ではない、山や自然が担っているという事に対して興味がわいた。

日本独特の山に籠つて厳しい修行をする修験者や山伏は、特異な

自然環境の場に目をつけ、そこにふさわしい修行や儀礼を創出する。例えば、断崖の「覗き」は有名である。

森林限界を神仏の地と意味づけ、それらが精神的高揚をかきたてる。バンジージャンプの起源とされているバヌアツという国のナゴールと呼ばれる儀式は成人の儀式として有名である。自分の足に巻きつけるツタを自分で探し、自分達で組んだ30メートルの高さの櫓から飛び降りるというものである。私はこういった儀式や修行が好きであるが、嫌いな人がいることも承知している。

ある本で行者さんが以下のことを述べていた。

「行者は、精神異常と同じ。寒中の水が冷たいのも、火渡りの火傷が熱いのも知っているが、冷たい水をかぶり火の上を歩く。それを分かつてやるのだ。まともな人なら正常な判断が冷静にできるからしない。行者はおおむね狂っている。」

私は自然に身体を預けることが、自然に少しでも近づくことができているのが嬉しくて、どこにでも飛び込んでいる。その度に言葉には、し難い経験をしてきた。

それが靈感かと聞かれればそれは分からない。だが特別な体験であることは確かだ。これからも植物を求めたい好奇心と、もつと身体を自然に溶かしたいという欲求がある。

私は、自分なりの方法で自然と向き合いたいと思っている。さまざまな宗教が持つ形式化されたものは時代を追うごとに洗練されているとは思っているが、僕にはその原初や、初めの心を読み取る力がない。自分なりの方法で向き合おうと思う。滝に打たれたり、スカイダイビングや上半身裸でスノーボード。今箇条書きにしてみたら挙げだすとキリがなかった。

衝動的に身体を動かしたくなつたものや、前もって準備が必要なものがある。中には行者の始まりの時代には体験できないようなものまである。今の時代にあつた今の自然と向き合うことは私たちができない。流祖が昔を知り、今を知り、生み出した。そして今までの家元達はその生きる時代を知り、それぞれが生み出した。私は今五感を解放し今を知ろうとしている。とは言っても興味があつてしたいことをして、毎日遊んではかりなので頑張つてはいない。



お稽古の花

△12頁の花▽ 健一郎

花材

京鹿の子(薔薇科)

桔梗2種(桔梗科)

女郎花(女郎花科)

瑠璃虎の尾

(胡麻の葉草科)

鳴子百合(百合科)

花器 手付竹籠(公長斎小菅)

私のお稽古では年に数回は籠を使っている。桔梗と京鹿の子の数を増やしてテキスト用の花とした。今回高台寺の「おりおり」さんから頂いた籠のおとしがガラスで驚いた。撮影してみると宙に浮いているよう。モダンで夏らしく涼しげに入った。少しボリュームが過ぎる風にも見えるが賑やかで感じが良い。

横から見た奥行





山芍薬の葉

△3頁の花▽ 健一郎

花材

やましやくやく ぼたん

山芍薬(牡丹科)

しなあからざり どうだいぐさ

支那油桐(燈台草科)

花器 鳥耳銅花器

山芍薬は葉を魅せるのが難しい。一輪だけならまだしも何かの花と取り合わせたり、もう一輪入れると葉の美しさが失われてしまう。ひと節ごとに曲がりやなんとも言えない難い葉と葉の空間、そして綺麗な葉を魅せたかった。格好良く写っている。垂れる支那油桐の若い実が葉を引き立て、上に伸びる葉が実の魅力を助長している。





除真立花^{のきしんりつか} 2作

花型 除真立花

花材 七竈^{ななざう} (薔薇科)

木苺^{きいちじ} (薔薇科)

朝鮮槿^{ちようせんまき} (大槭科)

鶏頭^{けいとう} (苧科)

狗尾草^{くゐそう} (稻科)

女郎花^{おんながは} (女郎花科)

龍胆^{りんとう} 2種 (龍胆科)

小菊^{せいきく} (菊科)

龍甲^{りゅうこう} 柾木^{まさぎ} (錦木科) 6頁

桔梗^{ききよう} 白花^{はくは} (桔梗科) 7頁

花器 陶花器

△ 7頁の花▽

健一郎

今回は七竈の紅葉があまりにも綺麗だったので真にした。厚みのある真を軸に周りの役えだをこさえていった。鶏頭を正真へと考えたが色が七竈の色と似通っているので白の龍胆を正真にした。全体のバランスを見るともう一本足したいところである。課題は山ほどあるが一つずつ向き合っていきたい。



〈7頁の花〉

横から見た奥行

『東北旅行』

健一郎

マグカップのように実用的なものを作るためにはどうすれば使いやすいくなるか考えればいい。手に馴染むもの、形の格好良さを気にするのである。実用から離れたものを制作することはさらに難しいと考えている。それは作品である。これほど曖昧で評価のしにくいものがあるだろうか。

土を使った作品は生け花と違い、無から有を作り出すものかと思っていたが、土があることに気がついた。大きな発見である。無ではなく無限であった。いかにして作品になりうるのだろうか。

土と向き合うことで形が出てくるのだろうか。とても繊細な観察眼で土の表情を見る必要があると思われる。そして気の遠くなるほどの実験が不可欠だ。僕が尊敬している陶芸家の作品を見てみるとその登り窯の不確実性と土地の土と格闘しているように見えた。

生け花は生命に命を吹き込む。陶芸は形を作り命を吹き込む。共通しているのは、花、土を生き生きとさせられるかである。そしてこれが命を吹き込む者の技量である。

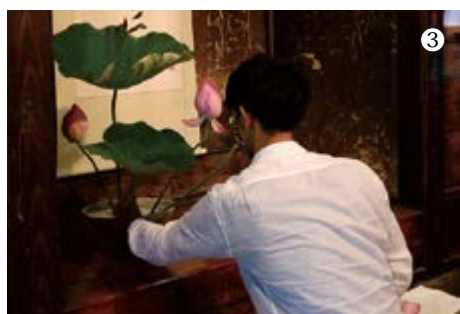
登り窯の火入れ式に初めて参列した。今回の窯の成功と安全を火の神様に祈願する。火に対する特

別な感情が増幅される空間だった。自分で作った器は入っていないので、想像でしか無いが、窯入れするとき自分の作品は自分の元を離れて火の神様に委ねる感覚なのだろうか。面白い。

そしてこの日から三日間火を絶やさぬよう交代で温度を見ながら薪を焚べていく。そして急な温度の変化で土が割れないように三日ほど窯を休めてから窯出しをする。緊張の瞬間である。窯の中で放り込んだ薪が当たって、形の崩れていた作品が一つだけあった。良い表情をしている。登り窯は電気窯に比べ制御が効かず安定感に欠ける。つまり味を出してくれるわけだ。苦い味であることが大半であるらしいが、時折とびきりの作品が出てくる。

前回は窯を休めている間に1人で松島、遠野、花巻、十和田湖、奥入瀬、等々を巡っていた。1人だと気楽なものであったが、今回は菜月との旅である。食べるご飯にも気を使い、宿も綺麗なところでないといけない。2人で車を借りてゆつくりと各地を回った。

奥入瀬
特別気持ちは良かった。人工的に作られた杉林は例外であるが、自然の群生地ではその植物が気持ちよさそうにしているように思う。他の場所と比べ、他の植物が少ないからか、競争をしているように見えない。のびのびとしている。これ（写真⑦）は菜月が撮った写



- ①火入れ式後の日。丸3日間燃え続ける。
②デモンストレーションの花『不忘』のお軸と。
③不忘庵にてのデモンストレーションの様子。

真なのだが良く撮れていて、その場の空気が伝わりそうである。気持ちよさそう。ブナ林に足を少し踏み入れるとそこには誰もおらず、人がこれ以上ここにいてはいけない気さえした。神聖で不可侵な雰囲気味わったのは久しぶりだった。本物をみた。ブナの森林へは道路があつたので立ち入ることができたが、道路すらなかった方が良かったのかも知れないと思わされた。人がここまで本当に立ち入るべきであつたのか。道路があるからこそまでこれた事実を受け止めることができなかった。

「あー」車でガタガタした砂利道を走るときは2人のお決まりだ。一定の音を出しながら車の振動で音が変わるのを楽しんでいる。奥入瀬ほどまだ観光地化されていないのか道路が整備されていない。青森の市内から2時間ほどで白神山地についた。ブナももちろん綺麗だったが池が印象的であつた。なぜこんなにも青いのか。一説によると純粋な水の色であるからだそうだ。泳ぐことは叶わなかったが空気を吸って目で堪能した。(写真⑥)

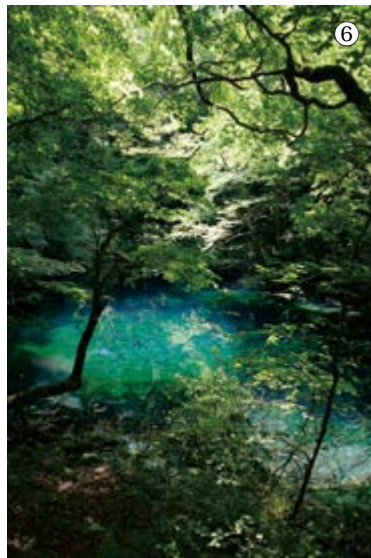
伊豆沼の蓮には驚いた。何周首を回しても一面に蓮が広がっていた。写真(⑧)を見てもわかるように蓮と山と空で画面が三つに分割されている。一切のノイズが、かき消されている。88ヘクタールびっしりと蓮で埋め尽くされていた。甲子園球場の約100倍、京都御苑の約4個半の広さである。



立ち枯れがまじるアオモリトドマツの群生。(蔵王)



ブナ林(奥入瀬付近)



沸壺の池



奥入瀬溪流



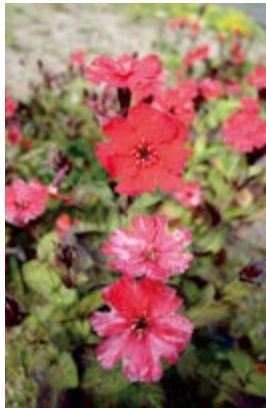
伊豆沼の蓮まつり

古い蓮のように食用ではないらしい。観賞用の蓮だそう。その中を遊覧船に乗って蓮の花に浸る。写真が悪く、言葉にもし難い。蓮が好き人には一度は見えてほしい光景であった。極楽浄土には行つたことがないが、こんなところなのだろうか。蓮を観念的に捉えている人からすると浄土のような風景に見えるに違いない。私個人の感想としては、蓮の圧倒的な雰囲気と数にのみ込まれ溺れたような気がした。

道を歩いていると東北の季節にも関心が向いた。七竈の葉は色づき始め、ムクゲの下に紫陽花が綺麗に咲いていた。季節に幅がある。京都の一点に住んでいると季節と季節がグラデーションしているのがはつきりとしている。その常識を持つて東北を歩くと違いにはつきりと目がいく。旬に幅があるということは、季節を表現する花も異なってくる。こればかりは東北で生活してみないとわからないことだが、僕が発信している世界中から寄せ集められた花を使つて生ける花に旬はあるのだろうか。無いはずの旬を作る作業をしている時もあるのでは無いかと思う。季節にズレがある事を知ってほしいが、実際に目の当たりにすると納得する。季節の表現に幅ができた。今を知ること、今を生けることができる。今花を生けることは今を知ることから始まる。私は現在、生けている花のことはもちろん、その環境にも強い関心があるらしい。



チOWNスセスウ



マツモトセンノウ



コマクサ



ネジバナ



キョウカノコ



ヒメルリトラノオ



エビネラン



ムクゲとアジサイ



ギボウシ

岩手県の安比や、宮城の蔵王、八甲田山など標高の高い場所に訪れる機会が多く、背の低い可愛らしい花にたくさん出逢った。



ヒヨドリと柿

△12頁の花▽ 健一郎

花材 柿(柿科)

ダリア「黒蝶」(菊科)

花器 陶花器

数年前、日本の神様が生まれた土地の空気を吸いに、菜月と高千穂の神社を巡っている道中だった。大きな葉が数枚しか残っていない柿の木に20羽くらいヒヨドリが群がっているのをみつけた。確かカラスも混じっていた。一羽でさえ賑やかな鳥なのに。人は僕ら以外におらず、その場は柿とヒヨドリに支配されていた。忘れられない光景である。花屋でこの枝(前年の実)を見かけた時、ふとその光景が浮かんだ。柿に黒蝶のダリアを合わせた。柿にほとんど葉がないのでダリアの葉が身に染み入るようである。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
10 月号
No. 700

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



源氏邸に生ける 健一郎

源氏邸を背景に秋の始まりを予感させる砂物を立てた。

夏にお庭を拝見した時には一面に白砂と苔が広がり、紫式部に因んで、紫色の桔梗が咲いていた。意識したわけではないが、竜胆、鳥兜、桔梗が入っている。撮影させてもらったこの場所で、今年の夏は桔梗を眺め、気が休まった事を覚えている。今庭は秋色に色づき初めている。

お庭を背景に撮ると作品に広がりもたらされ、想像が膨らむ。大変、貴重な経験をさせてもらった。砂と水の関係、庭と立花には何か大きな共通項



があるのかもしれない。近いものを感じた。砂ってなんだろう。



砂物 へ表紙の花 健一郎

花型 砂物

花材 母(松科)

朝鮮槇(大槭科)

青肌の実(繡の木科)

山鳥兜(金鳳花科)

竜胆(竜胆科)

桔梗(桔梗科)

杜鵑草(百合科)

瓔珞躑躅(躑躅科)

花器 銅砂鉢

砂物 へ表紙の花





秋満腹

△8頁の花▽ 健一郎

花材 メラレウカ(ふともも 蒲桃科)

菊4種(菊科)

花器 陶花器

毎年この時期になると菊が盛りを迎える。通年で菊を見かけるがこの時期まで生けるのをできるだけ我慢している。お腹をすかした後のご飯は本当に美味しい。ご飯前にはどれだけお腹が空いていようとおやつは食べない。一口食べると体が吸収していく様子がわかるよう。同じく、一年我慢して生けた菊は体に深く染み入る。一緒に取り合わせたのはメラレウカ。ティーツリーとも呼ばれ、お茶としても飲むことがある。擦ると柑橘系のいい匂いがする。アポリジニが葉の殺菌力を利用して万能薬として使っていたそうである。匂いから想像できるような綺麗な色が菊とよく合う。



健一郎

レビー小体型認知症は幻視を伴うことがある。レビー小体型に限らず、認知機能が低下すると少しずつ勘違いをすることが増えてくる。よくよく話を聞いてみると、幻聴、幻視にはきつかけがあることに気がついた。火のないところに煙はたたないらしい。幻視、幻聴は見聞違い、聞き聞違いなのかもしれないと

道端での他者の話に耳を立ててみると、それぞれが話したいことを話していて、お互いに違う話なのだがお互いが満足そうにしている光景をよくみる。グループホームでも見かける。お互いに笑いながら話したいことを話せるだけでいいのかもしれない。

弟から「満月やで」と写真が携帯に届いた。通りの街灯の明かりに続いて満月が配置されており、どれが月だかよく見ないと区別がつかなかった。写真で見ると月も街灯の明かりも見分けがつかない。目を騙すのは容易いらしい。見間違いを誘発させる意図が見えた面白い写真

意識せず間違つて思い込むと「勘違い」意識して間違つて思い込むと「見立て」になる。

今25歳になって自分の大きさ

歳を取れば取るほど、その前提や常識は揺るぎないものになつてしまひ、疑うことが難しくなるらしい。今までの自分の知見を疑うことが自己の否定だと勘違いするからだろうか。自分の常識が固まつて安心できている時が一番危ないだろう。自分がこのまま歳を重ねる度にその都度疑いを持ち、勘違いを認める気概が必要なのだろうが、自分がどうなるかは分からない。

秋明菊

△12頁の花▽ 健一郎

花材 丸葉の木まるはのき（満作科）
しりあめいぎく 秋明菊きんぽうけ（金鳳花科）

ふじばかま 藤袴（菊科）

花器 黒釉陶花器

去年の10月中旬に貴船神社に行った。秋海棠に出迎えられ、奥にまで案内される。

秋明菊の数は多くなかったが、八重で薄紫色のもの、白の一重が植っていた。背丈は僕の肩ぐらいまであり勢いがあつた。

秋明菊は「貴船菊」とも呼ばれており、昔は多く自生していたらしい。現地で見るとその植物の見え方が変わる。

貴船神社の醸す雰囲気は秋明菊や秋海棠がよくにあった場所だった。

紅葉した丸葉の木が大きく優しく受け止めてくれている。





命を視る 鹿王院客殿

△3頁の花▽ 健一郎

花材 通草あけび(通草科)

二輪菊 嵯峨菊(菊科)

桔梗2色(桔梗科)

花器 掛分袖花器 清水保孝作

屏風 藤井隆也作

この屏風を目にした時何故か細胞を意識してしまった。細胞まで見ることはできないが、花の細部までに気を使って花を生けることができたらなと思わされた。

5種それぞれの輝きが調和するようにつけた。

『酒沢カールの印象』

健一郎

ナナカマドの赤色、ダケカンバの黄色、ハイマツの緑に覆われた300メートル級の山々に囲まれた窪みへ菜月と2人で行ってきた。その場所は酒沢カールと呼ばれており、積雪が大きな氷になり重力によって流動して削られてできたくぼみだ。紅葉を見に出かけた。10月上旬であった。

酒沢カールまで長野県の上高

地から片道を徒歩で6時間ほどで着くらしいのだが、8時間ほどかかった。道は険しい。奥上高地とも呼ばれている。

出発してすぐの上高地付近では微かに残る夏に目がいく。標高が上がるにつれ、草木の様子が変わっていく。歩が進むたびに季節が少しずつ変わっていく。それは山を歩く楽しみでもある。

北アルプスの空気を心ゆくまで吸った。山芍薬を甘くしたような匂い、湿った土の匂い、動

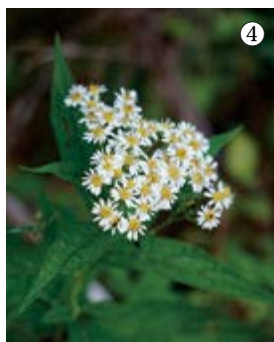
物の匂い、樹木が発するフィトンチッドの匂い。場所や標高が変わることでもさまざまな香りを楽しんだ。中でも高い標高で森全部の匂いが内包されたかのようない匂いはもう一度嗅ぎたいな、と下山した今も思う。山自身匂いののだろうか。良かった。

植物のない岩をゆつくりと歩いて山小屋により、ソフトクリム。岩の道を歩きながら木陰に座り羊羹。そして酒沢カールの小屋でビールとおでん。格

別だった。

小屋で一泊した。本格的な山登りは初めてだ。夜は寒く、いくら着込んでも寒い。外へ出ると雲で星は見えなかったが、テント泊している方達のテントが綺麗だった。することも無いので、早めに寝て起きると、日の出の時間だ。酒沢カールでの日の出は直接、日光に当たることには叶わない。酒沢カール名物、モルゲンロートを見ることができた。モルゲンロートとは、東から太陽の赤い光が山筋を照ら

し、山脈や雲が赤く染まる朝焼けのことを指し、山がもともと美しく見える現象の一つとされている。太陽で照らされた山を背に下山をする。危なっかしうはあったが、ペースを上げ6時間で麓まで戻れた。急な道中文句を言いながらついてきてくれた菜月には感謝している。1人でなく菜月と帰ってこれたことに大きな意味があるように思う。食べ物が血肉を作るように、見たもの感じたものが感性を作る。2人で色々なものを見て歩きたい。





①湊沢カール付近のゴヨウマツ。這ように枝を伸ばしていた。 ②徳沢付近で猿をよく見かけた。キノコをとって食べて日向の程よい倒木の上に腰掛け食べていた猿が印象深い。 ③オヤマボクチ。 ④ノギク。道中に時折花が残っている。 ⑤フジバカマ。 ⑥横倒しに伸びるナナカマド。 ⑦マユミの実。 ⑧上高地、河童橋と星空と。 ⑨新月の夜空に満天の星。 ⑩日の出の瞬間、山が赤く染まる。モルゲンロートと呼ばれる神秘的な光景。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2021 年
12 月号
No. 702

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



菊の立花

△表紙の花▽ 健一郎

花型 除真立花^{のきしんりつか}

花材 満天星^{とうたんせい}（躑躅科）

水仙^{ひがんぼな}（彼岸花科）

小菊4種^{かんぎく}（菊科）

寒菊^{かんぎく}（菊科）

花器 獅子耳銅立花瓶

毎年、菊の季節を心より楽しみにしている。その中でもこの乱れ菊は特別である。剥き出しの自然の力を強く感じる。今の自分と波長があう。今年も直に触れることが出来て嬉しく思う。去年は菊一色で立てたが、今回はドウダンと水仙を共にした。それぞれがそれぞれ場で魅力を発揮できている。

横から見た奥行き





初冬の二瓶飾り

△4頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二瓶飾り

花材 満天星(躑躅科)

水仙(彼岸花科)

花器 煤竹筒

結晶釉水盤(前田保則作)

ドウダンは面で葉を見るように生けた。枝振りも格好が良いがお生花の形には線が増え、効果的に魅せることが難しい。まだ咲く前の水仙と飾った。二瓶で飾ると季節の幅が限定され、より今を味わう事ができる。



『言葉と自然』

健一郎

自分が思う花の楽しさを稽古で人に伝えるようになって3年くらい経った。

あるお弟子さんが生けた菊の花を拝見した。やや前傾に直立した菊の葉が殆どむしり取られている。「葉を取るのが楽しくてつい取りすぎてしまいた。」と笑っている。綺麗な目だった。花の味わい方はそれぞれで、彼女は自分に素直だった。私の花の味わい方が拡張されたようにも思う。葉を取ることに罪悪感を感じる気持ちはもちろん大切だが、それは倫理を通して感じられる感情であり、葉を取る行為のみを考えると不快なものではない。

私は主として、花の美しさと生命力を味わっているのかと自分では思っている。個人的に近頃思うのは、情報で溢れる世界になってから、みんな頭で考えすぎているようにも見える。人が知っている範囲の事ならなんでも調べれば出てくる。情報を価値にすることは、自分の価値、本質を把握しておらず、自分が何をしているかわかっていないという事である。もったい

なく感じる。情報自体に価値はない。家元が文阿弥花伝書をインターネットから閲覧しているのを見て感じた。なんていい時代なんだろう。知る環境はこれ以上なく整っている。情報をどう使うかである。

知る環境が今に比べて不便だったに違いない室町時代。その時代の人達が真摯に花に向き合い、悩み、一つの答えとして記したものが花伝書であり、禁忌であつた。室町の花伝書には禁忌が多いという。言葉の響きが悪い花は特に嫌われた。紫苑は祝儀の席では死に通じるところから禁花にされ、赤い花は引越しの際は火を想起するので禁花とされていたそう。花一つ一つに名前をつけ意味を考えていた。一つ一つの花と向き合っていたことがうかがえる。

「古代の呪術性のなごりともいえる禁忌の意識を取り去ったのが近世に生まれた生け花様式である。それは草木花が古代との血縁を失い、単なる花材になったということである。」

と川瀬敏朗は述べているが、ある部分では納得できるが、ある部分では再考の餘地があると考えている。観念的に花と向き合

い、真摯であることは立派なことであると個人的に考えている。その一方で、実践的に身体を通じて真摯に向き合うことも大切であると感じるようになった。つまり私は真摯に花に向き合う姿勢が好きなのである。言語や意味を重視し、脳を使って考える観念的解釈と五感や身体を使って感じ、そのものの本質と向き合う実践的な解釈があると考えている。

室町の頃から花伝書などで決まり事を作ることは、言葉で論理的に解釈したもので、剥ぎ出しの自然性や本質は言葉で伝えられるはずがない。なぜならば、言葉にした時、それは物事を定義し、観念的に解釈することになるからだ。花伝書で伝えたいことは決まり事そのものではない。決まり事として、本質を人に伝えるべく仕方なく言語化し、仕方なく論理で説明している。それは人に思いを伝える手段が言語だからである。言葉を使用せず思考することはできない。このジレンマにソクラテス以降の哲学者は苦しむことになる。

葉をむしり取る楽しさは、身体的なものであり、また、原始的でもあると考えている。生花

を生ける際に枝を撓めたりするのは確かに楽しい。オランウータンは水平で頑丈な、身体を預けられる木を見つけて若い枝を集めた後、曲げて巢を築きそうに作る。そんなものなんだろう。人と枝との付き合いの長さは思っている以上に長いものかもしれない。二足歩行の始まりにもいろいろな説があり、その中の一つに二足歩行は木の上で始まったというものがある。外敵が比較的少ない木の上での生活を始めた、僕らの先祖にあたるかもしれない生き物たちが木と花の中で生活していたということとは、古今私たちが花を見てなんだか感じる安心感とつながっているのかもしれない。

「物真似には似せないという位がある。物真似を究めその物にまことなりきつてしまえば、もう似せようと思う心などない。こうなればただ見せ場を嗜むのみで、花が咲かないということがあるうか。」

世阿弥の風姿花伝からの引用である。似せようと思う心は頭の中の解釈でしかない。そのさきに理屈でなく実践的に本質と向き合うことで花を咲かすことができるのであるのではないだろうか。似せないという境地は面

白そう。

言語、論理と対極にある生命そのものの広がり自然のありのままの姿。言語、論理は人間の脳が世界を切り取り、論理を抽出して、都合よく構築した整った人工物であるから、自然そのものの本質はこぼれ落ちやすい。科学や学問はただひたすらに言葉と論理の力で世界を分類し、名付けをする行為ともいえる。

そのためには剥ぎ出しの自然や本性に触れている必要があり、五感の意識のありようが大切である。言葉や情報でなく、目の前の花、人そのものを受け入れることが大切である。

五感の力を鍛えることはありのままの自然に反応できるための準備である。何か不思議なものを見た時に人は分かつとうとするが、分かつうとしてはいけない。そのものを受け入れるのだ。言語や論理は「分かつ」だが、自然の本質は、そのものを「受け入れる」のだ。文章に書いて今納得した。すごく気持ちがいい。



松除真の立花

△4頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

花材 松(松科)

梅擬(繡の木科)

水仙(彼岸花科)

木瓜(薔薇科)

霧島躑躅(躑躅科)

小菊3種(菊科)

晒木

花器 天女文銅花器

松が好きで年中見ているのだが、秋が終わる頃から存在感をますのが毎年のことである。冬の木瓜と水仙がひっそりと咲き、梅擬の実が目がいく。これから咲く椿ともう時期が終わる菊がともに控枝の景色を作っている。次の季節を感じさせる立花である。





梅擬の生花

△5頁の花▽ 健二郎

花型 生花 草型 副流し

花材 梅擬 (繡の木科)

花器 遊銀耳付銅花器

副流しの生花。枝振りを生かしながら。竹筒に生けると安定が悪く銅器に生け替えた。実が強く見えて格好良くなった。





八重の水仙

△6頁の花▽ 健一郎

花材 水仙(彼岸花科)

山茶花(椿科)

花器 陶小壺

花屋さんを通して農家さんから頂いた八重の水仙。実際の水仙峽へ足を運ぶと八重のものや奇形の水仙を見かける。この水仙がよく見えるよう器と相手を考えた。虫食い葉のある山茶花の蕾とよく合う。



『信仰の場』

健二郎

信仰の対象となる場に興味が
あり、暇もあるのであちこちへ
まわる。今回は島根県の出雲大
社と鳥取県の投入堂を目的にい
くつか巡ってきた。信仰の対象
は世界に目を向けると特異なも
のがあるが、自然に対するもの
であつたり自然を介するものが
多い。理屈なしに信じているこ
とができる説得力を持つ場や物は
う多くはないだろう。

出雲大社の御本殿から特別な
何かを感じた。人工物であるは
ずだが、自然的な魅力を感じる。
それは大社を構成する柱や装飾
がそうさせてるのであろうか。
不思議な感覚だつた。というの
も、場そのものからは強い何か
を感じ取ることができなかった
からだ。

大社からは理屈なしに信じて
ることができる説得力を感じた。
伊勢神宮や、大神神社の周りの
自然から感じられる場とは違
い、つくられた場であるかのよ
うだつた。信仰する態度が形と
なつて現れたものだろうか。も
ともと特別な場であつたのか特
別な場を作つたかの違いであろ
う。どちらも特別な場であるこ

とに変わりはない。出雲の大社
と伊勢の神宮の在り方は違え
ど、見て感じた不思議な感覚は
どこか似ている。

出雲大社の神殿は他の神殿と
見比べても大きかつた。今の本
殿の高さは24メートルであるら
しいが、4世紀ごろに作られた
という本殿の高さはビルの15階
建てに相当するそうだ。最近、
巨大な柱が新たに発見された
り、現存する絵図から専門家が
調べたところ、これが有力な説
であると感じた。出雲大社の高
さとその大きさが、理屈なしに
信じていることができる説得力を
生み出したのだらう。出雲大社の
本殿や、構成する社、一定の間
隔に植えられた松からも神秘さ
や凄みを感じた。

想起されるのが樹木信仰であ
る。日本はもちろん、ユーラシ
ア大陸一帯にもみられる信仰
だ。ヨーロッパでは真つ直ぐに
伸びた針葉樹を切り倒して立
て、周囲で踊るメイポールとい
う五月祭がある。日本の水口祭
りに似た意味を持つ祭だ。同様
にクリスマスツリーも樹木信仰
が強く関係している。高さは大
切な要素なのだろう。

そしてこの心や本質は立花の
真として形を変え残っている。

日本では杉や檜などの常緑針葉
樹の大本は、天から神様が降り
て宿するという観念で注連縄を張
り、御神体として崇められてい
る。後に立花の真になり、門松
も繋がっているといわれている。
出雲大社の高さへの意識と
関連していると思う。積み木を積
み上げるのも高いタワーを作る
のも似た物だろう。

地元の方に聞くと年間を通し
て風が強く吹くため家の周りに
松を植え、家を守つたそうだ。
近年の台風増加により松が倒
れることから築地松もなくなり
つつあると聞いた。僕が出雲に
おとづれた際は神社の周りに築
地松があるぐらいだつた。稲佐
の浜に行くとき強い風にさらさ
れ続けている松と出会つた。一足
先に咲いている椿を撮影するも
止まつたところを撮影できな
かつた。出雲で感じた風や海の
波、太陽は古事記を少しばかり
思わせる場だつた。色濃く残つ
ていたと言いつらいが、残り
香を嗅ぐことができた。

米子から車を1時間半ほど東
へ走らせると三徳山の三仏寺に
着く。三仏寺の投入堂までの参
道はおもしろかつた。修験道
の開祖であると言われている
役の行者が投げ入れたという御
堂だ。なぜこの場所を選んだの

か。ずっと気になっていた。二
足歩行できないほど急勾配の参
道を手も使い登つていく。岩や
木の根を頼りに、這い上がる。
途中で鎖を使わないと登れな
い場所や、ここから足を滑らせ
たら命を落とすであろう箇所が
何箇所かあつた。周りの景色を
楽しみなが楽しく登つた。登
拝というよりは好奇心で投入
堂までの道を楽しんだ。和装
を着けているとなんだか僧侶
のままごとをしている気にもな
る。

投入堂は建築的にも強い関心
を寄せられている。人の手に

よつてつくられた御堂だが、山
に溶け込み違和感が全くない。
むしろそこになければならない
と思わされるほどに存在感がな
いことが強く気になつた。理屈
なく納得できるのは気持ちがい
い。建物が景色に溶け込んでい
たように感じた。静かに強くそ
こに在つた。見事である。

理屈なく納得できるような、
静かに強くそこに在る花を生け
たい。そしてその花が場に溶け
込んでいると存在感も無くなる
のだろうか。その時には私もそ
んな人になつていだろうか。



三徳山の三仏寺投入堂への参道の途中の文殊堂にて。

いけばなインターナショナル
京都例会
デモンストレーション

会期 11月16日(火)

会場 京都プライトンホテル

講師 桑原健一郎(写真①～⑦)

デモンストレーションのお話をいただいた時には嬉しくて仕方がなかった。飛び切り綺麗な花と、自分の花と向き合う様子が少しでも伝わっていればと思う。自分が思う好きな花をたくさんの人に見て頂くことができた。(健一郎)

アタラシイいけばな

×

モクテル体験

会期 11月19日(金)～20日(土)

会場 エースホテル京都

講師 桑原健一郎(写真⑧～⑨)

ここ数年空間を隔てるしきりの文化に注目し、イベントに合わせて屏風をこしらえた。参加者一人一人の「らしさ」を屏風につけて、集めることで、その場限りの空間の創出をねらった。全員のいけばなが集まって、一つの作品になっている時間は、各回15分ほどだったが、見応えは十分。見事な花の空間であった。

イベントを通して、花だけでなく時代に耐え抜いた文化を次の世代に引き継ぐ事ができるきっかけになればと願っている。(健一郎)



③ロウヤガキ、ヒゴギク、キンパイギク。 ②キリシマツツジ、ミダレギク2種。 ①マツ、スイセン、ドウダンツツジ、ボケ、ツバキ、コギク他。



⑤マユミ、オオギク、ミダレギク、モミジ。 ④ウメモドキ、オオイトギク、サザンカ。







桐 垂柳 檜葉

△6頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二種挿し

花材 桐(桐科)

垂柳(柳科)
檜葉(檜科)

花器 龍手付銅花器

挑戦的な生花だ。真逆の性質を持つ植物が銅器の中で出逢っている。それぞれの個性が思う存分に発揮されている。季節を思わせる取り合わせなら違和感がなく、どこか説得力がある。中国では鳳凰が止まる木として神聖な植物とされてきており、その文化は日本の花札(はなかた)を見てもその影響が見られる。格好のいい枝に恵まれた。



松一色

△7頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花^{のきん}

花材 松(松科)

蛇の目松(松科)

晒木

花器 遊環付銅花器

日本中どこへ行っても松を見かける。葉もさることながら枝振りにいつも魅了される。私がよく鑑賞する木の中の一つである。一色物にされる植物には複雑な特徴、多面的な魅力を持っていて格好が良いものが多い。それはどれだけ人に見られたか、或いはどれだけ人の身近にあったかが強く影響されていると思う。松、水仙、桜、杜若、蓮、楓、菊。恐らく他にも一色ものの様式に耐えうる植物は多く存在すると考えている。



『隠居生活』

健一郎

ここ一年くらい家元に隠居生活を勤めている。自分が家元になれるよう席をあけてもらおうとして半分冗談、半分本気で勤めている。それは自分が最強の家元になった後に隠居をしたいと強く願っているからだ。隠居をするためには人に伝え、継承させる必要がある。

300年程前、江戸の町人の間では隠居がブームだったそう。そうでもなければ1日仕事である立花をこさえることは難しい。そして多くの人の夢は隠居をすることだったらしい。当時は公的な年金制度も整っておらず、金銭に余裕がないとできなかった。今よりハードルははるかに高いだろう。隠居後の道楽は寺参り、囲碁、将棋、園芸、釣り、骨董などがあつた。寺参りが一番人気があつたらしい。

今という旅行のようなもので他所のものを食べ、綺麗な景色を見て、お土産を買い自分の家に帰った。

元禄の立花の流行と共に格好の立花を探して売る人が徐々

に増え、今の焼き芋屋さんの様に歩きながら売って回る人もいたそう。江戸時代は植木職や、植木に関わる人が一番多かった。明暦の大火以降の園芸ブームから広い農地を活用して樹木や花卉の栽培を行い、それは植物園のような規模であつたという。経済的に苦しい御家人の間では内職として苗木の生育や盆栽作りをする人があつた。「鉢物師」「苗木師」が生まれ、花屋さん、種を売る人と業態が分化した。長屋の路地裏にまで鉢植えが置かれるようになった。

この時が園芸の全盛期であろうか。趣味が細分化された現代とは違い熱中の度合いや、互いに自分の鉢を見せ合い、笑っている姿が目につく。

隠居とは呼べないが、私は悠々自適の生活を送っている。時間だけの尺で見れば、隠居と似たようなものなのかもしれない。時間を沢山持つており、予定のない日が沢山ある。こんな幸せなことはない。自分がしたいと思つたことを自分の都合で初め、いつでも中断することができる。誰に気も使わないので気が楽だ。だがしたいことが無い場合を考えた途端に時間があ

ることに對して恐怖に近い感情を抱く。隠居後に打ち込めることや楽しみが必要だと多くの人が直面するとよく聞く。

今思い返すと学生時代、僕を含めて周りの友達も暇が怖かつたのかと思う。常に予定を詰め込みスケジュールに忙殺されることで暇を忘れようと、距離をおこうとしていた。そして予定があることは自分の価値が認められてると感じる。1人でいることに對するなんとなくの寂しさも混ざっていたかもしれない。何もしてなくても十二分にその存在はかけがえのないものなのに。存在価値が認められないと思つているのは自分だけであつて周りからの評価は関係がない。第一、人によつて評価される筋合いなんかあるわけがない。

人のために時間を使い、生きる人生も素敵だ。なかなかできることではない。だがそれは本当に人のためなのだろうか。暇を忘れようと、自分を欺く為に時間を使つていたとしたらもつたいたなく感じる。自分の価値を低く評価している。時間をどう使おうがそれは自分の時間であ

る。

何かの雑誌に面白い記事が載つていた。その記事によると1800年以降、世界中の人々の余暇の時間は減少しているという。昔より労働時間が短くなつているのに時間が足りないといふ多くの人が感じているそう。徒歩でなく新幹線に乗るようになり、手紙でなく電子媒体上でやりとりをするようになって久しいのにも関わらずだ。人はどこまで忙しくなるのだろう。明日食べるものがないので狩りに行つた時代から文明は移り変わり、時間ができたように思うのだが。私の周りに食べるものに困っている人はいない。なんて恵まれているのだろう。だが時間には追われている。

労働時間が短くはなつてはいるものの、多くの人は時間の大半をお金を生み出すために使っている事になる。働くことは大切であるが、なんのために働いているかは一度ゆつくり考えてみるのも良さそう。

私は休日に御所で通行料を支払つたこともなければ、鴨川で寝そべつて金銭を求められたこ

ともない。今のところ豊かな気持ちになるのにお金はあまり関係がないらしい。

今は隠居でこそないものの時間のある日々を過ごしている。自分に素直になりたい事だけしている。最強の家元になるためにしなければいけない事を一つづつこなしていこうとしているが、今は意識をしていない。現在は習慣化され、後は時間を待つのみになった。全く無理はしていない。毎日が刺激的で日常をゆつくりと味わっている。隠居後、考え方は変わつてはいると思うが、今は日本各地に数年づつ住み、各地の四季を肌で感じて周りたいたいと考えている。



花の勢い

△5頁の花▽ 健一郎

花材 連翹（木犀科）

椿（椿科）

花器 陶花器（市川博二作）

数え切れないほどの連翹の花。上品に光を反射させ、見事に咲いた椿。共に見事である。お花の前で寝転がると僕より大きい。大きさだけでなく強い勢いのある枝だった。溢れんばかりの生命力が紙面越しでも伝わる。華道家の喜びである。その内に大きな木を丸ごと家に引きずりこみそうな勢いだが、切花の美しさには特別なものがある。春が間近の好きな瞬間である。



芍薬の生花

△ 6 頁の花 ∇ 健二郎

花型 生花 真型

花材 芍薬（牡丹科）

花器 耳付陶コンボート

花が咲くのは楽しみである。芍薬の花は咲く姿を想像するも、毎度その想像を超えた迫力を備えている。咲いた時を考え、あまり本数は入れない。少し葉に力がなく見えるのは花を咲かせた安心感からだろうか。間も無くして散った。



『私とレモンとお花』

健一郎

家にいるレモン（飼猫）は今年の5月で10歳になる。人間で言う56歳に相当するそうだ。家に来た頃は、僕より年下だったはずだが、随分と歳を追い越された。来年には家元と同じ年になり、じき追い越すだろう。

自分が感じた1分はレモンにとつての何分なのだろう。時間を数字で把握していないであろうレモンとの比較は難しいが面白いので考えてみることにした。こうして考え事をしていると時間がすぐに経つ。

思い返してみると、自分の落ち着きの無かった幼少期は時間が経つのがなんと遅かったことか。人一倍の体力を持ち、走り回るのにずっと付き合ってくれる人は珍しかった。特に大人に対しては大きな不服を申し立てていた。「いつまでゆっくりしてるの？」と母親に尋ねても、「今やっと休憩したとこやしもう少し休ませてよ」と返事が返って

きた際は時間の感覚のずれにイライラしていた。なんともゆっくりと動き、いつまでもつるぐのかと、大人という生物を不思議に思っていた。1分の違いに初めに違和感を覚えた時である。

いつだったかは忘れたが、面白い本を読んだ。その本によると体感時間と脈拍には大きな関係があるようだ。つまり、体の大きな動物ほど時間はゆっくりと経過し、体の小さい動物ほど時間は早く経過する。同じ1分でも、生物によつて流れる時間が異なるというわけだ。

ゾウにはゾウの時間、ネコにはネコの時間、そして、ネズミにはネズミの時間と、それぞれ体のサイズに応じて、違う時間の単位があることを、生物学は教えてくれた。生物におけるこのような時間を、時計の時間と区別して、体感する時間と考える。体が16倍大きくなると二倍ゆつくりと時間が経過する。

この考えを是とするなら、同じ1分という時間でも、ゾウ

ウはとても短く感じるが、ネズミはとても長く感じていると考えられる。大人と子供の体感する時間と時計の時間の差と同じことが当てはまりそうである。平均すると大人と子供の脈拍の差が一分間に10以上ある。子供は脈拍が早いので、過ぎる時間が長く感じられるのだろう。

さらに、ハツカネズミの寿命は2〜3年、象は70年以上生きるが鼓動は20億回と同じであるようだ。通常、生物の体の大きさに寿命が比例しているのだが、例外はある。人だ。医療の進歩で人の寿命は30歳ほどだったはずなのに今では80ほどになり、百年になるとも言われており、非常に興味深い個体であることは確かだ。

苦しいことをしている時は時間が長く感じるものと言われるが、それは、苦しいことをしていると拍動が速くなるので、それに伴って体感する時間が遅く経過しているからだろうか。つまり、体感する時間が早く経過し、時計の時間は遅く経過していると感

じるわけだ。

御神木として祀られているような常緑の大本などは1000年を超えた個体は数多く発見されている。動物で例えるならばエネルギーを大切に使い、大きな個体であるゾウにあたるのだろうか。それに比べ、広葉樹の桜などは数百年である。毎年花を咲かせ、葉を落としたりと忙しい。植物の脈拍を測ったことはないが、エネルギーをたくさん使っているハツカネズミと似ているところがある。

算数が得意でないので計算する気にもならないのだが、人にとつての1分と身近な木の感じる1分位は大きな隔たりがあることは間違いない。僕の曾祖父も見ていたであろう庭の寒椿は私たち家族のことをどう感じているのだろう。

1分の感じ方に大きな隔たりが植物と人の間では大きい。大人と子供の時間感覚の比ではない。少しでもゆつたりとした気持ちで、少しでも長く植物と居ることが、植物

に寄り添う事になるのだろう。

狩猟をしていた時代は木化けや、石化けをして獣や魚に人の気配を悟られないよう、木や石に化けていた。おそらく木や石に呼吸を合わせることなのだろう。狩猟はしなながなく大きな木や石の上で感じたあの感覚に近いものだろうか。見て感じるだけよりかはるかに本質的な何かを感じた。

人が植物と共にある事は考える以上に難しいことなのかもしれない。人は一緒にいた気になっているだけのこともかもしれない。時間に追われて生けるお花は植物の気持ちを置いてけぼりにしているものになるだろう。

私とレモンとお花は一緒の時間をよく過ごす、同じ時間だけいても同じだけの時間は感じていないらしい。それぞれがそれぞれの時間の中に在る。



松一色砂の物 桑原健一郎（次期家元）

花材／松（松科） 松苔木 晒木

花器／銅砂鉢



庭で育てられているような松でなく、自然に生えている松を特別に頼んだ。立花の型を気にせず、自然にその枝が生き生きとした表情を見せる場に配したら見事な立花になった。初めての経験である。花を生けるとはこういうことかと思った瞬間でもあった。それぞれが味わい深く美しい。崖、深山など様々な場所で見える松の景色を想像させる。松は来場者をどう見ていただろうか。



庭で育てられているような松でなく、自然に生えている松を特別に頼んだ。立花の型を気にせず、自然にその枝が生き生きとした表情を見せる場に配したら見事な立花になった。初めての経験である。花を生けるとはこういうことかと思った瞬間でもあった。それぞれが味わい深く美しい。崖、深山など様々な場所で見える松の景色を想像させる。松は来場者をどう見ていたのだろうか。

松一色砂の物 桑原健一郎（次期家元）
花材／松（松科）松苔木 晒木
花器／銅砂鉢

『いけばなってなんだろう』

健一郎

いけばなってなんだろう。不思議な文化である。言ってしまうと、切り花を水の張った器に人が入れることをいう。何が人を夢中にさせるのだろうか。

この家に生まれたからだろうか。自分がしたいいけばなと、流祖の意見が合致している。この家でなければ、成人になってからも生け花をしていなかっただろう。人に伝えるならなおさらである。個人的には流祖の意見を知ったのだからこの気持ちは芽生えていたのだ。また一緒に思っていたのが、師の影響は多大である。家の影響だろう。自分の信条を曲げるつもりはない。その時に思った正解を間違いない。間違いに気がついたら修正すればいい。

いけばなについて調べたければ、こりにして調べればよい。今のいけばなと同じとは言わないが通じるところはあるだろう。いけばなは、仏教から起こったと言われているが、仏教発祥のインド、中国やベトナムなどのアジアの国であつても、いけばなに相当する文化は見当たらない。仏教の起こったインドでは植物は心を持たないものとされていたが中国の仏教で芽生え、日本で特に流行した「草木国土悉皆成仏（そうもくこくどしつかいじょうぶつ）」という草木や国土でさえ皆な仏（ブツ）という仏性があるので成仏しますという教えが広まった。いけばなは花を即身成仏させることなのだろうか。この土壌が他の仏教が布教された国では起こらなかった、いけばなが日

本で始まった理由の一つではないのかと考えている。学者ではないので正確なことは言えないが自分なりに調べて考えることは楽しい。

私は仏教の影響が大きいことに対して異論はないが、仏教を迎え入れるまでの日本の素地に興味があつた。今日は二つの慣習について触れてみる。水口祭（みなくちまつり）と鳥総立て（とぶさたて）だ。

水口祭は稲作儀礼の一つだ。苗代に初を播く日に水口に土を盛り、季節の花や小枝を挿し、御神酒や焼酎などを供え、山の神（田の神と同一視されている説もある）に豊作を祈る祭りだ。季節の草花である山吹や、ツツジなどの枝を畦に挿すという儀礼が残っている。

田の神に花を立てていたとも言えるだろう。依代としての一枝である。人々は縄文時代に稲作が始まってからさまざまな形で豊作を祈り続けた。銅鐸稲作が始まり、どれくらい経ってからのことなのだろうか。いけばなが生まれた土壌として充分に考えられる。

農業を覚える以前のその日暮らしの生活から、稲作を覚えすぎる恵みに戸惑いを覚えたのだろうか。森林や原野を開墾することは、野生の木、そしてそこに宿る神々と精霊は、人間に対して敵意をもつ恐ろしい存在と考えられていたらしい。

鳥総立ては万葉集で詩にも読まれた神事で、文字で残る最も古い風習らしい。これは長い時間をかけ大切に育まれた木を、造営に使用させて頂くことに感謝するもので、切株に梢を挿してその再生を願う風習だ。もちろん、今

も行われている。砂の物の正真の切り株の後ろからのぞく松にそっくりだ。鳥総立てもいけばなに影響をもたらしているのだろうかと推測する。

林業も効率がよくなるにつれ伐採する量が増えた。多すぎる恵みは戸惑いを覚えさせ、人に神事を創らせたのだろうか。

ご飯を食べることは命をいただき、生きていく事、つまり身体を作ることである。

花を生けることは命をいただき、生きていく事、つまり精神を創るときであらうか。美しいと感じるのは人の心。各個人が花を美しくしているのだ。

人の数だけ美はあるが、共通点も多く、美しいとされるものに傾向はある。それが型と言われるものだろう。だがそれは一見、本質に見えるが全く本質ではない。本質を伝える際に型に変換しなければいけなかっただけである。一本の松をどう型に当てるか考えることは間違っている。その一本の松をどう生かすかである。

生物（なまもの）は美味しい。魚や野菜の生は格別に贅沢で味わい深く、瑞々しい。

生物（なまもの）とは、生（せい）のあるものである。生きていくものであるということだ。いけばなは他の芸術とは性質が異なるだろう。ドライにされた魚やトマトは味が濃縮されているが、生とは別物である。私個人としては干物も好きだが、やはり生のものは気持ちがいい。

自然のものは、何もしないままが美しいのか？それならばわざわざ切り取らなくてもよい。花を切った瞬間に生の輝きを植物はみせる。鉢から植物を切った時や、大きな木から切った時に感じる。その他大勢から、その一本に焦点が合うからだろうか。まだそれが何なのかは分からない。

お花を側に置きたいという気持ちが人にお花を生けさせたのだろうか。トマトを丸かじりすると美味しいが、輪切りにし、綺麗な皿にのせ、オリーブオイルと塩胡椒、モツアレラチーズを添えて食べると違った美味しさを味わうことができる。人の手が加わるということだ。

生けたお花を見て思う。自分は嬉しいが、花は嬉しいのか。みられることに喜びを感じて欲しい。花から直接返事をいただいたことはないが、気持ちよさそうにしているのを見ていてと喜んでるように見える。

生き生きとしているものは美しい。

美しく見えるものは洗練されている。シンプルであることは少し違う。数が多くても洗練されていると綺麗に見える。一本も、一つの葉も無駄な物がない事をいう。

そもそも植物の美しさに魅せられる一つの要因に植物の洗練された姿形があげられる。

お花に無駄な部分はない。問題はいつだって生け手にあるのだ。

美しいいけばなは、花と一体になり、そのものの魅力が引き出されている事をいう。大切なのは、その花、そして

花を慈しみ、対等に在るということである。技術自体は大したことではない。姿勢とその人の在り方が、そのままいけばなとして表れる。

グループホームで働いていてよく感じるが、対等であるということはない。認知症の利用者さんも1人の人間なのですよ、敬いましょうと上司が人に言っていたが、1人の人間として敬おうとしている時点で、全くそう考えていないのは明々白々である。職員に対してと、利用者に対して対等な関係を築いているように見えた人をまだ1人しか見たことがない。皆んな真面目に働いている。誰も利用者さんの事を下に見ているつもりはないのだろうか態度として、言葉の端々に表れている。

花と人が同じ目線に立つことは想像以上に難しいことだ。花の取り合わせ、植物との接し方、枝捌き、水替え、言葉の端々に表れる。

生き物の命（人の時間を含む）を扱う者として肝に銘じておくこととする。

お花を生けるときは個性の尊重を何より大事にしている。最も気を使うところである。それぞれがそれぞれの個性を善い形で発揮できるように。

生きることが誰にでもできる。善く生きることが大切だ。とソクラテスは言った。お花を花瓶の中に生けることは誰でもできる。グループホームで働くことは誰でもできる。生き生きとした個性を引き出すことが大切なのである。今僕は花に夢中だ。



芍薬と太蘭

△3頁の花▽ 健一郎

花材 太蘭（蚊帳吊草科）

芍薬2種（牡丹科）

花器 ガラス花瓶

芍薬は咲いても綺麗だが、咲く直前に強い生命力を感じる。この芍薬に合うほどの数の太蘭は料理の専門学校生が授業後、置いて帰ったお花である。芍薬と二種で生ける事になるとは思ってもみなかった。芍薬に負けない強さが出た。太蘭の線の美を引き出すのはやはり難しい。投げ入れにすると水に浮くので剣山に生けている。

横から見た花の奥行





躑躅の生花

△7頁の花▽ 健一郎

花型 草型 副流し

花材 霧島躑躅（躑躅科）

花器 白竹竹筒

無性にお生花をしたくなる時がある。僕の場合は大抵、美味しいお酒を飲んだ後である。お昼に外で食事をした帰りに、生花の得意な師範の方と御所の前で偶然出会った。二人で御所の中を歩き楽しみ、その足で花を求め、自宅へ。お互い納得がいくまで自分の躑躅と向き合っていた。お互いがそれぞれに大切にしている事、が手に取るようにわかる。共に花を生ける友を得た良い1日であった。

横から見た花の奥行



『使い回わしの読書感想文』

健一郎

中学の恩師が流展にいらした。「私はこの先生には特別に目をかけてもらっていた。」と皆が思うような先生で今も活躍なさっている。何かあれば土曜日であろうと日曜日であろうと指導を熱心にしてくれる先生だった。ダメなことはダメ。生徒同士の噂にも敏感で何かあれば自分のことのように祝福してくれる。体が弱いのに、人一倍動き、気も常に使っている。身を粉にして働いているようにも見えるのだが、全くそれを感じさせないのだ。心理的にも、物理的にも人の痛み、喜びを受け入れ、導く人であった。

先生は一人一人を見て生かすことが得意だったように思う。一人一人を特別に見ていた。生徒の特技を引き出す場を設けるのが上手だった。カナダの留学生の前で日本の文化の紹介をするというところで和室で裏白の木のお生花をいける大きな場をいただいた。デモンストレーションを経験させてもらった14才の夏だった。枝を撓める度にでた嫌な汗を鮮明に覚えている。先生は特別な場を作ることとしたが、日常的に人を生かしていたのだから驚きだ。

流展の会場でお互いの安否の

確認が終わると、先生からすぐに、このテキストの文章を褒めていただいた。「君に文章の才能があったとは知らなかったわ。」とのことである。国語の先生に褒められたのではなく存在を褒めていただいたような言葉に感じた。元来文章を書くことが大の苦手であった。言いにくい事がなかったということだろうか。夏休みの読書感想文は、中学一年生の時に祖父に書いてもらった。毎日読書感想文を書いたような人である。原稿用紙を奪われる形で本人は楽しそうに書いていた。その後、中学一年生に書いてもらった感想文を高校の卒業まで書き写し提出していた。6年間自分のしたいことに時間をつかえた有意義な夏休みを過ごしていた。

中高時代に自分で書いた文章と言え、その場で恩師の先生に言われ書かされた反省文ぐらゐのことである。学生時代は運動と遊びが一番で勉強に割く時間なんてものはなかった。自分でも驚くが、今は読みただけの本を読み、毎日のように貯めたい言葉に出会い、保存して、このテキストの場で好きなことを言っている。毎月言いたいことが溢れ出てくるのだから不思議だ。今も変わらず、したくないことは適当に誤魔化しながらしたい事ができる環境を作っている。わがままなだけである。言い換えると生き生きとしているのだらう。

読書感想文を使い回ししていたことを先生に告げた。「全く気づかへなかったわ。それも一つの才能やね。」とおっしゃった。

いけばなにおいても型とはよくできたもので、型通りにいければ綺麗に見える。型通りに入っているのに植物が魅力的に見える花は植物の魅力でなく型に心を奪われていることが大半だ。世の中のほとんどのいけばながそうであると思っている。魅力が見えない人に魅力の引き出し方を伝えられるはずがない。ある師範のお弟子さんが言っていた。「先生、お生花の型に当てはめる事ができたら、見た事もないような植物でもいける事ができるのでしょうか？」僕は、型から入るいけばなは植物の魅力を最大限に引き出すことはできないだろうと答えた。ただ書き写しただけの軽い読書感想文が頭に浮かんでいった。「先生は真面目で誠実ですね」と返事が返ってきたが、いけばなはかつての読書感想文ではない。

理屈さえ把握すればどんな花でも生ける事ができる。これは、型の使い回しである。本当に好きだったのなら、その植物ごとの個性を大事にし、引き出すところだろう。自分のお弟子さんにそんな事を教え始めて4年ほどたった。型はまだ教えていない。彼、彼女らは魅力を引き出そうと懸命だ。セオリー通りではない、驚くような方法で植物を魅せてくれる。最近ではお稽古をしていて私が楽しまされているような気がしている。

型に当てはめて、要領よく書かれては困る。使い回しの読書感想文があると知った僕は、それを見つけた時に指導することができただろうか。想いの込められた物とそうで無いものを見分けるのは両方経験したからである。

型に当てはめるだけのものは戦前、戦後に爆発的ないけばなの拡大が見られた時代には適していた。簡単にお花を生けられるようになり、お免状が求められていたからである。今、僕が人に伝えたいのは、花と向き合う楽しさ、花の魅力の引き出し方である。使いまわされた読書感想文ではない。今のところ僕のお弟子さんは何文字ぐらいいだろうか。相当な文量を熱心に教場で書いている。

生花と立花の古典に関しては花の魅力を十分に引き出せるようになってから型を習うのがその人の花をいけるための道だと今は考えている。

料理の専門学校で副家元がいけばなの授業を担当している。いけばなの授業を楽しみにして

くれている人もあるが、なぜ料理以外の事をしなければいけないのだらう、と疑問を持つ人もあるようである。初回の授業で花に触れる前に持ち帰るよう伝え、家に飾る場所がない、家まで遠いなど理由を探す。花に触れた後の表情は変わり、授業後、家の玄関に一輪だけ飾りたいです。トイレは可愛そうですかね？家までお花を持たせる方法は何がありますか？と質問攻めである。授業を重ねる度にそんな人が増えるのが楽しみだ。

お弟子さん、生徒さんのあるがままの状態を受け入れ、そこから一人一人がそれぞれしたいことができるためのお手伝いをする。それは子供のいけばなでも、グループホームでのケアでもあっても、変わらない一つの僕の背骨である。

多忙であらうに、疲労感を隠しながら先生は、最高の作り笑いをしてくれた。5分ほどしか話してはなかったはずだが、その5分はゆつたりとした時間でアルバムを見ているようだった。来て下さった事に対する感謝と、このタイミングで会えた事が今の自分を見つめ直すきっかけになりました。これからしたい事を好き放題にやっていきます。ご来場くださりありがとうございます。お元気で。



楓

△12頁の花▽ 健一郎

花材 花菖蒲はなしょうぶ（菖蒲科）
いろは紅葉いろはもみぢ（楓科）

花器 陶花器

桜の季節に少し遅れて楓かえでの花が満開になる。楓の花が集める大量の虫は春の終わりの知らせだと思っている。楓の下に僕もよく行く。だが、あまりの虫の多さに退いてしまう。花の盛りが終わってやっと私が楓を味わう番である。花菖蒲の季節にもなると花は終わり写真のようになりしつかりとした葉になっている。そりかえった枝なので葉を前面に見せて生けた。どつしりとした器に花菖蒲とよく似合っている。私の大好きな季節である。

横から見た花の奥行



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2022 年

6 月号

No. 708

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



八角蓮の花

△表紙の花▽ 健一郎

花材 金鎖(豆科)

八角蓮(目木科)

花器 青白花瓶(吉川充作)

虫が好みそうな香り、人が苦手とする匂いがした。足元を見ると八角蓮の葉が光っている。よく見てみるとお花が咲いていた。花の珍しさとその匂いで人を惹きつけていた。八角蓮の相手を探しているとお花屋さんからキンクサリがありますとのこと。よく合う取り合わせだと思っている。格調高く仕上がった。獣足の花瓶はインド系の神様を想起させる。



大和学園 情報誌

クラブ・ドラッシュ 4月号

〓若き第一人者に教わる

京の伝統文化・いけばな

桑原専慶流次期家元

桑原健一郎さん

「縁あってお会いする方とお花に向きあい、四季折々に咲く花々の魅力を活かしていれば、自分自身の魅力も磨かれるようです」

桑原専慶流の歴史は元禄時代(17世紀)に始まり、初代仙溪が当時の植物学を駆使した全8巻の著作は、華道の言葉が初めて記された資料とされています。そのような流祖から伝わる理知的な気風と自由闊達さを受け継ぎ、十六代(次期)仙溪となる立場の私ではありますが、日々「い



学校法人大和学園は京都市内に4つの専門学校(調理師専門学校ほか)を設置するほか、生涯学習や産業支援事業も行っている。現在、華道の授業を櫻子副家元が担当し、健一郎次期家元も助手を務めている。

「ばな」とはなにかを自問しているのも事実です。但し見つけた私論もあります。それは縁あってお会いする方々が安らいでくださるために、それは四季折々の野山に咲く花々が宿す「いのち」のために、お花の魅力を最大限に活かすことで、自分自身も活かすのが桑原専慶流の「いけばな」ではないかということ。また、そのような気持ちで花々に向きあっていれば人は自ずと磨かれるよう。「いけばな」に勤しみ、人としての魅力を増されたお弟子さんは少なくありません。これは他者への「おもてなし」を学び、自分を活かそうとされている大和学園の皆さんも同じでしょう。今後、人も人としての魅力が高め続け、京の伝統文化でもある「おもてなし」の担い手となる「いけばな」が一助になることを願っています。(以上、誌面より転載)

『義祖母との散歩』

健一郎

隠居して山に暮らしたいとふとした時に思う。隠居生活の先輩である祖父のお宅に遊びにいった。山に囲まれた家から見

下ろすと川が流れている。楓が目を引く。その足元には躑躅が咲いており、大きな台風が来る前までは藤の花が一面に咲いていたそう。ゆつたりと川の音が生活の中にある。山の香りを楽しんでいると、川の上流へ向かうよう、カワセミが驚くほどの速度で通り過ぎた。義祖母によるとしよつちゆう遊びに来るそうだ。昼から肉が大好きな義祖父と競うようにすき焼きを食べ、妻と義祖父は川の音を聞きながらウトウトと昼寝。私と義祖母は山へ散歩する。数十秒歩けば森の中。外来種の植物を薙ぎ倒し、大きな枝、大きな石を端へどかしながら、やわらかく歩いていく。

その光景が後から見ている僕には、山を整えているように見えた。義祖母が山の一部であるようだ。鳥が蜜を運ぶがごとく自然な行為にみえた。それは僕が人だからであろうか。人でな

くともそう感じられるのではないかと感じている。自然と人との付き合いは長い。原始的であればあるほど濃密な付き合いがあった。家にお米が届く現場さえ見えない僕は自然との付き合いが非常に薄い例だろう。

都市において整えるとは自然物をなくすこと。人の住む街にすること。西洋の庭園に見られるような人工的な幾何学的な形を楽しむ庭園と比べ、日本の庭園は自然美を表す。いけばなおいても、個人的に好きではないが、人の解釈にあてはめた幾何学的特徴に着目して楽しむ物と、植物そのものの魅力に着目して楽しむものがある。いずれの場合であつてもそれは自然そのままではない。「手入れ」とはそういうことである。人は自然を看る(世話をする)事によって、返つて自然を内から従わせる特徴を持つとも言える。

都市化された環境に慣れた人の原則として都市の中に自然を置くことを酷く嫌う。ここでの自然は手入れされていないありのままの野生である。昆虫がいて驚き、土が見えていると驚く。日常の髭剃りや、化粧も自然からの距離のとり方の一つで

ある。全てが人によつて意識的に作られたもののなかで生活している。テーブルマナーもこの視点で見ると面白い。街路樹や庭は人が看ることで管理されている。死体があると驚く。人の死は人から遠ざけられる。死ぬ前に病気で病院に隔離、亡くなると大急ぎで火葬場に持つて行く。そんな環境で育つた人達に死生観をもてといつても妄想でしかない。

いけばなは芸術の中でも自然との関わりを思い出させてくれる。都市化する前のヒトに返す装置としてあり続けるのかもしれない。その時間が大切である。整理整頓された無機質な部屋に花を置くとき場の空気が変わる。生き物としての安心感がそこにある。

義祖母は立派な杉の木に手を合わせ拝む。僕も御所にお氣に入りの楠木があるのだが、それは拝む対象ではなく、友達のような感覚でいる。木に登り、寝転ぶ。幼い頃は楓の木に登り、時を過ごしていた。圧倒されるような木を見つけると立ち尽くす。撫でたくなる時も、抱く時もある。記憶している初めの木登りはスイスのジュネーブでの

木登りだった。当時幼稚園児だった僕より年上の子供が登っているのを見て自分も登りたくなったのを覚えている。一面緑の芝生が整えられていて、木が綺麗に見えた。家の近くの公園では地面が砂だったからか、木の幹にジュネーブほどの魅力を感じなかったのだろうか。母いわく「あんたはサルみたいやつたで」と。よつぽど木登りが上手だったのだろう。上手な例えである。木と自分の関係は少しづつ変わっている。今でもよく木に登ることはあるが、ここ最近、手をかざしたり、抱くという行為が追加された。木を味わうというのだろうか話を聞くと、感覚に近い。触診とも似ているが少し違う。木と戯れ合う時もある。共々に時を過ごす時もある。拝む行為は木がある感謝の念がそうさせたのだろうか。

自分が歳を重ねた時、手を合わせられるような木が見つけれられるのだろうか。木ではなく自分の在り方による物だと考えている。義祖母を見ていると感謝の気持ちが体表へ溢れ出ているようだ。まだまだ背中はずいぶん

義祖母は話しながら慣れた手つき、足取りで山の中へ入っ

ていく。妻の兄妹は幼少期この山で育つたそうである。オランウータンに似ているとは思っていたが合点がいった。最近、義祖母は口笛を吹きながら歩くそう。ウグイスの鳴き真似を2人でしながら川に沿って散歩。口笛の音にウグイスが返事してくれる。山の中には僕たち以外に人はいない。ある程度中へ入ると風合いが変わった鳴き声が聞こえた。「ここからは別の鳥の縄張りです。」と案内してくれた。モズの縄張りだ。様々な鳴き真似で遊んでくれる。モズは他の鳥の鳴き真似をする面白い鳥だ。僕が続いて鳴き真似をすると、また違う鳴き方で先導してくれる。様々な鳴き声で遊んだ。足元を見ると茶色のカエルが川の水を浴びながら羽虫を食べている。「昔は蛇がいてんだけど。」と義祖母、なるほどこのカエルは平和に慣れていそうな体たらくなわけだ。整えられた道を除けばそこには自然が広がっていた。この自然の中には僕はとても定住できそうにはない。たまに遊びにくるくらいがちょうどいいのだろう。義祖母と僕の事をウグイスが家に帰るまで見送ってくれた。僕と自然の距離である。



一輪挿し

△6頁の花▽ 健一郎

花材 小鬼百合（百合科）

金虎の尾（金虎の尾科）

花器 陶花瓶（崔龍熙作）

お花屋さんには茶花用に鉢で珍しい花が置いてある。それを眺めているのが好きだが、生けるとなると相手を探すのが難しい。今回似合いの2鉢を見つけた。いい季節である。魅せたいものが写っている。





花の勢い

△7頁の花▽ 健一郎

花材 黄素馨きそけい（木犀科）
アリウム・ギガンチウム

ムべにばな（百合科）

紅花べにばな（菊科）

花器 陶花瓶

ギガンチウムと紅花の花の形に目がいく。似た形の花を取り合わせると形の違いに目がいかなくなる。その質感の違いをみることはできないだろうか。似た植物による調和ではなく競い合っている様に私は感じている。ベニバナとソケイで生ける予定だったがギガンチウムが入ると勢いが増した。夏の匂いがする。



いけばな

桑原専慶流

テキスト

2022 年

7 月号

No. 709

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





河骨の生花

△表紙の花▽ 健一郎

花型 生花 行型

花材 河骨 (睡蓮科)

花器 ガラス花器 (コスタボ
ダ)

可愛らしい。葉の質感がそう
思わさせるのだろうか、生えて
いる様だろうか。小さな花から
だろうか。切り花になった際の
儚さだろうか。個人的には水生
植物の中で一番自分に近い波長
を感じるからだろうか。水を見
せるべく小さなガラスの器に一
種で生けた。



薔薇の生花 (写真⑤)

健一郎

薔薇の枝振りが好きなので、
枝振りを見せやすいお生花の様
式を借りて生けた。暴れた薔薇
を手当たり次第に貰ったのはい

いが、生けるのに一苦労する。
生かすのが難しいが、そのもの
の良さを引き出せたと思う。器
は薔薇の歴史を感じさせるよう
な小川欣二さんのものを。奥田
薔薇園さんの薔薇は香りが良
く、幾度嗅いだかわからない。

香る赤い薔薇は珍しいのと
と。1ヶ月後の今も蕾が咲き部
屋で楽しんでいる。



笹百合

△6頁の花▽ 健一郎

花材 笹百合(百合科)
土佐水木(満作科)

花器 白釉陶花器(崔龍熙作)

夏にならないと百合は生けない。年中花屋に置かれているが、生活の景色とあまりにもかけ離れすぎていて季節以外の百合に対して強い違和感を持っている。

栽培されている花の場合、花屋に並ぶ時期が早いことがあるが、できるだけその時の花をその時に生けるようにしている。いつも今の季節を楽しんでいる。この笹百合と取り合わせたのは生けた季節に飛び切り綺麗なだった土佐水木。気に入っている器に生けた。



初夏の砂物

△7頁の花▽ 健一郎



花型 砂の物
花材 花菖蒲 (菖蒲科)

野萱草 (百合科)

太蘭 (蚊帳吊草科)

蜜袋 (桔梗科)

土佐水木 (満作科)

河骨 (睡蓮科)

擬宝珠 (百合科) 晒木

花器 陶砂鉢

この花を撮影した次の日に妻と蜜を見に行った。

この立花を見るとさまざまな事を思い出す。子供のいけばなや学生達と生けたフトイ、妻と見に行った花菖蒲、蜜の側で咲いていた蜜袋、滋賀の平池付近で見た野萱草、河骨は今年初めて自分の稽古で生けることになった。花屋さん、産地の農家さんの協力があったのである。全て今年の体験である。

少しずつその花のイメージが強くなっていく。面白い砂物が出来上がった。



『お花の倫理』

（復興いけばな宣言）

健一郎

倫理とは「人として守り行うべき道」とある。

人は変わり続ける。すると倫理も変わり続けるだろう。26年ほどみてきたが、その時間だけでも倫理の移り変わりを眺めていて興味深く感じている。

近頃イルカショーの廃止のニュースが流れていた。楽しみにしていたのに残念だとの事。古代エジプト、中世のヨーロッパの頃から王侯貴族が、戦利品として収集し動物を持ち帰って見せたのがサーカスの始まりとされている。獅子は王と共に描かれていたのを目にする。程なくしてサーカスが誕生し楽しまれてきた。家畜化にも成功し、人は増えた。家畜の在り方など人と動物の関係が見直されるようになり久しい。人が広い視野を獲得していくたびに倫理は上書きされていく。今動物と人間の関係がもう一度見直しされようとしている。

学生時代、北海道の登別の熊

牧場で熊に向かつて魚を投げる事ができなかった。周りの観光客は、可愛いといい、熊の群れに向かつて上から魚を口へめがけて投げて喜んでいいる。口から外れた魚には見向きもしない。私は餌の購入を拒否したが、同伴していた友人が一つ魚を分けてくれた。人が動物へ魚を与えろという図式をまざまざと見せつけられた様な気分だ。数メートル離れた熊に魚を遠くへ投げ、歩くよう促すが、口に上手に投げられた魚しか口にしない。もちろん、熊牧場は餌やり体験で観光客を惹きつけているのだが、熊の研究、保護、観察、熊と人の共生するための方法を知るために始まり、今でもそれは変わらない。餌やり体験で人が惹きつけられることが個人的に情けなく思っている。

こどものいけばなでフトイ、バラ、ナルコユリでお稽古をした。好奇心の強い彼はフトイを曲げて剣山に刺していた。母親は私の顔を見て申し訳なさそうな表情をしているが彼を見守っている。母親曰く、他流派のお花でその様なお花があり、やってみたのだそうだ。私は彼に聞いてみた。「薔薇は曲げなかつ

たのですか？」可哀想だから曲げないとのこと。フトイは可哀想ではないのかと尋ねると可哀想だと言う。好奇心でお花に対して失礼なことをしてしまったのだと落ち込んでいた。無意識でなく、意識的に人が変わることで自分を変えることについて話した。先生の前の自分と母親の前の自分。ちよっかいを出していい相手と出していない相手との違い。彼はいじめの問題も無意識な決めつけが原因であるとの結論に至った。それが合っているかはともかく、考えることが大切だと感じている。

推察するに、彼は自分と向き合っていたのだろう。そして僕は花と向き合うことを伝えたいと、再認識した。だがそれはその花の向こう側の自分と向き合っているのかもしれないとも考えている。

芸術の世界ではオリジナリティが大切だとされる。自分を出そうとする事は自然な事だが、私は、無理して作ったオリジナルだと主張する作品の浅薄さがいけばなに限らず苦手だ。いけばなの場合においても、無理せず、そのままだがよい。同じ

思いを持った人がいたとしても個人の差は表出する。花が一本一本違うからだ。同じ作品に見えたとしてもそれは見る人の力量不足だ。各個人が感じた花の魅力を引き出すのは人である。

動植物をかわいという愛でている人はよく見かけるが、可愛がることとその生き物がいい状態であるかは全く別の話である。私はいい状態である事を前提としている。可愛らしいフトイを折り曲げることはフトイにとっていい状態ではないし、過度に撫でられすぎた犬はストレスを抱えている。

生ける花として花がある場合に、葉の一枚、枝の線までに魅力を感じ、その姿を生かきするいけばなを伝えたい。

切花になった時点で花は死んでいるので何をしてもいいと考え、シンプルな葉、茎を面白くしようと人らしさを花で引き出そうとするのは好みでない。過度に人の目を気にしてお花を生けてほしくない。過度な傾倒は大切なものを見えなくさせる。花の気持ちを考えて、その人の個性を大いに尊重してそ

の人が大いに楽しむいけばな。植物をおり曲げたり、花を触る人が自由にすればするほど、植物は苦しそうだ。生き物の命を使って自己表現しなければならぬほど人は特別なのかと疑問を持っている。

生活に必要なため行われる利用や、飾る花としての利用に関しては、脈々と人の中で続いてほしい別の文化である。

曾祖父の13世家元は新興生け花宣言を呈したうちの一人であるが、著書『いけばなの四季』で創作的な造形をいけばなとは明確に区別している。伝統的ないけばなや、現代的な盛花瓶花と創作的造形を混同することがいけばなよくないことであると著されている。

13世家元に会ったことはないのだが、本を通して、熱量のある主張や、写真に残っている花や造形作品を通して魅力を感じている。13世家元のお弟子さんに話を伺うと人となりが少しずつつ浮かび上がってくる。古い本ではあるが、読みこたえ十分で、今の時代に読んでも面白いことに驚く。

（つづく）



水辺の二友

△12頁の花▽ 健一郎

花材

花菖蒲 (あやめ科)
河骨 (すいれん科)

花器 手付八角銅花器

花菖蒲と河骨。お生花で取り
合わせても良いが、一輪ずつ勢
いのあるものを出逢わせた。小
品の花ではあるが、手つきの銅
の器が品よく合っている。





夏のいけばな

△5頁の花▽ 健一郎

花材 アナナス

(パイナップル科)

ドラセナ・コンシンネ

(リュウゼツラン科)

アンズリウム

(里芋科)

花器 紺色ガラス水盤

年中あるが冬には魅力の感じ
なかった花だが夏になると心な
しかきれいに感じる。私は熱帯
の暑さと京都の暑さの違いを比
べられないのだが、植物園の温
室なんかで想像を膨らませてい
る。とはいっても植物園も現地
の音を出したりしてくれている
ので疑似的ではあるが体験でき
ることはありがたいことであ
る。植物の勢いをそのままに生
けた。アナナスの立ち姿ではな
く、咲いている花を見せたかつ
たので大きく前へ倒した。重た
かったため、鉢を後へおいてい
る。京都にいながら熱帯の雰囲気
を味わえるのはいいものだ。
興味へのきっかけとなる。そし
てそれは歳を重ねると記憶や、
思い出としてそこにあるだろ
う。



木槿^{むくげ}の生花

△6頁の花▽ 健一郎

花型 行型

花材 木槿（葵科）

花器 陶花器

土砂降りの雨の中脚立に登り、方ぼうに生えている木槿を切っていると副家元と葉月が騒がしい。「危ないで！足滑らさんときゃー」「健ちゃん傘いらんか？」2人とも笑いながらふざけている。言葉だけ見ると、なんとできた人なのかと思うが、副家元は台所から、葉月は3メートルほど離れたところから雨傘をさし、動画を撮っている。あとはわー、と、きゃーしか聞こえなかった。木槿にとっても雨の中い状態で切り取ることができた。庭師さんがお庭を掃除する前に、刈られてしまう木槿を生けておきたかった。祇園守りというこの木槿は夏の暑い時期から暑さが落ち着くまで、気張って咲いている。一日花で毎日花を咲かせ、毎日萎れる。今回の生花はきれいに咲いている状態のものと色が暗くなっている二つともの花を残した。景色として楽しんでいる。バック紙の色はやはりこの色だ、いつも見上げる空と共に目に映る木槿が綺麗だった。



梶の生花

△7頁の花▽ 健一郎

花材 梶（桑科）

花器 銅薄端

2日ほど雨が続いた日の夕方。土砂降りの中、庭の梶を切った。約、1ヶ月ほど好き放題に伸びた梶を避けながら生活していた家族。もう切って飾ろうか。と何度も話が出たが、今回のテキストの撮影のために、置いていて欲しいと頼んでいた。梶の木は神事と関連深く宮中では七夕の短冊として使用されていた。

梶の木をどうしてもお生花にしてこの竜の薄端銅器に生けたかったわけである。以前秋に乱れ菊一色の立花もこの銅器で立てたが、格があり、雰囲気（まど）を纏う植物と良く合っている。

七夕の日はお風呂上がりに、妻と筆ペンで願い事を書いた。そして一晩星に見せておいた。今年は珍しく晴れていて星を見ることができた。風呂上がりに庭でゆったりと過ごす2人の時間が気に入っている。翌朝、梶の葉を取りに行くと庭を散歩していた家元が「ええ願い事やな」と微笑んでいた。

『お花の倫理』

(復興いけばな宣言)』

健一郎

光ウサギの研究は倫理的問題で中止されているときいた。動物のゆきすぎた研究は時として中止されることがあるらしいが、植物の改良が倫理的理由で中止された話を聞いたことがない。花粉のない百合や、青色の薔薇、虹色のカーネーションの販売が当たり前のようにされている。光る花は存在し、観賞もされている。花と動物の違いは、時間の違いと死の曖昧さなのではないかと考えている。

人は人以前から数世紀単位の年月を重ねるたびに、自分達から始まり、少しずつ大切にできるものが拡張されているのではないだろうか。人は誰もも自分の存在に対して強い興味をもち思いやり、大切にしている。そして家族、友人、隣人、組織といった具合に少しずつその幅は広がる。そして大切にできる範囲は動物にまで及びそうだ。次は植物の番であると個人的には期待をしている。ただ生類憐みの令みたく、規則として決め

るのではなく、各個人が納得した上で広がってほしい倫理観であって欲しい。動物の愛護に関しても強要はあまり効果的でないことは明らかであろう。強引さは、わだかまりをうむ。花の倫理はこれからゆつくりとおこればいい。そしてそれは石にまで広がるであろうと予測している。

岩や滝などの無機物にまで人と同じように霊的なものがあると思われられていた時代があった。狩猟生活をしていた時代である。自然の中に人がポツンといた時代だ。自然信仰が世界的に発生し、日本もその例外ではない。有機物、無機物問わず、全てのものの中に霊が宿っているという考えは、全ての物を大切にしていたからではないだろうか。有機物、無機物含めて、生きていく上で必要不可欠なものだったため、特別な気持ちを抱かせたのであろう。火を見たときに感じるあの不思議な感覚である。今、我々はその当時とは程遠い生活を送っている。

花が好き人は趣味で園芸をしている人が多いらしい。趣味で花を育てている人は花を大切に

にしているように見える。園芸をしている花の好きな人たちがらの話によると、わざわざ生ける花をする必要は無いみたいだ。花が大切だから、花に対して余計なことはしたくないと言う。花は花瓶にさして楽しむだけで、余計なことはしたくないとの事。それが花を生けることだと僕は思うのだが。純粹にお花が好き人は、その花に魅力を感じているのであって花を瓶の中で生かす行為は、いけばなではないという。

僕はいけばなをしようと思っている人でなく、花が好きで人とお花を生けて楽しんでいたいと考えている。良くも悪くも、いけばなには強いイメージがあるようだ。イメージが言葉の認識を限定させる。花の魅力を引き出すいけばなが広く知れ渡れば、お花が好き人がお花を生けてみたくなるのではないだろうか。

絵が好き人は絵を描けたいと思う。花も花が好きの人に大切に生けられていてほしい。介護も人が好きな人が従事すべきだ。それぞれの現場でお花が、人がぞんざいに扱われているこ

とに強い憤りを感じている。まだ綺麗な花なのにも関わらず、いけばな展が終わると捨てられる花、真つ直ぐに育つきれいな植物をわざわざ折りまげ、切り裂いたりされる姿など、その植物がよい状態でない胸が締め付けられる。人を人と思わない態度を取る職員。介護に関しては人権があり、法で守られているため、問題になるが、花を材料として見ている態度や、花の倫理は問題になりにくい。

人は人権で守られている。動物は新しく動物の福祉ができていく。これからこの流れは加速するだろう。遺伝子の組み換えは人には行わないが、動物、植物には行う。遺伝子の偏りが絶滅リスクを高めている事にもなるが、遺伝子組み換えに対して反対しているわけではない。いま僕がこうして文章を書いている時間があるのも、その恩恵である。私が今生きている以上、簡単に否定できない。ただ、植物の倫理について、一度考えてみてほしいだけのことである。人に対するのと近い気持ちで動物に抱いた経験があるかもしれない。同じ感情を植物に抱く事は不可能ではないはずだ。

少なくとも私が生けているお花に対しては強い好意を抱いている。

花も動物も人も、在ることの尊さをただ、守りたい。そして生き生きとしているのをながめているとなんだか心地がいい。

花の尊さを認め、花の内に在り溶け込むイメージで、花の生の魅力を引き出すのがいけばなだと思っている。誰が見ても心地がいい、生き生きとしていて、どこか温かみがある、そんな花を生けられるようになるのが今の目標であり、僕が理想とする花をいける人と花の倫理的關係である。

花の尊さを認め、花を大切に扱い、花の魅力を引き出し、生き生きとした温かみのある花をいける。

これが僕の「復興いけばな宣言」である。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
9 月号
No. 711

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





「なんかええな」

△表紙の花▽ 健一郎

花材

夏櫨 (躑躅科)

夏櫨 苔木

犬蓼・赤飯 (蓼科)

沢枯梗 (桔梗科)

仙翁 (撫子科)

竜胆 (竜胆科)

女郎花 (女郎花科)



白花鳥兜 (金鳳花科)

襖萩 (襖萩科) ピンク

萩 (豆科)

宝鐸草 (百合科)

梅苔木

花器 銅砂鉢

苔の豊かな木を探してはいるのだがなかなか見つからない。先日、庭師さんのトラックで見つけた苔がべつたりとついた樹齢70年くらいの梅の切り株を頂いた。特に何かを見越して頂いたものではなかったのだが、季節の砂物によく合った。苔がよい景色を作っている。真の隠しは平安神宮を散歩していたときに拾った松の皮。層を眺めて感心し、部屋に飾っていた。模様が綺麗だ。これも何かを考えての物ではなく、好きな石を持ち帰るような感覚である。小学時代によく石を集めていたのだが、何か自分に強く反応させるものを集めることが最近増えた。「なんかええな。」という感覚は忙しい時間の中で見過ごされやすいが、ゆつたりとした時間に生きているとよく味わえる。なんかええなと思った季節の花を一つの砂鉢に出合わせた。いい景色だ。



蓮の立花

健一郎

花型 蓮一色

花材 蓮 (蓮科)

花器 手付陶花瓶

上野淳泉先生の教場にて。

8月21日。(倉敷市)

蓮の立花

健一郎

お盆も終わり、花の出荷が終わった後の蓮畑で、好きなだけ蓮を切らせてもらって立花を立てた。僕にとって初めての蓮一色である。前の日までは雨が降っており、蓮の葉は日光で傷んでない。お水も良く吸っている。当日は曇りで、蓮の花を切り取り終わると雨が降ってきた。

ハスの立花をする上でこれほど恵まれた環境はないだろう。以前の河骨の立花を立てたときにもお世話になった先生をはじめとし、たくさんの方の先生にお世話になった。立てた立花を最後に13世家元の愛弟子である95を迎えた大先生に拝見して頂いた。

曇りのため、朝6時から蓮を取りに行く。辺りはまだ静か。畑には一面に蓮が広がっている。長靴、レインコートを装備し、真になりそうな葉から取りに行く。奥の方にいい葉がある。目がけて分け入ろうと沼へ足を踏み入れると足が沈む。ハスの方が背が高くなった。見上げると蓮の葉で周りが見えない。先

ほど見つけた良い葉はどこへ行ったかわからなくなる。大きな葉の下には巻き葉がある。役枝にしようとは考えず、綺麗だったので切り取った。蓮はどの段階で、いつ見ても雰囲気があって面白い。綺麗な葉、花を探してどんどんと奥へ分け入る。花の香りがした。甘くすーつとする香りだ。私はいまハスの中にいる。まるで蓮に溺れているかのようだ。足が抜けなくなってしまうが、なんとか歩く。無理して手を伸ばして綺麗な蕾があったので頂き引き返す。その拍子に蓮を切る音が聞こえた方を見ると女性の先生が慣れた手つきでズバズバと葉と花を集めているのを発見した。まだ僕はあそこまで行けそうにない。きつと、歩き方や装備の違いであろう。倉敷の先生方は毎年の恒例行事を心から楽しんでいて。

手早く花を取り終え、生ける場所へ持ち帰る。水揚げをしながら花を立てていく。河骨の立花のときにもお世話になった先生についてもらい、脈々と受け継がれる技、感覚を吸収する。結局は触るしかない。

家に帰り着くと、95を迎えた大先生から電話がかかってきた。蓮の安否の確認、僕の安否の確認、京都から来てくれてただけ嬉しかったか、蓮にとつて京都で他の人に見てもらえることがどれほどの幸せであろうか。大先生自身が自分が蓮であるかのように何度もお礼を頂いた。きつと大先生は蓮の代わりとも思っていないだろう。お礼を言おうとしていたはずの僕が勢いに飲み込まれてしまった。

蓮ちゃんにもよろしくね。と、電話は終わった。大先生と花の境界線が曖昧で、ぼやけている。ましてや今回大先生はハスに触れてさえないのに。終戦後18

歳から花の道に入り、没頭。花だ。本当に楽しそうにその当時に厚みを持たせるべく油絵、書道、大工仕事を勉強する。未だ。私も思いつきり、この生を堪能したい。



璣瑠鬼灯

△6頁の花▽ 健一郎

花材 璣瑠鬼灯（茄科）

仙翁（撫子科）

白花鳥兜（金鳳花科）

花器 陶花器（野中春清作）

江戸時代に日本で作出された園芸品種で、鉢植えで栽培されている。種子ができないため、株分けで増やすらしい。作例はまだ色づく前のもので、色づいたものより、不思議な萼に目がいく。江戸時代に競って品種改良された朝顔を思い起こさせる。国中が花に興味感心を持っていた時代のことを考えているのは面白い。その時代に良く流通した仙翁花と山の鳥兜と取り合わせた。何度見ても不思議な形の花だった。



【訂正】

7月号・6頁の花

花器 白釉壺（崔龍熙作）



ベロニカの小品

△7頁の花▽ 健一郎

花材 エンシクリア（蘭科）

ベロニカ（胡麻葉草科・

車前草科）

花器 小物入れ（モロッコ）

団子のように固まった形をす
るトラノオ。想像するトラノオ
とは全く形が違う。一週間ほど
かけて咲いてゆくであろう花も
ほとんど全てが咲いた。予定し
ていた30分の花火大会が何かの
手違いで1分で終わってしまった
かのように。花屋で会うとな
ぜか手にとってしまう。今回は
この二輪のみ残っていたので頂
いた。トラノオらしい形をした
ベロニカは、和の花とも合うが、
奇形とも言えるこのベロニカの
強さを見てエンシクリアと合わ
せた。



深秋

△3頁の花▽ 健二郎

花材 乱れ菊3種(菊科)

嵯峨菊2種(菊科)

花器 陶花瓶

秋が深まると何と言っても菊が美しく感じられる。花屋でもさまざまな菊が迎えてくれる。乱れ菊は自然の勢いをそのままに生け、嵯峨菊は品良く生けた。その後、家元のアドバイスで枯れ葉の景色を作った。いい景色である。





木瓜の生花

△7頁の花▽ 健一郎

花材 白木瓜（薔薇科）

花器 白竹竹筒

木瓜の枝ぶりは面白い。植わっているのを見た際の迫力とは大きな違いが出る。面白味のある枝が多すぎるため、どう魅力を引き出すか考えている時間がいい。枝取りをする際、留に配した枝を見た瞬間に花形が決まった。面白くしようとはしていない。面白い枝だったのだ。春と秋に木瓜は咲くが、鳥の食べ残した実が残っていることもある。もともと、僕が鳥なら、棘だらけの木瓜に近づかないだろう。木瓜の棘が険しかったところに実があつたのだろうか。春と秋で生け分けることは難しいが、小さな秋を大きく表現できた。





楸の生花

△8頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二種挿し

花材 楸（凌霄花科）

梅花躑躅（躑躅科）

花器 遊鑲耳銅花器

留の梅花躑躅で大きな動きが、楸の存在感を強くさせる。楸は撓め難く、水が上がるか心配していた。撮影して一週間後、新芽ができていたので問題無いだろう。その後ますます大きくなっている。



キササゲの枝から新芽がでてきた。



横から見た奥行。



秋草の立花

△9頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

花材

真 女郎花 (女郎花科)

見越 男郎花 (女郎花科)

副 梅花躑躅 (躑躅科)

請 吾亦紅 (薔薇科)

控枝 水引草 (蓼科)

正真 秋海棠 (秋海棠科)

胴 七竈 (薔薇科)

// 秋明菊 (金鳳花科)

流枝 徳咲下野 (薔薇科)

前置 杜鵑草 (百合科)

老い 鳥兜 (金鳳花科)

花器 陶花瓶

ゆったりとそれぞれの秋草の魅力に浸るように立てた立花。季節に溶ける感覚が気持ち良い。



左斜め横から見たところ。

余計なお世話

健一郎

今僕が働いているグループホーム（認知症対応型共同生活介護）とは、共同生活を通して自立の支援を行い、充実した豊かな日々を送ってもらうことを理念とした介護施設である。食事の用意や片付け、洗濯や掃除といった日常生活に必要なことを各自で行い、どうしても行えない場合に職員の補助が入る。

しかし実際の生活では、利用者さんが何かを自分でやろうとすると先回りして職員のサポートが入ってしまう。こんなにつまらないことは無いだろう。やつてくれることが本人の自立を奪っている。そこには自己肯定感や達成感を得られる余地はない。認知症の症状が出たことによって行動が制限され、挑戦することも止められて、何も自分でできないことによって自尊心が大きく傷つくこととなる。

大きな台風が近づいた日

だった。利用者さんが、「そろそろ帰ります。」と言って席を立つた。なぜここに居るのか分からず早く家に帰りたいのだ。いつもなら職員は動揺するのだが、台風や大雨の日は違う。「外を見てください！今日は大変ですよ。よかつたらご飯を食べて泊まっていってください！」と上手に誘導することが出来る。その後利用者さんは「いいの？ありがとうございます。」と礼を述べる。定型化されたこのやりとりについてから違和感を覚えた。にこやかに台風の情報を伝える職員を見てみると、どうしても帰りがたかったが帰ることができない利用者との温度差に疑問を抱いてしまう。

僕が働くグループホームではリスクというリスクは全て取り除かれ安全だ。しかし、職員の仕事は施設内での素人仕事の家事代行と転倒や怪我がないよう安全に何もなく1日を積み重ねることではない。自立の支援を行い、豊かな日々を送ってもらう事である。お互いが認め合い、共同で生活

をする関係が望ましい。

人はそれぞれがそれぞれの形で自立をしている。僕は家では伯母に食事をこきえてもらっているが、その食材は運ばれてきたものでそれは畑から・・・というように、自立は支えあつてこそ可能である。

認知症ケアは、お花を生けるのと似ている。僕がどうすればその対象が良い顔をするかを楽しんでいる。できるだけ、自分が良いと思う思い込みから離れ、その対象がどんな状態であるようにするにはどうすればいいか、そのことに集中するようにしている。その際に予測を超える反応が本物に感じられて、人が植物がより好きになる。といったことをどこで何をしていても感じるようになってきている。器がどう思っているかもその一つである。花をいけた器が、料理を盛った器が良い表情を見せてくれると嬉しい。

守ってあげるといふ名目の

もと、人のやることを先回りしてしまうのはその人を信じていないことの裏返しである。それは相手にとって必要な支えでは無く、余計なお世話でしかない。人は誰でも生き生きと生きたいのに、まわりの環境がそうさせないことが多い。生き生きと生きるには互いの信頼が欠かせない。信頼し合う環境でこそ、生き生きとできると信じている。

管理は安心感を与えるが、そこでの生活は無機質で、守っている側のみいい気持ちでいるのでむしろその行動はエスカレートする。守る気持ちは時として対象の力を奪うことになる。

人は個人の単位でさまざまな障害を抱え、それぞれに支えを必要としている。あるときはお世話をし、あるときはお世話になっている。お互いが生き生きと生きるには、生きる力を奪う「余計なお世話」ではなくて、生きる力を応援する者でありたい。



檀まゆみと菊の盛花

△ 6 頁の花▽ 健一郎

花材 檀にしぎ（錦木科）

菊 4 種（菊科）

竜胆りんどう（竜胆科）

花器 陶水盤

菊ほど盛花が適しているお花があるだろうか。盛花だと菊の良いところを余す事なく味わうことができる。

糸菊のサラリとした葉も綺麗だが、一輪菊のようなハリと厚みのある葉も好きだ。盛花だと一輪菊の品を醸す葉が美しく見せられる。

立派な檀の葉の隙間から実が顔を覗かせる。





冬芽を楽しむ

△7頁の花▽ 健一郎

花型 生花 二種挿し

花材 水木（水木科）

菊（菊科）

花器 白竹竹筒

葉と花を落とした枝に花芽が付いている状態。冷たい色のバック紙を使用し、自分の感じている雰囲気になんかは近いものを表すことができたと思っている。お花屋さんでは「まつ毛」と呼ばれていた菊。根締めになると安心する。



桑原健一郎教室 いけばな展

桑原健一郎 立花
アララギ 梅擬 檜
躑躅
銅立花瓶



『花の息吹』 健一郎

家元の「やってみなはれ」の一言から端を発し、今年3月の流展からの弾みもあり、社中展が気がついたら終わっていた。あつという間の3日間だった。

花と人が心地よさそうに過ごすこの空間は特別なものだった。自分が日頃から考えている事が姿として現れたようだった。鹿王院の場、藤井隆也氏の屏風襖絵、お花、お弟子さん、見てくださる方が生き生きとした空間を目指し拵えた。当日の生け込みは自分のお花を立て終えるとお弟子さんの構想を聞き、安心して任す。することがなくなった僕はお庭を見てコーヒーを飲んでた。皆の途中経過を見て回るのは楽しかった。普段の稽

古と違う点は特別なお花と特別な場所であること。皆、それぞれ空間の中にあるお花を見つめていたのが印象的だった。多少の課題は見つかったが、概ね満足している。「みんなそれぞれの個性を生かし力を合わせて手作りする感じがとても好きです。」とお弟子さんからあったひとことは僕のお気に入りである。

この花会が成り立つにあたり、それぞれの方が目を輝かせ、尽力下さった。その場の物から人まで在ることに不思議な気持ちで一杯だ。

ありがとうございました。

特設サイト ↓



2022年(令和4年)9月22日 木曜日

「花の息吹」生き生き
華道桑原専慶流
右京で次期家元 初いけばな展

華道桑原専慶流(京都市中京区)の次期家元、指導する門人とともに、「花の息吹」の初めのいけばな展をテーマに約20名が23、24日、京都府京都市の皇土院で開かれ、桑原さんは、同流の次期家元として、大活躍。

23日は公開生け込みで、花を生ける姿も披露する。いけばな展は無料だが、皇土院の拝観料が必要。(栗山幸子)

生き生きとした花の姿を求めて、いけばなに向き合う桑原さん(京都市中京区・桑原専慶流家元)

手書きのいけばな展などに出品してきたが、自身が主催するのは今回が初めて。同流に伝わる伝統的な立花や花、現代的な盛花など、それぞれの植物の個性を表現する。

桑原さんは「お花が気持ちよく生き生きと生きている姿を見たい。温かみを感じてもらえる作品を生きたい」と話している。

23日は公開生け込みで、花を生ける姿も披露する。いけばな展は無料だが、皇土院の拝観料が必要。(栗山幸子)

烏瓜 からすうり

△12頁の花▽ 健一郎

花材 烏瓜の実（瓜科）

きんぎょのうぜんかずら
楸（凌霄花科）

花器 陶花瓶

山に向かう道中や、あまりにも立派な烏瓜だと車を途中で止め見に行く。葉は乾燥に弱く、すぐに枯れてしまう。

私自身、花を生けるときに園芸化された花も好きだが、できるだけまだ山の香りが残っている植物を相手にしている方が合っている気がする。その際に強い高揚感や植物と共にある感覚を強く感じる。自分でも不思議な気がしている。

家元稽古のお弟子さんから頂いたものを分けてもらった。絡からまりやすいはずの葉や蔓がとても綺麗にとられ、丁寧に包まれている。烏瓜も驚きだろう。もう一度絡めさすという奇妙な体験をすることができた。お花を生けることの妙な感覚が久しく思い起こされた。お気に入りの楸きんぎょに絡めさせると、烏瓜を生かすことができた。先まで綺麗に包まれていた葉を味わいきった。花を生けることはその花を深く味わうことである。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2022 年
12 月号
No. 714

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



蝦夷松の立花

△表紙の花▽

花型 直真立花

花材 蝦夷松（松科）

蝦夷竜胆（竜胆科）

蔓梅擬（錦木科）

椿（松科）

檜（檜科）

鎌柄（薔薇科）

乱れ菊2種（菊科）

花器 陶花器（清水六兵衛作）

日本いけばな芸術展出品作

上野淳泉 桑原健一郎
山本慶智 大野慶友
杉浦慶弥

最高のお花を最高の器で最高の人達と生け込み。五人席の内の1人として立花を立てました。蝦夷松を主に蝦夷竜胆が顔をのぞかせ、様々な花が顔をのぞかせる。毎朝の水替え、手直しも楽しく良い状態をご覧頂けた。この立花が出来上がった時、下山をした時の満足感に近いものを感じた。気持ちいい山歩きだった。

健一郎



柎

△5頁の花▽ 健一郎

花型 生花 草型 副流し

花材 柎（木犀科）

花器 陶花瓶

ひーいらぎ飾ろう、ふあらららーと12月になるとこのメロディーが街を包み込み、クリスマス色になった。このDeck the Hallsはウエールズの民謡である。去年の冬2人でリトミック*を受講して以来この音楽が一年を通して頭から離れなくなつた。季節関係なく頭で流れ2人で口ずさむ。民謡独特の中毒性とリトミックの楽しさが合間つてのことだろう。キリスト誕生の数百年前、ケルトの文化ではセイヨウヒイラギを死と再生のシンボルとして崇拜されており、意味合いは変われどもゲルマン人においてもキリスト教においても特別な常緑樹である。日本においても特別な木で古くから柎の鋭い棘は邪気を払うとされ庭に好まれて育てられており、節分ではお馴染みの樹木である。年を取ると葉は丸くなるらしく家の柎はそれであったのだが先祖返りをしており、年々棘が増えてきている。



※リトミックⅡ伴奏にあわせて楽器を演奏したり体を動かししたりして、潜在的な基礎能力の発達を促す音楽教育法。

家の庭の柊が咲くと、僕と妻は喜ぶ。2人にとってなんだか特別な木であるようだ。枝振り、艶のある葉、花の甘い香り、魅力で溢れている。妻と愛でる好きな木のうちの一つである。作例はたまたま花を付けた柊をお花屋さんで見かけたので求めた。取り合わせや様式では迷わず、生花を選じた。一種で堂々とした立ち枝と勢いのある横枝。それぞれを味わい、その魅力を引き出そうとした。良い季節の花である。

なぜ人は花を見て落ちてくのか

健一郎

華道家らしい花展とイベントで目まぐるしい秋だった。秋のお花を花屋で見ても展覧会やデモンストレーションで生けるのは気持ちが良い。その裏で日は一日づつ過ぎ、いつの間にか秋を感じる前に終わってしまうかもしれないという焦燥感と過ぎた秋でもあった。その時の自分の願いは御所を散歩したい、ただそれだけだった。家が近いという理由だけで、特に御所である必要は無いのだが、秋を感じられる場所、季節、自然に身を投げたいと言う思いは日に日に募る。

花をいけるだけでは満たされていない。自分は、自然に身を投げ、その余韻のようなものなのだろうか。自然の場にいずとも草木といられるのは。切った方がその花とよく向き合える。それは己の未熟さもあってだろう。自然の中から帰ってきて初めて自宅で花を生けられる気がする。

目に見えるところ以外でも人工的な空間は驚くほどの勢いで増えている。SEの書き出す未来は幾何学的に合理的に設計された超人工的な空間を思い浮かべる。そしてそれは今は実現しそうにも見える。

SEの世界のような企業はいくつか思い浮かぶが、アメリカのAmazonという会社が植物趣味の建物を作ろうとしているらしい。Amazonは最先端のAIで最適化し、未来を予測する会社でその判断が、短期的には結果を得ることができて20年後の正解であるかは分からないらしく、最終的な決定はCEOの感覚であるようだ。予測出来ないことが日常的に起こる。そして少しでも正確な答えが出せるよう精度を上げるため、Amazonはバイオフィリアの建物を作ろうとし今注目を集めている。バイオフィリアとは、人間は本能的に自然とのつながりを求めるという概念で、心身の状態を良い状態にするためには人との状態もだが、自然との関わりが必要不可欠であると言

う考え方である。絵画史において風景画は、身の周りから風景がなくなつてからおこつた。人工物で溢れ自然の物がなくなつた場所において自然が求められるというのは自然な流れだと感じる。

IT、AI化に進むも、つまるところは自分の感覚である。それを研ぎ澄まさせるためにバイオフィリアの効果が期待されている。経営をする人の中にもビジネスマンの人の中にも一部の人は木の枝、灯台躰とうたいづみなどを飾る人がいる。そしてその中でも最近では観葉植物に注目が集まっているらしい。在宅での仕事や家にいる時間が長くなったことが起因しているとのこと。

豊かな自分があつてこそ他のことができるのだという。ビルや自動車道の街路樹といったグリーンではなく、四季と人生のうつろいを感じさせる自然の設計を求める流れになつていくのだろうか。植物を楽しむ人が増えるのは喜ばしいことである。

人がいまのビルに囲まれて生活していた時間より、緑の中で

生活していた時間の方が長い。建物を創る前までは、緑の中が安全で敵がいなかったためである。そのため落ち着くのだろうか。

なぜ人は花を見て落ちてくのか。自分なりに感じたことをつらつらと書いていく。

10万年前の墓穴の一つからムスカリであろう花粉が見つかった。ネアンデルタール人。人間の生命と花が初めて結び付けられた。花と人間の魂、靈魂との関係を示したものとして有名であるが、このときには花に対して特別な気持ちを持つていたと捉えて良さそうだ。それより以前のことにについてよく考える。

まず人以前の話から考える。木の実を予兆させるものとしての花があつたのではないかと考えている。

猿は食虫類から進化してきた。モグラやヒミズの仲間、蟻とかミミズを食べていた。猿の祖先は虫食ひ。サルサルの祖先は森の中へ虫を求めて入つてい

き、虫食ひの生活をしていた。虫食ひも一括りにはできない。逃げ足の早い甲虫や蛾がを食べる猿、幼虫を捕まえるのが得意な猿に別れた。そして強い種が幼虫を食べられる下層部を占拠した。追いやられた甲虫を食べる猿はやがて、果物を食べるようになり、さらに追いやられた猿は葉っぱを食べることになった。葉は果物の2倍のタンパク質を含有している。よつてオランウータンや、ニホンザルのように大型化し、肉を食べるヒトとなった。負けるが勝ちとはこのことであろうか。生存競争に負け、新しい食生を探し続けた結果である。負けて果物を食べる種類の身体が大きくなつていった。

そして果物や葉を食べる種類は頭を使うようになった。動くものに本能的に反射で捕まえて虫を食べる種に比べ、どこにどんな木があり、どの季節にその実があるのか。その実はいつで食めるのか。どうやら花の後に実ができるらしいと発見した種はそうでない種に比べ有利だったに違いない。その頃から、花の

状態や葉の状態、植物に強い関心を持つていたのだろうと推測している。記憶力、認知能力が上昇したのだろうか。

よくお弟子さんや、いけばな体験をしている人はお稽古のお花に対して「美味しそう。食べられますか？」と実物はもちろん花に対しても多くの質問がある。葉に対してはまたない。赤ちゃんや小動物に対して、食べてしまいたいくらい可愛い。というのも綺麗なものに對して抱く気持ちという意味では何か関係がありそうだ。理屈なしに花と向き合う、没頭した大人や子供と話している時間は豊かで多くの発見がある。

鳥類も虫や、果実が主で葉っぱを食べるものは極めて少ない。猿はライバルが多く、葉っぱを食べるしかなかった。だが植物は葉を食べられる想定をしていなかったで、食べられないようにするために毒のあるものが多い。そこで猿は恐る恐るつまみ食いをする。一つの毒を集中させない毒の分散である。マハレというタンザニアのチン

パンジーは、200種くらいの食物メニューを持つている。日本猿であつてもだいたい100種は食べるそうだ。我々も色々と食べているが、種類数では到底敵わないほどである。猿は毒のものを見つけると、学習し、それを子供に伝えるのだが、私はそれを文化の芽生えであると考えている。

それぞれの場でそれぞれの種の生活が少しずつ発展し今の自分の生活があるという認識を持つている。虫を食べていた頃と比べて自分の今の生活が優れているのかと問われれば、不思議とそうでもない。

夕食後妻の菜月と部屋で音楽を流し聴いているのだが、最近録音された自然の音を聞いている。なんて滑稽なことだと自分では思っているのだが、やめられない。虚だとはわかっていても心地がいい。読書や作業が捗る。雨の日は何もかけずに雨の音を2人で聞くのが楽しみである。クラシックは荘厳で落ち着いた感じが、音楽を聴く事が目的の場合は最高である。ジャズ

は心地いい音が会話に弾みをつける。聞こえていても意識せず、そつとそばにある音を最近好んでいる。菜月と昨日も鴨川を歩いてきた。他愛もない話をしながら空気を吸う時間がかけがえなく心地良い。結局なぜ落ち着くかは、分からない。

新世代いけばな展

桑原健一郎（写真①）

花材 檜 笹 竜胆

大文字草 泡黄菊菊

花器 陶大水盤

（ザールバーク作）



①

新世代いけばな展 11/4～6 立誠ガーデン・ヒューリック京都



③

いけばなインターナショナル神戸 11月例会 11/11 神戸倶楽部

いけばな

デモンストレーション

桑原健一郎（写真③）

5作いけ、最後は観覧の方達にいけばな体験をしていただき、それぞれを屏風に掛けてその時の出会いを楽しんだ。

健一郎



白玉椿の生花

△6頁の花▽ 健一郎

花型 行型

花材 白玉椿（椿科）

花器 陶花器

11月にテキストを創刊から今までもう一度読み直した。白玉椿は曾祖父のお気に入りの花だったそうで、それは文章、写真から十分に伝わる。白玉椿の品や、奥深さに魅了されていたのだと想っている。そして、曾祖父の白玉椿の生花は他の生花と比べても特別な雰囲気を感じているように感じる。

私も白玉椿の生花を生けて写真に撮ってもらった。

孫である私の母は、そんな祖父が椿を生ける時のモノマネをよくしていたらしく、40年ぶりに私にもその姿を見せてくれた。椿を撓めるときに唇を尖らせるらしい。そんな昔話をしながら、再び私は母親と一緒に白玉椿の生花を生けて楽しんでいた。先祖から脈々と受け継がれる伝統とも言えるバトンの一部を預かった気がしている。焦らずゆっくりとお花を味わっていき



柎南天桐の立花

△7頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花のきしん

花材 白玉椿（椿科）

若松（松科）

寒桜（桜科）

柎南天（目木科）

伊吹（檜科）

寒桜（薔薇科）

肥後菊（菊科）

花器 陶花器

流祖の立花の中には「古人も挿しもらしたる花形」として新たに立てた挑戦的なものがいくつかある。「南天桐」もその一つだ。そこから着想を得ているが、自分なりに草木の赴くまま立ててみた。

他の役枝に柎南天を配してもとは思うがなかなか請などにあうものはない。

常緑の植物中心にとりあわせ、柎南天の葉の色を生かそうとした。





良い季節

健一郎

花型 草型 留流し

花材 寒桜 (薔薇科)

数椿 (椿科)

花器 銅薄端

季節を生けること、味わうことが一番の贅沢であると思っている。出産を目前に妻は毎日御所を最低一万歩以上歩いた。私がお供することもしばしばあった。「あそこめっちゃ赤い!」「あそこめっちゃ黄色い!」と楓や紅葉の葉を指して歩いていた。銀杏の太木は少しづつ色を濃くしていき、ゆっくりと葉を落としていく。一週間以上も通い詰めるとその様子が良くわかる。

落ち葉を蹴飛ばしながら、寝転びながら、木にぶら下がり、登りながら歩いていく。一つ一つを味わいながら歩いていく。妻はそれを笑いながら写真に収めたり、落ち葉を集めてきてくれる。26歳児の世話は手がかかるそうである。遊び疲れ帰路につくと、一本の桜と出会った。静かに強く咲いていた。足を止め寝転ぶ。これでしばらくは二人きりでの行楽は休止になる。これからは終介と三人で季節との豊かな出会いを味わっていききたい。



いちご狩り

△ 2 頁の花 V 健一郎

花材 冬苺（薔薇科）

雪柳（薔薇科）

花器 備前焼花器

妻の菜月とよくいちご狩りに出かけた。3 年前にはその思い出を生けた花遊びをした事もあった。幼い頃よりいちごが好きで、親になっても変わらず、いまだに 2 人で苺を取り合っている。

山に出かけると菜月はよく、蛇苺、木苺、冬苺などを見つけて。僕が肩車してなんともかき取ることもあった。

冬苺は他の苺と比較して早く結実する。少し早くに咲いた雪柳と取り合わせた。見て楽しみ、食べて、生けて楽しむ。





ろうばい
蠟梅の季節 健一郎

花材 蠟梅(蠟梅科)

レリア(蘭科)

菜の花(油菜科)

花器 陶花瓶

家元の取り合わせたお花をい
けさせてもらった。自分ではで
きない取り合わせだが、気
に入っている。苦心したが見せ
たいところを見せることができ
た。蠟梅の実の殻が珍しく、落
ちても枝に引っ掛け飾って
いた。

よく僕が見にくい、早咲きの
梅と同じくらいの季節に、蠟梅
は御所で咲いている。寝転がっ
て澄んだ冬の空と香りと色を楽し
む。数年前に、琵琶湖で見た
大きな蠟梅が忘れられない。空
と湖によく映り堂々としてい
た。妻の家族と出かけた時だっ
た。義兄の操縦するドローンを
目がけて走った。息が切れると
大きく息を吸う。これほど蠟梅
を吸った日もなかっただろう。
いい香りだ。





水際除の立花

みずぎわのき
△7頁の花▽ 健一郎

花型 除真立花

「水際除」

花材 松（松科）

彼岸桜（薔薇科）

金葉小手毬（薔薇科）

伊吹（檜科）

児手柏（檜科）

紫花菜（油菜科）

小菊（菊科）

鳴子百合（百合科）

花器 陶花瓶

遠景に春の息吹を感じる立花になった。胴にひよこつと除く芽吹きも可愛い。立花でなくとも表現はできるが、昔からこのように草木を味わい、季節を思っていたと考えると感慨深いものである。そうありがたいものだ。



自分と自分

健一郎

12月7日午前1時59分にそれはそれは元気な産声が。

このご時世に幸運にも奇跡の瞬間に立ち会う事ができた。夫婦共に様々な治療を受け、産まれた待望の我が子である。特に妻と終介は本当によく頑張ってくれた。

子供が産まれるとグループホームでは意識していた、自分が環境であるという認識を家庭内でも強く持つようになった。産前は全く気にもならなかった事を問題だと捉えるようになったのが変化である。

私は最大限、自分自身を大切にし、可愛がり、甘やかしてきたつもりだったのだが、それ以上の事をしたいと思える人が現れた。十分に自分が満たされていたと思っていたのだがまだ先に続く道はあったのだと驚いている。不思議である。

人から見られた自分を想像する事はあったが、子供が産まれると明確に見せたい自分でもあ

る事に気がついた。そしてそれは、なりたいた自分でもあった。つまり、僕はこのままの僕でいることが大切だということだ。

日本では、不思議な事に自分を指す言葉が相手を指すことにもなる事がある。自分という言葉や、僕は、私という言葉も相手にも自分にも使うものの一例である。英語であれば「You」ではつきりと別れており相手のことを「I」と呼ぶ人はいない。人をおもてなしの文化とも関わっているのかなと想像も膨らむ。自分がされて嬉しい事を人にしなさいという教育もよく聞くが関係がありそう

色にしてもそういった曖昧な領域があるようだ。具体例としては、信号機の青色は、緑色だが、法律でも青色と表記されているらしい。青菜も葉っぱは緑色なのにも関わらず青色という。赤黒白以外の色は古代から平安時代頃まで「あお」色と総称されていたそうである。ある仮説によると、固定していない変化するあらゆる色はあお色だったらしい。この日本語の、日本の風土のあやふやさが僕は

好きだ。自分も相手も、自然も関係なく全てが溶けたようにあやふやな世界が。心地がよさそうである。

漢字、ひらがな、カタカナを使い、ローマ字を使い、年末になるとお墓参り、クリスマス、除夜の鐘、年が明けると初詣お年玉をこなす日本人が否定的に捉えられる事もあるが人と人の繋がりが強くなり、インターネットで世界が狭くなった今、私個人の感想としては悪い気はしていない。それぞれの文化を勝手な解釈で生活の中に落とし込み日々を楽しんでいるように見える。

お花に触れたことのない人が、お花に触れ、お花を家に持つて帰ってもらえるイベントの機会をいただくことがある。お花でなくとも、お茶でも和歌もいい。その国の季節と風土と共に育まれ、時代と共に変化し続けながら残り続けるものに関心がある。特に衣食住は見えて面白。季節と共にあり、様々な工夫や遊びがそこにはある。その断片を少しでも人に伝えていこううちに、将来は季節と共にあるような人達と共に過ごす事が

できたら良いなと夢を見ている。一日を味わいながら丁寧に生きていくことが時代を追うことに難しくなる気がしているが、それでは寂しい気がする。

「忘己利他^{もうこりた}」とは、自分を忘れて他人のためにつくすことをいう。「己を忘れて他を利するは、慈悲の究極なり」と最澄は述べている。海の大きさを身をもつて体感できるかと言われれば難しいのと似ている気がする。それだけの精神を是非とも身につけたいのだが、こう言っている間はまだその道は遠く、険しそうである。己を無くす事は他と溶けるということでは無いだろうか。私自身が追求したく思っている、花と溶けるというテーマとも密接に関わっている。

己を忘れるほど自分を満たせば、他を利する心が芽生えるのではないだろうか。自分が良い状態でいなければその環境を、人を、花を生かすことは到底できない。これからも自分を整え、大切にしながら生きていき、自分がその環境、季節に抱かれながら在り続け、その実体験を人に伝えたく思っている。そこに自分と

環境の区切りは無い。

自分が在ると言う事は曖昧で不確かなものなのかもしれない。



レモンも一緒に健一郎先生の立花を拝見。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023 年
3 月号
No. 717

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





陽光桜の生花

△ 6 頁の花 ∇ 健一郎

陽光桜（薔薇科）
ようこうざくら

天女文銅花瓶

生花 草型 副流し

お気に入りの天女の器に桜の生花を生けた。毎年必ず咲いてきた桜だが、今年も咲くのかと心配になる時がある。2月の初め頃から気にするようになる。よつぼのことが無ければそうはならないのだがそんな不安を時々抱く。咲いた時は毎年心が動く。特別なお花である。

終介が家に来てくれた日から睡眠環境が変わったからか、最近、夢をよくみるようになった。今の所毎度お花が登場するのだが、へんてこな夢ばかりである。一説によると夢はモノクロであるらしいが、花が夢に登場すると、どうも夢はカラーなのではないのだろうかと思ってしまう。断片しか思い出せないことが多いが、大概は気分の良い夢で目が覚める。

今年も無事綺麗に桜が咲いてくれた。やれやれである。また同じ心配を春前にはするのだろうか。

声と言葉のあいだ

健一郎

柊介はよく泣き、少しずつ笑い、微妙な顔もする。よく話すようになった。というよりは、声を自分の感情に合わせて出そうとしているようにみえる。柊介の抽象度の高い声を大人たちは、好き勝手様々に言葉で解釈していく。言葉以外のものを言葉で解釈する。そんな様子を見るのは、美術鑑賞に近いものを感じるながら聞いて楽しんでいる。

柊介も声を単語や意味の区切りを探しながら文節化し、自分が感じた感情をより正確に伝えようとする段階に入るのだろうか。この文節こそ、人が文化を形成したきつかけではないだろうかと言われている。柊介が言葉を覚える場に立ち会うことができるのは、大変光栄なことであるとともに、責任を感じるが、つい尊さから感じる可愛らしさと好奇心が勝って微笑んでしまう。

感情を言葉に置き換え直して

言葉を話すことになる。何か物事を感じることが無ければ言葉を使つて話す必要も、絵を描く必要もない。言葉はあくまで伝えるための手段としての一つの道具である。まず、私は物事に触れ感じとる事を大切にしている。そこに在る心地よさは心地よいものだ。感じとるセンサーの感受の度合いが言葉の選びや絵に影響を与えるわけだ。柊介には言葉のない世界で感じとる力を磨いて欲しく思っている。自身や外界を言葉を用いず、感じとることができるのはこの時期の特権である。

人が文化を形成するきつかけとなった言語。それを柊介に伝える事は、世話というよりは教育に分類されるだろう。教育の始まりを感じている。言葉を話すことに初めは感情と言葉に大きなズレが生じるだろう。そして言葉を上手に使うと自分の気持ちと一致する割合が高くなる。言葉に精通している人、または感情が豊かである人ほど、正確に伝えられないもどかしさからなのか、苦しうに見える。

そのもどかしさを認めた人の言葉からは、重みと説得力を感じている。そこから言葉の楽しさは始まるのだろう。

実際に、毎月文章として考えていることをまとめているが、溢れ出てくるだけで楽しさはない。納得の上、自信満々で掲載した覚えは一度もない。それに引き換え、自分が関わったいけばなに関してはほとんど毎度自分が納得いく物である。心底自分の花が好きであり、見ていられる。思っていることが現れ出ているのだろうか。自分だけではなく植物と共に在る心強さからか。いけばなが自分に合っている気がしている。

幼少期の頃ぐらいから、祖父と考える時間が好きだった。今は考えることも好きだが感じることに熱中している。そして今、柊介も多くを感じている。柊介と考えることができる日が来るのを楽しみにしている。



黄梅と松

健一郎

黄梅（木犀科）
おうばい もくしき
 老松（松科）
おいまつ まつ

陶水盤（近藤豊作）

引き締まった格好の良い松。なかなかお目にかかることはない。どつしりと安定した松が勢いのある黄梅の枝を、一つのいけばなとして成り立たせているようにも見える。生けてしばらくしてからみると今の家元と僕の関係に似てるかもと感じた。この黄梅ぐらい動き回りたいものだ。

自分のしたいことをゆつくりと積み重ねていく。黄梅は撮影の後ゆつくりと蕾を全て咲かせ、松はいつまでも艶を保ち、美しく在った。





春の景色

△ 6 頁の花 V 健一郎

虫狩 (忍冬科・連福草科)
むしかり すいかずら れんぷくそう

陽光桜 (薔薇科)
ようこうざくら

鳴子百合 (百合科)
なるこゆり

陶花器

どこだったか、山を歩いてい
ると地面に花びらが落ちてい
る。何かと探すが、あたり
を見回しても白い花を咲かす花
は見当たらない。ふと上を見上
げると虫狩だ。杜若を求めて滋
賀の平池を菜月と歩いていた時
にもまだ花を多く残していた。
写真のようなこんな景色があ
るのだろうか。見たことはない
がどこかにありそうな景色であ
る。桜が終わると同時に新緑に
目がいくようになり、虫狩も咲
く。そして杜若も満開を迎える。
少しづつではあるが足と体をも
って味わっている。身をもつ
て体験するには、頭を空っぽに
するのに鍛錬が必要だが、今は
良い師匠が側にいる。



とびきりの贅沢

健一郎

息子の柊助と同じように寝転がり、天井を眺め母親を目で追いかけてみる。床の下で動く換気扇の音がよく聞こえる。部屋で生活している分には気にならない音だと、取り付けた業者さんは言っていたが最近になって気になるようになった。

柊介という感じるのが自分たちの目に見えるものや、音を始めとする情報量の多さである。香水もしなくなつた。久々に嗅いでみると、なんときつい匂いだったんだらうと思う。慣れは恐ろしい。匂いのほのかな植物の香りに気がつくようになった。テレビを消せば、お肉を焼く音が聞こえる。僕が不快に思うものを遠ざけているのではない。庭の沈丁花もいい香りがするが、匂いの強さから柊介と嗅ぐ際は、距離を取り楽しんでる。

こどものいけばなでは、お弟子さんたちが生けたお花を、いけた人の目線で拝見している。子供に限らずいけられた花はそうやって見るのが当然だらう。そこにこそ、その人の世界が広

がっている。グループホームに勤めてからケアに磨きをかけている中で、その人のことを少しでも知ろうとした時に自然と得た気づきだ。あたりまえの事だが大切にしたいことの一つである。福寿草、バイカオウレンなど背が低い花はできるだけ屈んで楽しむ。人のために咲いている花ではないからだ。

柊介に夢中な妻は毎日、柊介に色々なものを紹介している。ここ最近では、近辺の桜を見回している。(今文章を書いている途中に妻から呼ばれて自室に戻ると初めての寝返りをした柊介がいた。)僕の休みの日は、週に一、二度は御所か植物園でピクニックをしている。たくさん食べ、いいものを沢山見て育つてほしいが、ゆつくりと育つていつて欲しい。ゆつくりとは、段階的にという意味である。

子供が認識しやすい色は原色に近い色だとよく言われている。なのでまずは、色の濃いおもちゃを買い与えると良いとよく指導を受ける。本人からすればどういう気持ちなのだろうかは分からないが、子供が反応を示し喜んでいるのは大人である。日本の風土にあった色から

徐々に慣れていけばなと個人的に思っている。部屋には桜、椿、雪柳、桃等、稽古で残つたものを柊介に見えるように飾っている。蘭や、アマリスなどは本棚など目に届きにくい場所に飾っている。

毎日歌を歌っているのだが、主に日本の季節の唱歌を歌っている。数年前から個人的にも好きで、メロディー歌詞、共に、その季節をより、楽しませてくれる。日本の風土が人に創らせたとも言えるだろう。もし機会があれば世界中で歌われている「きらきら星」の各国の物を聞いてみてほしい。それぞれに言語の特徴があり、風土を感じる。その中でもインドのものはその特徴が色濃くでている。やはり母国語がその国を感じ取るのに一番適しているだろうと考えている。私は、似たものの違いがわかる繊細さに憧れを持つていて知る前を想像しようとするが柊介の眼や態度が非常に参考になる。言葉を使うことは便利だが危うく、大雑把でしかない。

柊介が産まれて数日後、岡山に住む親戚(祖父の妹)と電話する機会に恵まれた。母子を労

い、無事を確認した後、「レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』はご存知？もしまだお読みでなかったら送ろうかしらと思っていたの。」とお勧めされた。数年前に一度だけ本屋さんで読んだが、過去を思い出しながら、領きもって読んだ。自然や、不思議さに驚嘆する感性を岡山の家で浴び、祖父には好奇心を四六時中刺激されて育つたのだからこんな恵まれたことはない。そんな事を伝えると、要件は済んだのか、直ぐに終話。それが母子の健康の次に心配していた事だったのでうか。

あまり考えたくはないが、数十年もすれば京都だけでなく街は風変わりしているだろう。どのように変わるかは知らないが、風土を感じにくくなっていると思われる。感じる力を磨かなければ気がつくことさえもできないだろう。

身体を作る食事、物事の豊かさを感じ取れる素地に関しては手を抜きたくない。そして妻も思ってくれている。ただの自分たちの考えの押し付けではあるが、良くあって欲しいとの願いからである。

「僕はね、とびきりの贅沢をさせて健ちゃんを育てるようにしているんです。」と私の祖父が他流の家元に話していたそう。で、数年前にその話を伺った。ふと思ひ返してみると、心あたりしかない。他流の家元がどんな子に僕が育つか肝を冷やしたと仰っていた。とびきりの贅沢で育つた祖父からのとびきりの影響を受け育つた私。今考え得るとびきりの贅沢を息子にしようとしている。



府立堂本印象美術館
第4回 野外いけばな展

ー私の印象ー 健一郎

堂本印象の作品から圧倒的本物感を感じた。表現方法が多様であるのに、強い説得力を持つているのは、表現者としての感じ取る力が卓越していたからではないだろうか。

今回、大好きな蠟梅の味わい方を一から見直した。お花屋さんの協力で根っこを入手。普段土から上しか見る事がない僕か



らすると驚きと愛おしさが湧いた。根を傷つけないよう職人さんが手で掘るそうだ。選んだ器は蠟梅の幹に見立てて。

蠟梅の下で寝転がっているのは気持ちがいい。お花は地面に向かって咲くので、シャワーを浴びるかのような形になる。野外展示なので、日光に透けて綺麗に見える時、雨、雪と共に在れる生け花を見る事ができたのは嬉しく思った。

鑑賞方法も指定できたらなと思うたが来場者は、マスクを外

し、香りを嗅いで楽しんで頂けたのを見ると、感じている事と、感じ取ってもらえることは繋がりを持っていて、その媒介として表現がある事に改めて気づかせられた。いい表現とは、感じた事を、できるだけそのまま感じてもらう事なのかもしれない。

やはり、印象の作品をそのままを感じ取る事ができるほどに感じ取る力が発達すれば、より楽しむ事が出来るだろう。

「円環」

健一郎

個々の惑星は本来円軌道を取り公転しようとするが、他の存在によりズレが生じ楕円軌道を公転する事になる。そして他の存在無くしての存在は在り得ない。

時間と流れの記憶を表現した作品と数種の反応を試みた。互いにシリーズ（品種）の原初の姿である。それぞれが、それぞれの円環で自転と公転をしながら影響を与え合っている。



「応え合わせ」展 花：桑原健一郎 陶：詹凱婷（京都精華大学）

4組の陶芸大学院生と若手華道家との交流の応え合わせ。3/10~13 karaS。



新緑

健一郎

イボタノキ（木犀科）
芍薬2種（牡丹科）

陶花器（幾左田昌宏作）

新緑の季節の良さを味わうようになるのが比較的、遅かった。昔は植物にかぎらず、成熟したものや質、技術の高いものに強い魅力を感じていた。憧れだろう。とりわけ苔がべつとりとついた木瓜やクラシック音楽などと言ったものである。母がある若手のバンドを褒めていた。技術に優れているわけでもないが、なんとなく魅力的ではある。少し重たく聞こえるかもしれないが、命を削っているかのようなキリキリとしたものを感じた。不安定ながらも成り立っている様子から、新緑とも言える魅力を感じた。余裕のなさ、一生懸命であることがそう見させているのかもしれない。もしかすると柔らかい新緑の葉は虫に食べられまいとキリキリとしているのかもしれない。今は新緑の若さが身に染みる。季節になると街中から山を眺めいつも確認してしまう。新緑は宝である。



旬の温かさ

△ 4 頁の花▽ 健一郎

瓜膚楓 (楓科)
うりはだかえで

野萱草 (百合科)
のかんぞう

鳴子百合 (百合科)
なるこゆり

結晶釉水盤 (前田保則作)

街中では見かけないが、里山にはいくらでも生えているのを見る。地元の人からすると大した喜びではないかもしれないが、街では見かけない。そして、お花屋さんで見かけるとつい、求めたくなる、野萱草。自然の池の側には瓜膚楓は実になっていた。水を感じたく水盤で生けた。感じていた情景がバック紙でよく表されている。斑が強く入った鳴子百合がまとめている。それぞれが競い合うことなくそれぞれの良さを発揮していて気持ちよさそうだ。





華道京展 桑原健一郎・小田部慶綾 立花／藤 松 松晒木 躑躅 貝塚伊吹 著我 器：矢野款一



旬の強さ

△ 5 頁の花 ∇ 健一郎

山法師 (水木科)
やまぼうし みづき

河原撫子 3 色 (撫子科)
かわらなでしこ

陶花器 (宮下善爾作)

河原撫子の三色と山法師、器も含めて日本で生まれたものである。取り合わせたとき、生けている時は特に気がつかず考えてはいなかった。撫子の旬の季節になると赤色の撫子がお花屋さんに並ぶ。伊勢菊と同じように花びらを垂らしたように咲く伊勢撫子なんかも出てくる。華奢で綺麗な撫子が力一杯、山法師に負けまいと咲いている。好きな取り合わせに、撫子と花菖蒲がある。そうすると撫子が可愛らしく映る。写真は山法師と取り合わせたため競い合っているように見える。旬でなければ山法師に撫子が負けていただろう。器は撫子を応援しているに違いない。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023年
6月号
No. 720

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



初節句

健一郎

花菖蒲はなしょうぶ
しよんずい
祥瑞水盤あやめ
(菖蒲科)

「心を込めて生けるように。」認証式の前日に家元からお達しがあった。今の時代、人の思いを花に託す事が減ってきているのではないだろうか。少なくとも私は、このお生花も含め花と向き合い生けているつもりである。まだ、思いをの

せられるほどの余裕がないのだろう。控ひかえまでは夢中で生け、控をどうするかで一瞬手が止まった。そして控は中高の葉組で生けた。いつの日にか追い越してほしいと心から願い、葉に託した。最後の控だけではあるが、自然と心を込めることができた。夢中になると心を込める事が難しくなる。親もまだまだである。もう少し親葉を短くすれば良かったか。





檜の生花

△7頁の花▽ 健一郎

草型 留流し^{とめ}

檜（檜科）

陶水盤

空気を葉で掴むような感覚で生けたお生花。ここ一年ほどで間や空間に対しての捉え方が大きく変わってきている。花フジの一男さんが流展の私の立花をみて「次は引き算やな、でも足すのも難しいねんで。よう入ってるな。」と言葉があった。その日から空気や空間に対して興味がでた。その年の秋に鹿王院にて立てた立花の正真には何も入れないで空気をいける感覚があった。胴には檜が入っていた。そこに、枝があるわけではないが、檜の周りにはなぜか何も入れたくなくなる。檜が持つ優しく周りの空気を巻き込むようにみえるからだ。枝ぶり、空気感をより効果的に魅せられる生花の型とよく合うように感じている。





グロリオサ

×

サンスベリア

健一郎

サンスベリア (竜舌蘭科)

グロリオサ (百合科)

ガラス花器

珍しい色のグロリオサが一本あった。葉は傷んでいたが花は特別綺麗だったので、葉を取り除いて花を生けた。バック紙の薄い紫色も気に入っており、淡いピンク色をよく引きたたている。近頃サンスベリアの鉢をアパレルや本屋、焼き物屋さんで見かけることが増えてきた。観葉植物の人気にも流行があるらしく、一方でモンステラを見かける機会が減ったように感じる。グロリオサもサンスベリアもアフリカに生息している植物であるから仲は良さそうに見える。いい出逢いだった。





なんか合うな

△3頁の花▽ 健一郎

日向葵^{ひまわり}4種(菊科)

ニューサイラン2種

(ツルボラン科)

人面陶鉢(南米)

この花のとり合わせにはこのインカの器が合うなと思った。あとで調べてみるとインカ帝国とヒマワリは切っても切り離せない関係で、種を食べたり、染めや医療でも活躍し、神殿の巫女たちはヒマワリをかたどった黄金の装飾品を身につけていたらしい。そんな深い関係があるとは知らずにこの器を選んでいたので不思議だった。知識をつけすぎるとこういったことが無くなりそうな気がするが、そうならないように感覚を研ぎ澄まさせていたい。なんか合うなを大切にしてお花をいけるのは楽しく新鮮だ。





太蘭と紫陽花の株分け

△5頁の花▽ 健一郎

太蘭（蚊帳吊草科）
ふとく かやつりぐさ

紫陽花（紫陽花科）
あじさい 紫陽花

陶水盤

何本だったか忘れたが確か157本の太蘭だったと思う。3、5、7…数が増えていく。その花の良さが引き出される本数で手を止める。檜扇は5本、立派な物だと3本生けると後は触らない。数にこだわらず、多く生けることにこだわると、そのお花の良さが見えなくなってしまう。

終介を寝かしつけた後、静かに薄明かりの元、ゆつくりと2日程かけて生けた。良い趣味の時間である。それから数日後、撮影の日に合わせて紫陽花を子株に加えた。

右後ろへ下がる内添の太蘭が気に入っている。多少は撓めたがほとんど自然の弧である。水辺の情景。良い季節である。





あららぎの立花

△7頁の花▽ 健一郎

あららぎ（二位科）

檜（檜科） 躑躅（躑躅科）

陶花瓶（加藤敏雄作）

一枝の勢いを生かした立花である。新たな立花の可能性を期待した実験的な立花。花がなく、葉の色と枝ぶりに目がいく。写真で伝わらないが、実際に私が受けた印象だと、あららぎ、檜の持つ居心地のいい空気が身に染みる。あららぎは単独で出会うことが多く、たまにまなか、川の側で頻繁に見かける。立花は水をたつぷりと見せるのが良いが、今回は口の細い器に生けた。花器の色は水や空を連想させる。枝の持つ空気感をどう見せるか、試行錯誤の途中だが、いつか自分の感じているこの気持ちの形にできたらと考えている。



右横から見た奥行



6月6日はいけばなの日
京都いけばなプレゼンテーション

山法師の生花

健一郎

山法師^{やまほし}（水木科）

陶花器（近藤豊作）

この生花は山で切らせても

らった枝でいけた。高く生える、数種類の山法師の中から一番惹かれた枝に鳥の巣を「みいつけた」。鳥はすでに退居されている。近くで見ると良いものである。ほかにもカタツムリが乗っていたので紫陽花の葉の上へ。豊かな自然の中の贅沢で思い入れのある特別な生花だ。



柊介は寝返りを覚えました。
離乳食にも慣れてきました！



お盆のお生花

△ 5 頁の花 ▽ 健一郎

生花 草型 留流し

高野槇(槇科)

陶水盤

去年のお盆に合わせて手に入った高野槇をお生花にして撮影した。その後飾っておいたが、お弟子さんが「お盆で帰り損ねた方がこれでお帰りになれますね」と呟いていた。自分は衝動で生けていたのでその言葉が身に沁みた。見てもらえる環境があること、人がいることは本当

に有難いことだとも感じた。

高野山の金剛峯寺に2年前、千住博画伯の『臘図』『断崖図』を見に行った時に古木の高野槇を見て、その風格に圧倒された記憶がある。お盆用に出荷される高野槇は仏花になる際に真っ直ぐに生えたものが都合良いらしい。高野槇独特の葉が面白いが、留などの横枝を探すのは難しい。大きな枝を見つけたのでなんとか形になった。





苔躑躅とお生花

△ 6 頁の花 ∇ 健一郎

生花 二種挿し

霧島躑躅（躑躅科）

鉄線（金鳳花科）

ガラス鉢

苔躑躅はほとんど撓めることができない。どれほどの年月、どのような環境の中にいるとこうなるのだろう。この面白い枝ぶりを生かそうとお生花を選択した。お花屋さんで枝をみると、どうもお生花にはなりそうにない。格好にならなければ、魅力に感じた枝ぶりが見える投げ入れにしようと考えていた。家に持ち帰り、時間をかけてじっくりと見た。水につけたまま30分は眺めていただろう。見応えのある格好のよい躑躅だった。多少枝を捻って格好をつけてはいるものの、ほとんどそのままである。よくこんな躑躅があったものだ。鉄線を絡め、涼しげに。





一滴の滝

△7頁の花▽ 健一郎

松（松科）

鬼百合（百合科）

桔梗（桔梗科）

千手岩菲（撫子科）

石

陶水盤

松の一年を見ていると面白い。堀川通りや御所によく出かけるので少しずつの変化を楽しんでいる。見ているだけでも良いものだがやはり生けてみると、また違った味わい方ができる。今回はお花屋さんで勢いよく伸びのある若い松をもらってきた。普段見ている景色とは違うが、珍しい山野草とともに生けた。すると石の風景が浮かんだ。撮影の直前に石に一滴水を垂らした。山間に滝をみている。こんなことをしているのも良いものだ。豊かな遊びの時間である。



ある不思議

健一郎

エコーで確認していた頃は3ミリだった息子の終介が7ヶ月が経過し、6kgを超えるようになった。本当に大きくなった。

グループホームでの利用者さん達は体重の増加はあれど、ここまで大きくなることはない。私がグループホームの生活の中でかける言葉のうちに、いてくれてありがとう、生まれてきてくれてありがとう。といった類の言葉は日常的に口にしていたのだが、子供に對して、この類の気持ちをもちながら「どうやって大きくなったんや？」という言葉が口から出たのが新鮮で幸せな気持ちになった。彼に残されているであろう時間と、大きくなるであろう心身の事を考えることは、私にとって新しい体験である。

自分の子供が生まれる前に想像していたほど、子供に對して特別な気持ちを持つわけではなかったことにも驚いた。子の誕生は静かに暖かく豊かである。似かよった感覚をグループホームで人と関わりをもち、生活することで気がついた。そして、マンチエスターで植物の命について考えるきっかけがあったこ

とも、大きく影響しているだろう。子の誕生も同じように特別だと感じた。だが、大きくなる事への驚きは子育てならではだろう。

かくいう私も大きくなった人である。幼年の頃は幾度となく人に会うたびに「背伸びだね」「また大きくなったな」と声をかけられたものだが頭の中で子供が大きくなることは知っているはずなのに、当たり前のことに對してなぜ驚くのだろうと不思議に思っていた事があった。「ちっちゃなっってたまるか!」と言い返すことを隣で勧めていた祖父を思い出す。

子に恵まれてから「ある」という事に對して不思議な気持ちを持つことが増えた。物があるとはどういうことなのだろうか。絶対的な $\downarrow$ が存在するのかわかという問いが立った。調べてみると目に見えるものは様々なものが関係しあつてできているらしい。それを分解し、細かくみていくと、原子や分子といったナノサイズ(1メートルの10億分の1)あるいはそれよりも小さな世界の話になるようだ。もちろん肉眼で確認することは叶わない。

今、結論とされているものから述べると、絶対的な個といえ

るものは存在しないらしい。すべてのものが何か別のものへの対応だけで成り立っているという。電子が一切の相互作用をしていない時、その電子には物理的属性がない。位置もなければ速度もないのだ。明確な属性を持つ互いに独立した実態ではなく、他との関係においてのみ、さらには相互作用した時にはじめて属性や特徴を持つ存在となる。つまり実態とは永続的なものではなく、その場の環境によつて姿形を変える束の間の出来事なのである。全ては相互作用で実態というものがあるように見えているだけだということだ。

物事が物事に作用を及ぼす。例としては、狼が人の脅威である $\downarrow$ 人が狼を根絶させる $\downarrow$ 鹿が増える $\downarrow$ 鹿が草を食べる。 $\downarrow$ 森林が荒廃する $\downarrow$ 人が狼を再導入以上のようなことも相互作用していたんだと再認識させられるような例だ。まあ、大風が吹けば桶屋が儲かるようなものもある。多様性の上でお互いに影響を与え合いながら実在が保たれているようにみえ、関係が発生しなければそこには在ることができない。そこには、その時々

に在るといふ奇跡の瞬間がある。食べる、食べられる関係は一見、弱肉強食のヒエラルキーの

ように見える。だが、同じ生存空間を分かち合い、互いに他の種の数を整えながら、共存する関係を結び合っているのだ。結果的に一種類の生物がその場を独占するよりもはるかに多くの生物量が存在でき、より多くの種類が、物質とエネルギーの循環も促進され自然の円環が保たれるらしい。

物が存在し続けると勘違いしてしまった生物は、物が無くなった際に不思議に思う。終介は手に持っていたものがなくなるとそれを切なげに見つめて不満そうな顔をする。少し前までは目の前からおもちゃが無くなることもそのまま受け入れていた。子が大人になるのは思っているより早いのかもしれない。

お花が枯れるということを知っている人はそれを不思議に思わない。そういうものだと思っている。枯れると実がなることを知っている。人は人の一生の時間を軸に、時間について考える。切花の寿命は数日である。そこに人自身の生涯の縮図を投影し、ある事

の奇跡を確かめ、散ることを不思議だと思わなくしようとしたのではないだろうか。人が切花を楽しむようになるより遙か昔、ヒトが弱肉強食の中にいた時に感じていた、生

きている奇跡をである。自身が偶然に今、姿形としてあるように思えるだけで、無いという状態を当たり前の事として、受け止め、ある事を前提に生きるのと関係性の上で一時的に現れ出ていることを前提に生きるのでは大きな違いが出る。切花はその状態をよく表しているように思える。

切花は枯れる。来年にもう一度お花を咲かすことはない。土から切り離された状態である。私はこの状態が不思議な、一種の神秘的な状態でもあるように思う。

花を生けることは、人がヒトでいるために大きなきっかけを創ると考えている。

お釈迦さんは、この世にある形あるものは、この世に永遠に存在する唯一絶対的な存在のものではなく、あらゆる因縁によつて生まれているという事も唱えていた。

在る事は無いことにできない。無いものとして考えた時点でそれは在る。たまたまの偶然を楽しむ、そこでは良い、悪いは大きな問題ではない。日々、奇跡の瞬間を生きている。

いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023 年
9 月号
No. 723

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



水の景色

△表紙の花▽ 健一郎

さじのりとか
匙沢瀉（沢瀉科）

みずあおい
水葵（水葵科）

しまあし
縞芦（稻科）

すすだけかたきり
煤竹肩切魚籠

お弟子さんが花展で他流の水辺の景色生けを見て、「僕やったらあそこに竿投げたいですもん。とか思っちゃいます。」と言っていたのを記憶している。僕にはできない見方である。それだけ実際の景色のポイントを絞って抽出した面白い物だったのだろう。

今回水辺の景色を生けるにあたり、水盤で生きたい気持ちで

グッと堪え、魚籠での投げ入れを試みた。人と水辺のの情景である。釣りの好きな義父さんによく琵琶湖に連れて行ってもらった。慣れれば距離は近く感じるようになった。山ではなく湖の植物たちを見ることができるようになった。ボートで好きなところと連れて行ってもらいゆっくりとした時間を共に過ごしている。

オモダカは頭が重く固定が難しかったので足をつけている。銅の落としに配りをかけるとすぐにお花が止まった。オモダカのお花が小さく可愛い。



二重切りの生花

△ 6 頁の花 √ 健一郎

上溝桜の実 (薔薇科)
うわみずぎく

竜胆 (竜胆科)
りんどう

二重切竹筒

青い葉の雪柳と竜胆で二重切りに生けて飾っていたが、雪柳の葉が散り、撮影用に上溝桜を生けた。印象がまるで変わり、竜胆の見え方と季節が変わった。選ぶことができたなら煤竹の二重切りに生けたいところだが家にはない。ないものを考えるようになったことも一つの成長ではないかと思っている。だが白竹の映りも軽やかで、上溝桜の実が熟す時期の早さを考えると、これで良いのではないかと納得している。



乱れ桔梗立花

△ 7 頁の花 √ 健一郎



桔梗2種（桔梗科）
 仙翁（撫子科）
 沼虎の尾（桜草科）
 萩（豆科） 流木

青磁花瓶（清水卯一作）

仙翁とともに、桔梗の蕾、花、実、茎ぶりを見て好きなものを花フジの山で切らせてもらった。生えているところを知っていると生ける時にも影響が出る。少し前までなら役枝のイメージを思い描いてお花を選んでいたが、このところは面白いものをすぐって頂いている。当初は花瓶を前にすると困ったが、そのお花に惚れ、観察していればいつの間にかどうにかなるものなんだと思うようになった。

正真の沼虎の尾は花フジのとし子さんが福井県から持って帰ってきたもので、良い景色になりそうだったのでそのままだいた。



ヒトと人

健一郎

終介が産まれてからずっとそばにいます。オスとして些か奇妙な行動をしている事は認識してしており、むず痒さもある。頭では外へ出て狩りにでも出かけなければいけないとは考えているが、育児休暇という制度を使っている。今も終介の側にいる事ができている。

共に過ごす時間は、なんと幸せな事か。妻に怒られながらではあるが、そばにいる事を許してもらっている。妻は母として自立し、以前よりも逞しさに拍車がかかり、安心できる。すくすくと育つ時に気をつけたいと思っているのが環境である。言葉、規則、慣例から程遠いところでゆつくりとしてから、自分のペースで人間の生活を楽しんでもらいたい。これが僕の考える、とびきりの贅沢だ。

ここ最近、霊長類としてのヒトの機能的な事柄に興味がある。終介を迎えるにあたり、調べ物は一切していない。反応をそのまま楽しんだ。今は新生児期が過ぎたのでこの期について調べてみるとおもしろかった。新生児には様々な原始反射が見られる。例えば産まれてまもなく

い赤ちゃんも哺乳反射というものをもっている。赤ちゃんの口に入ってきたものを吸う反射能力だ。母乳を吸うのに大切な反射だ。出産後すぐに授乳していたのには驚いた。そして、掌に物が触れると握りしめる、掌握反応もその名残の一つである。今の赤ちゃんには必要でなく、一般的に3〜4ヶ月で自然に消滅するらしい。体毛があつた頃に必要だった反射の名残で、赤ちゃんは親の体毛につかまるためという説を見て納得した。

毛は森の中で体温を保つのに役立ち、暑い時は熱から身を守った。人は毛を失い、気候が変化し、動物の生息地が変化した結果、我々の祖先はサバンナに移り住む。二足歩行を始めた。直立二足歩行により、脳を下から支えられるようになったので脳を大きくすることができた。太陽にあたる面積が少なくなり、目の位置が高くなったので遠くを見渡せるようになり、エネルギー効率も良くなった。前足は道具を使うものに役目が変わり、多くの食べ物一度に運べるようになった。そしてそれぞれの事柄は互いに影響しあっている。

なぜ人は重い赤ちゃんを産むのか。脂肪率は類人猿の五倍である。その脂肪は脳を作るため

のものらしい。新生児の脳は三段階で成長するという。1年で2倍、5年で大人の90パーセント、12歳から16歳で完成するそう。その一つに類人猿に見られる食物分配が目玉されている。人間はその場で食わずに持ち帰り仲間と分配し、共に食べる。そして見えない物を欲望するところができるようになった。速力の劣化、俊敏性の減退、木登りの能力と消化能力を減少させ、共感力増加に基づく社会力を選んだ。長距離歩行、器用な手、食物の運搬が共感力に作用しているらしい。そして共同での子育ても促さるだろう。それらは互いに影響しあい脳の大きさにも影響を与えていると思われる。

狩猟を行うようになり、走ることを覚えた。体毛を失ったことが功を奏し、汗をかき運動をする生活様式になる。残った髪の毛は熱の持ちやすい脳を冷やすために生えている。ヒトは他の類人猿と比べても多くの汗腺を持つているため、十分な体温調節をすることができ。体を動かす欲求も多くの汗腺が作用しているからかもしれない。

先週より溪の滝を見に行つた。終介はまだ近くで感じているのだが、いつか一緒に飛び込みたい。裸足で水の中に入っている

と度々足の裏を切る。そのたびに人が川や海での生活に適していないんだな、と感じる。木のぼつたり、ぶら下がったり、身体を通して自分が自然の中の生活に適してはいないことを実感する。ヒトは自然の中の生活から離れて久しい。昨日は蓮を切りに沼地に入り肌が露出してた箇所が他の葉で切れていたりした。泥だらけだったがそのまま新幹線に乗り帰るのは気が引け、着替えてから帰った。

我々の祖先も、家の猫も恐怖を感じたら、毛が総立ちになる。体を大きく見せることが意思表示にもなる。この毛を立てるための筋肉はヒトにも備わっている。我々は鳥肌を立てることができ。衣服を纏いほとんどの毛が減少した。今の生活様式に必要な反応ではないが身体に残っているものの一つで、他にも尾骶骨も尻尾の退化したもので、いずれも自然の中で生活していた名残である。蓮池の蓮も先祖返りして白い蓮、八重の蓮、一重のものなど様々であった。尾骶骨の生えた人間が生まれることもあるそうだ。地球は遠い時間と生物の面白さで満ち溢れている。研究する気にはないが、見たり聞いたりするのは好きだ。

霊長類の中でもゴリラやオランウータンなども含む類人猿は早期に顔の毛を失ったという。表情を使つて我々は意思疎通をしていることがその原因としてあるそうだ。その中でも目の情報は非常に大きい。目に関する慣用句や諺が多いのもそのためだろうか。人に関して言えば視覚からの情報が8割ほどであるという。そして相手の目からも多くの情報を得ている。人は人の中で生活するにはたくさんの人の顔から無意識に自分の行動を決めてしまっているのかもしれない。産まれた頃から終介を見ていても人によってコロコロと態度をかえ、7ヶ月を過ぎると、相手の喜ぶことを探して何かをする仕草が増えたように思う。大切なことだが一方で自分の世界の中に入り込めるような環境作りも夫婦でしている。今日も妻が洗濯物に夢中になる終介の動画を見せてもらった。良い表情である。多少危なかるうと、本人の主体性を守り、没頭できる場を作れる母親は本当に凄いと思う。

人以外の動物は絶対音感を持つているらしい。言葉を解釈する上で音程は重要視されず、一音一音の意味が大切になる。音程に気をつけて話を聞くと、

言葉が聞き取れない。自然と絶対音感に頼られていく。音楽に携わっていると、その感覚が衰退することを止めることができるのだろうか。音楽に携わっている人に絶対音感を持っている人が多い。

音階は音を記号化したものである。一方でノイズともいわれる音達も存在する。ノイズも音階に当てはめることもできないが、無理に音階に当てはめなくてもいいのではないかと思う。言葉に関しても話す言語からはみ出た言葉は、ただの音である。

幼児教育の世界ではよく、「ぴちぴちや」「ざざあ」などのオノマトペの効果が期待されている。言語の中ではまだノイズに近いから注目されているのかもしれない。言語とただの音の間にあると思っている。言葉以外の音を口からも出すように心がけているのだが、これが難しい。ヒトとしての感覚に磨きをかけたい。

たくさんさんの音に囲まれて、汗をかくことを楽しみ、脳を充分に使って考え、人との関わり合いの中で自立をし、精神的に豊かな生活をおくり、善く生きて欲しい。些か願ひすぎか。自分も目指すところである。



岡山・流枝会で蓮の立花

華老の上野淳泉先生指導のもと、今年も早朝から蓮を採って立花を立てられた。右の写真は健一郎が立てたもの。なかなか味わい深い蓮一色だ。 仙溪



徳島に訪れて

健一郎

徳島の気候で育った力強い花々と機転と場を巻き込み、確かな技術が見られた気持ちのいい花会だった。様々な文化と花があるのも良かった。武田先生と50年伴走した企画の藤原さんからお話があった。

「家が上がるとな玄関にお花が飾ってあつて上がるとお床があつてお軸がかけてある。その横の違棚には壺が飾ってあつてな。全部で一つの作品になつてんよ。やけん、そんなふうに会場の設えもできたらつて思つてみんなで形にしたんよ。ほだな、展覧会とかなくやつてるけどな、お花がないとあかんのや。生きてるもんがこう繋いどるからかな？絵とかでも抽象的であつたらあるほどこう、入れんのや。やけどなお花が繋いでくれんねん。器だけでもな、あかん。見たことないお花でも見たことあるお花でも関係ないんだよ。」

本当にそうであるか私が判断できる事ではないが、伺ったことに覚えはあつた。言葉に時間の重みと強い感情を感じた。その人の力である。 花展を楽しんだのち、武田慶

園先生の娘さんとお孫さんに徳島のほんの一部を紹介していたのだが、訪れた各箇所でも文化の匂いを感じた。次回はゆつくりと周ってみたい。

お孫さんは私と同じ歳で好奇心が強い。矢野陶園さんで見た置き物を見て、「可愛い。」と楽しんでた様子に心が和んだ。純粋で真つ直ぐ。それは健康的でとても良い入り口だと思う。作家の名前や名品と呼ばれたものにしか興味がないのとは対極にある。好意の感情から、見立てるきっかけが芽生え、それぞれの文化が実生活に溶け込んでゆくのだろうか。様々な発見があつた徳島の日だったが、多くの方にあたたく迎えられ、初対面の方ともなぜか懐かしさを覚える時間を過ごした。



いけばな
桑原専慶流

テキスト

2023 年
10 月号
No. 724

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



菊一色 立花

△表紙の花▽ 健一郎

菊・糸菊数種（菊科）

小菊数種（菊科）

乱れ菊数種（菊科）

寒菊（菊科）

銅立花瓶

満開に咲いた菊達。菊の葉だけのアしらいをしたりして景色を出すのもいいが、咲いた菊もやはりいいものである。程よく茎に動きのある菊を副と請に生けることができた。立花の動きの要である。真にかがりび菊を



生けているので正真は肥後系の菊を生けると華やかさが増す。できるだけの菊の種類を集め、景色に厚みをつくと重厚な立花になる。
請に力があるので左に流枝を出してバランスを整えた。



請

見越

正真

真

副

控枝

流枝

中央Ⅱ胴
中央下Ⅱ前置



秋の七草 生花

△ 6 頁の花 ∇ 健一郎

薄すすき (稻科)

藤袴ふじはかま (菊科)

葛くず (豆科)

萩はぎ (豆科)

女郎花むらなな (女郎花科)

桔梗ききょう 2 種 (桔梗科)

河原撫子かわらなでしこ (撫子科)

煤竹すすだけ 竹筒

13 世、14 世の家元がテキストでいけた秋の七草の生花を見てから、自分もいつか挑戦してみたいなと思っていた。何年か思っているとふとその時は来るものである。秋の七草がタイミングよく一度に揃うことは難しく、三つのお花屋さんを訪ねて揃えた。お花屋さんで葛と萩さえ確保すればあとは運次第である。生け終わり、撮影の際に家元から副ふしの萩の葉を残した方がいと助言を頂いた。時間をおいて見返すとその大切さがよく





分かった。毎月のテキストの撮影での指導は僕のいけばなにとつて大切な時間である。皆様に育てていただいているなどよく感じている。これからも変わらず、のびのびと花を生けていきたい。

野^の竹^{だけ} 生花

△7頁の花▽ 健一郎

野竹^{まう}（芹科）

陶扁平壺

野にあると気が付かないのだが、お花屋さんで見かけるとよく目立っていた。その姿形がどこか新鮮で他に何も取り合わせず、お生花にした。切っているとセリ科独特のスツとする匂いがした。ある場所が変わるだけで印象は変わり存在感が増す。





蓮一色砂物 健一郎

蓮（睡蓮科）あし 葦（稻科）

姫岩菖蒲（百合科）

小菊（菊科）

銅砂鉢

今年も、藤井隆也さんの屏風と共に鹿王院さんにて、社中展をする事ができた。お花の気持ちよさそうな空間を作る事を心がけての展覧会で、花の様子を見ている限り成功したのではないかと思っている。

写真の花は、今年の夏に立てた立花の蓮の葉を乾かし、茎も取っておいた。虚実絢交ぜの景色。それぞれがそれぞれに反応している。あしらの葦が蓮をより引き立てている。枯れても綺麗だったが、やはり、緑が綺麗な方が良い。場にあったいい花が立てられた。次は葉がもう少し太陽に当たって茶色くなった葉で生けてみたか思っている。

正真のヒメイワシヨウブが可愛らしく全体に勢いをつけている。枯れものを生けるときには、雌株の小菊など、生きたお花がより綺麗に見え、枯れものも生きる。枯れものだけでは、枯れものの良さは伝わらないと思っている。



松一色立花 健一郎

松（松科）

晒木

陶花瓶（宮下善爾作）

藤井隆也さんの松を生けるために作られた屏風の前に松一色の立花を立てた。今回お花屋さんを用意してもらったのは、北陸地方のなんとも上品でつややかな葉で自由な枝ぶりの松。その辺に生えていても見過ごしてしまいそうなものだが、花フジさん、流石の審美眼である。自分もこうありたいと思ってしまふような松だった。

今までの松一色とは比べ物にならない難しさで、形にするのに悩んだ。今まで色々な松に触れてきた。生けたと言う意味ではなく、どこに行っても松があれば触れてみたくなるのだからこのような松には出会ったことがない。会期中を通して毎日枝を足したり引いたりして楽しんだが、まだしつくりときていない。生けると最後は納得することが大半なのだが、なかなか難しいものである。



中国旅行記

健一郎

今までの旅は、頭から言葉がたくさん湧いて出てきた。帰りのフライトで言葉が溢れてそれを文字に懸命に起こしていたのをよく覚えていて。時には旅の途中で言葉が溢れ、文字に起こしていた。言葉が頭に浮かんで消える。あるうちに形として残したくなる。今では妻も慣れたようだが、入浴中に頭を泡まみれにして、腰にタオルだけ巻いて消えてなくなりそうな言葉を控えることはいまでもよくある。

今回の中国の安徽省、浙江省の旅では、頭に言葉が残らなかった。その代わり、身体にはまだ感覚が残るという変わった旅だった。

アヒルや、カエル、鳥の足の食感、そして舌に残る山椒のピリピリや喉の奥を突くような唐辛子の柄に柄を合わせるような感覚で、臭みのあったであろう肉も食事になっているのには驚いた。普段慣れない野菜も、含めてどれも美味しくいただいた。日本には無いものの生かし方が新鮮で面白かった。パイナップルに、蜂蜜梅干しを少し挟んであつ



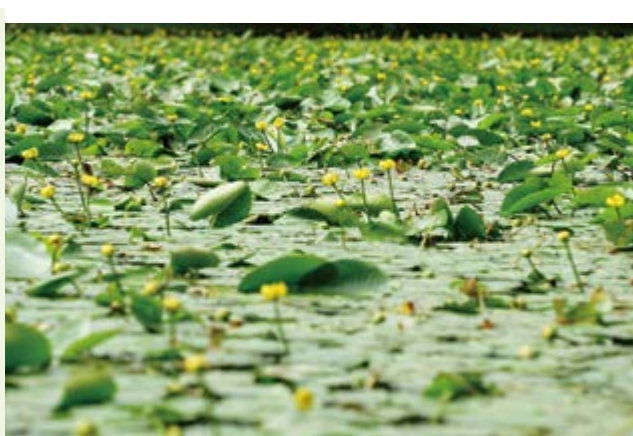
たのは一つの例である。

仙境を彷彿とさせる黄山に登った日、山頂で夜中に冷たい石の上に座り、寝転がり、目を瞑り呼吸をしていると身体が山の空気と交わっている気がした。その後、景色を見ながらインスタントのラーメンを食べながら雲が去るのを待っていると、1時間ほどだけが星が望めた。いい夜だった。

日の出前、深い霧が動き、松の露が滴る音の中、たくさんの人が日の出を一目見ようと待っていた。僕達は山頂のホテルに泊まったが、一晩、山頂付近で朝の陽を待つ人が大勢いた。日の出の1時間前から待っていたのだが、ダウンを着ていても寒さが身体に伝わる。皆よく一晩を越したものだと思わされた。

日の出を待ち望む人々の声。曇り方が強く、見えないであろうと諦めかけていた時にほんの10分ほど薄雲になり、日の出を見る事ができた。外で一晩を越しても見る価値のある10分だったなと思えた。早朝の鳥の鳴き声を聞きながらの下山は気持ち良かった。山法師の実を食べるリスも鮮明に覚えている。

富春山の麓では金木犀の香りが場を包み込んで





香り、食感、触れたものの感触、木や、虫の声の余韻がまだ残っている。

考えずに中国で在れたのは間違い無く、かよ（りゅう）（嘉代）さんのおかげだ。浙江省は地元で、富春

前日に夕食でお世話になった山の中のお店で、木を数本頂いてお花を生ける時間は特別なものだった。忘れられない富春山での思い出である。こんなに贅沢な経験はできないだろう。本当に気持ち良かった。富春江で触れた柳の揺れる音と、木々の感触、釣りをしている人をちらほらと見かけた。景色があたたかく身にしみる。今もまだよく釣れるらしい。魚を釣るところを見せてくれた。西湖では、柳の葉と人の声が共にあるのが心地良かった。

いた。竹の葉が揺れる音を感じながら、様々な樹木、草花と川のせせらぎが迎えてくれる。その奥に虫の音が聞こえる。湿度も高く、豊かな場所です。決して特別な樹木昆虫は見かけなかったが、関係性の中で全ての生き物が生き生きとしているように見えた。個人的にはオトコエシが蜘蛛の巣に巻き込まれ、一本だけ上を向いている姿が印象的だった。

山で幼少期はスイカを食べたり、水を汲んで飲む事、蛇の話を楽しそうにしてくれた。中国に関心を持つてくれる事が嬉しいのだと思う。

そして僕の趣味趣向に合わせて旅のドライブとエスコートをしてくれた。登山もだが各場所をゆつくりとたくさん歩いた。その場所、場所ですごした事は僕の宝物になっている。一週間、本当にありがとうございました。次は妻と終介と一緒に、大好きな日本をうんと紹介したく思っています。

通常下調べは言葉で行う。今回は一切していない。言葉を使わない事が新鮮で、新しい感覚での中国の旅につながった。

言葉にできるほどの語彙力も持ち合わせていないからなのか、言葉に収まりきれないほどの体験をしたのかは分からない。

言葉で考えた事は言葉で残せばいい。感じた事は何で残せば良いのだろうか。残らないから、また感じたくなるのだろうか。写真や動画を見返して、想像するしか無いのだろうか。想起するためには、その場でしっかりとそのものを味わっている事が条件である。

いい旅だった！





菊きく一色いつしき 砂物すなもの

健一郎

乱れ菊数種（菊科）

陶砂鉢

今年も無事に乱れ菊を生けることができた。株分けならではの見せ方が、少しは様になつてきたのかなと感じている。今回は両者の胴々前置きにかけての景色の差が見どころである。雄株の正真は、全体のバランスを考え、左に振った。今回一番悩んだのが器である。いくつもの器をあてがったが、納得のいくものがなかった。砂物を丸い水盤でも良く映るときもあるが、やはり砂鉢がよく似合う。銅器ほど重たくなく、色が抑えられたものでも良かったかもしれない。砂利、敷板、バック紙で調節した。自由気ままに勢いよくうねる菊は見ていて飽きない。





クシフィディウム・カエルレウム

健一郎

クシフィディウム・

カエルレウム（ハエモドルム科）

デンファレ（蘭科）

陶花器（市川博一作）

南米の春の花で、花屋さん曰く葉だけでは見かけが、花が出荷されるのは珍しいので、撮影のために用意しましたとの事。初めて見る花だったのでゆつくりと楽しませてもらった。白い蕾が咲く前だったので、同じ熱帯のデンファレと合わせ、熱帯の自然を散策した。図鑑やインターネットで自生地を想像して生けた。シンブルな姿形をしてはいるが、クシフィディウムの周りはおそらく多種多様な生き物たちの暮らす場であるだろう。生物多様なこの地域では同じ木を探すことが難しいらしい。そんなことを想像していたらこの器に生けてみたくなった。





イケバナインターナショナル大阪例会

デモンストレーション

会期 11月17日(金)

会場 ホテルニューオータニ大阪

講師 桑原健一郎

(写真①)

両脇に季節の立花と生花を生け、自分の弟子と共に中央に6つの花器に晩秋の花を、手早く生け山、谷、水辺の景色を紹介することができた。

健一郎



エジプトはナイルの賜物^{たまもの}

健一郎

綿^{わた あわい}（葵科）

アロエ（百合科）

枯葦^{かれあし}（稲科）

金属花器（エジプト）

アロエは不老不死の植物として用いられており、ファラオ王に埋葬品としてアロエが贈られていたりしたという。そしてアロエが人々の美容と健康を支える植物でもあった。世界最長のナイル川が氾濫を起こし、エジプトに養分をもたらした。食べ物はもちろんそこから文明が築かれた。麦や綿を栽培し、そして葦で家を作って日々の生活を営んだ。川が生活を支えたのである。花を介して想像するとより感じられる気がする。花屋さんの花を通して生きている内に、年々世界中の気候帯や世界の植物の原生地を歩いてみたい気持ちが募っている。長い目で見て、少しづつ予定を立てていくところだ。

